
正義を求める正義の味方

wreath

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義を求める正義の味方

【Nコード】

N8524J

【作者名】

W r e a t h

【あらすじ】

答えを得たと、紅き騎士は言った。

もう諦めないと、紅き騎士は誓った。

そして騎士は旅立つ。決して交わることのないはずの世界へと。

はたしてそこで騎士の望む正義を見つけられるのか。

はたしてそこで騎士は自己の正義を貫けるのか。

騎士は憧れた父親に、かつての自分に、まっすぐな騎士に、赤き少女に誓う。

「俺も、これから頑張っていくから」

当ssは、自己解釈、オリジナル設定、知識不足、矛盾
cte・・・様々な不安定要素が組み込まれています。他作者様の
言う「亀更新」の数倍遅いです。原作をこよなく愛している方はブ
ラウザの「戻る」をどうぞ。しかも作者はクズのような性格です。
それでも読みたいという特殊な方のみお進みください。

プロローグ（前書き）

初っ端からオリジナル入ってますのでご注意ください。

プロローグ

ある1人の男の話をしよう。

ただ前だけを見据えて歩き続け、捻じ曲がってしまった、そんな存在。

苦しくて苦しくて。それでも自分の決して届かぬ理想を追い求めた。辛くて辛くて。何度も諦めかけて、心の中で泣いて、慟哭して。最後には歪んでしまった、そんな愚者。

正義の味方。

何処までも美しく何処までもきれいな、そして何処までも歪んだ歪な夢。

少年はその綺麗な夢に憧れて、青年はその夢を何時までも胸の奥に描いて、成人はその夢に敗れて……。

ずっと悔やんでいた。何故自分はなしえない夢を追い続けてしまったのか。何故途中で気付くことができなかつたのか。何故自分だけがここまで苦しい思いをしなくてはいけないのかと。

だが、それでも成人は優しかった。何時までも味方で在ろうとした。

「こんな苦しい思いをするのは、今この場所、この世界にいる俺だけがいい。別の場所の、別の世界にいる俺は、こんな苦しい思いをしなくていい」

成人と同じ結末は、青年にはきつすぎるから。

彼は歩き出した。正義の味方などありもしない夢を持つ他の自分の下へと。自分以外の自分が夢に破れ傷つかないようにするために。

しかし、青年は総じて頑固で一途で愚かだった。言葉をもってその夢を、生き方を変える青年は一人としていなかった。

あるひとつの手段以外では。

殺すこと、以外では。

仕方が無いと言ってしまえばそれまでだ。仕方が無いと割り切っ
てしまえばそこまでだ。

仕方が無かった。言葉では何も変わらなかった。殺すしかなかった。殺すことでしか青年の道を変えられなかった。殺すことでしか夢に破れずに済みます方法が見つからなかった。殺すことでしか世界に裏切られずに住む方法が見つからなかった。

殺すことでしか、青年を救えなかった。

故に彼は踏み出した。青年を殺すために。救うために。

だが、それは無限に続く旅の始まりだった。

幾つ、幾十、幾百、幾千、幾万の世界で。幾人、幾十人、幾百人、幾千人、幾万人もの自分を殺した。時に殺せず、時に殺される。永遠に続く無限回廊、平行世界。

世界の守護者として自分を殺して、戦争の従者として自分を殺して。

幾重にも分岐した世界。ネコが一匹欠伸したかしないか。紛争地域で子供が1人死んだか死なないか。平和な国で子供が1人生まれか生まれぬか。

そして彼は磨耗していく。磨り減っていく。

何のために青年を殺しているのか、その理由を見失っても。

青年を殺すのは、愚かな夢を目指した自分自身を消すためだと誤った理由をこじつけても。

彼は自分を殺し続けた。

そんな彼の無限に続く無限の旅の最中、私は彼と対峙した。

私は彼の殺そうとする彼の護り手として、戦争の従者として。彼はかつての彼の知り合いの従者として、戦争の従者として。

彼と刃を交わしたことなど片手で数えられる程度のものだったが、それでもわかる。

彼はとても気高かった。英霊としての誇りなど持ち合わせていないと、そんなものに拘るのならさっさと捨ててしまえと言った彼が。

彼はとても優しかった。戦争では常に冷酷なまでに状況を見据え、勝つ為であれば腕の1本や2本軽く差し出すであろう彼が。

そして……彼はとても強かった。彼には戦闘のセンス、技術のどちらも決定的な一に欠けていた。それでも彼は強かった。私1人では到底敵うはずのない強大な敵に一步も退かず、何度も倒してみせた。そのときの彼の背中が、私が何年歩き続けようと並ぶどころか、追いつくことすら叶わないと感じた。

結局、私の知る彼は自分を殺すことが出来なかった。

私の知る彼は、未だ無限回廊をさまよい続けているのだろうか……。ああ、彷徨い続けているのだろう。

何故自分が自分を殺しているのか。その理由を磨耗した脳で思い出すことが叶わなくなっても、殺し続けるのだろう。守護者として、従者として。

悲しすぎる結末だ。ああ、それならば私は此処で願おう。彼が守護者や従者以外で世界に召喚され、そこに殺すべき自分のいないことを。

……彼が……

……もう一度……

……正義の味方を……

……目指せる世界であることを……

頼みましたよ……宝石翁

正義を求める正義の味方

World's Justice Magister Magi
Noble red's justice or
Wo

プロローグ

ウェールズにあるメルディアナ魔法学校。魔法世界では言わずと知れた魔法学校である。外観からしてかなり立派で生徒数もそれなりの数があるが、魔法世界の学校と比べるとその二点など薄れてしまふ。

なら何処が有名なのか。何故有名になったのか。

稀代の大英雄「千の呪文の男」サウザンドマスターを輩出した学校だからだ。……最も、当の本人は中退しているのだが。

今から語られるこの物語は、彼が英雄と呼ばれるよりも前の時間から始まる。

Side ナギ

「いやー……久しぶりの我が故郷。多少の進展があると思いきや全く期待を裏切らない田舎っぷり」

ちょっとした小高い丘から望めるウェールズは彼の出て行った当時となんら変わりの無いように思える。

いやまあ……………1、2年いきなり派手に生まれ変わっても困るだけだけどな。

……………さて、帰ってきたのはいいがこれからどうするか。あの頃は俺も若かったから……………いや、今でも十分に若いかな！むしろ幼いぜ。……………爺ちゃんに何にも言わずに出てったから顔を出すとまた説教だ。

同じ理由でスタンのジジイも却下だろ。……………俺って此処での友好関係めっちゃ狭いなー。ま、魔法学校中退の肩書きは伊達じゃなあってことで納得してくか。

じゃー今日一日は……………図書館にでも潜り込んで幾つか呪文と高値で売れそうな魔法書を拝借しますかね。そうそう、自分で言うのもなんだけど俺馬鹿だから職員以外進入禁止区域にうっかり入っちゃうかもねー。

「よつと！そうと決まれば行動開始！待ってるよー俺の行動資金！
！」

ウェールズは今日も平和なり。

捕まった。甘く見てたぜメルディアナ魔法学校。俺がよく遅刻を免れるために使ってた抜け道が見事に封鎖されていた。それだけで

なくある種の感知結界まで敷いてありやがった。十中八九俺対策だろう。

そんなこんなで今俺は校長室にいたりする。ついでに言えば俺は正座。……………早速足が痺れてきましたよ？

30分間は流石にきつい、ナギです。爺さんがなかなか解放してくれない。

そりゃー黙って出て行ったのは悪かったと思うが、俺も反省してるんだからいーじゃないの。

「……………というわけじゃナギ。その鳥頭で理解できたか？そもそも聞いておったか？」

「聞いてた聞いてた。だーから悪かったって。な、この通り反省してるからよ」

「全然反省してるように見えんのはわしが老眼だとも言いたいのか……………まったく」

なんだかんだで説教が長いんだがいい人なんだよなー爺さんも。説教だけでお咎めないし。

とりあえず爺さんには卒業……………中退生の凱旋とでも言っで一通り校舎を見て回ろう。他の先公が監視につく可能性も否めないが並の魔法使いなぞ俺の相手にすらならん。速攻で撒いてやろう。

「ま、別にいいじゃろ。てきとーに歩き回ればよい」

「さっすが爺さん、話が話が早いじゃないか。そういうところ俺は好きだぜ」

「調子ずきおつて……じゃが程々にしといてくれよ。利用者がそれほど多くないとは言え、流石に露骨なのはひかえとくれ」

「あれ？なんか、俺の考えなんかお見通してことか？」

「お主の行動は毎度毎度読みやすいんじゃない。多少は頭を使わんか、頭を。」

「俺は行動派なんだよ。考えるより動け、習うより慣れる、だ」

そう言っつて俺は爺さんのいる校長室を後にする。それじゃ、図書館に向かうとしましょうか。

流石旧世界有数の魔法学校だ。気が向いて本に手を伸ばすだけでそれなりの本が勝手に手に納まる。幾つか雷系上級魔法もメモしたし、マホネットで売りに出せば数万から十数万で裁けそうなのも8冊手に入れた。

……にしても、ここに入ったときから妙な魔力が働いてるんだよな。だがその魔力の出所が全く特定できない。恐らくかなり嚴重に掛けられた結界型認識阻害魔法。この俺様でも違和感を軽くしか感じることも出来ないものだ。

それは暗にかなり重要、もしくは危険な魔道書がここに眠っていることになる。

恐ろしく興味がある。かなり面白そうだ。恐らくあの爺さんが言った「露骨なのは控える」とはこのことではないのか？浅いところまでなら多少目を瞑るが、深いところつまりは結界内には入るなど。

かなり上位の魔法使いにしか感じることも出来ない認識阻害結界。断言は出来ないがこの学校でこれを感じることも出来るのは俺と、爺さんのみ。元から結界が作動していて、その中に本があるのか。その結界に元より護られている魔道書とは一体何なのか興味がわく。爺さんが発見して、あまりにも危険だから結界内に閉じ込めたのか。爺さんが危険だと認めたのはどれほどのものなのか興味がわく。

そのどちらにせよ、ナギ・スプリングフィールドにとっては興味対象ではない。

ここまでお膳立てされて探すなんて方が拷問だよな！。流石にお気に入りの杖じゃないが予備を持っている。だがこれだけでは心もとない。何かないかと服を弄ってみると片手大のナイフが音を立てて落ちた。

「おーここについてからすっかり忘れてたぜ」

ナイフの名は「暴食」^{グラトニー}。

使用者の込める魔力によって切れ味、質量、密度が変化するマジックアイテムだ。大量の魔力を込めれば全てのパラメータが上がり、溜まっている魔力を抜けば全てのパラメータが下がる。

しかし能力はそれだけではない。もう一つの能力はその名の示すとおり、暴食である。込められる魔力に上限はないに等しく、魔法協会のほうではナギの魔力の2・8倍までが許容範囲であると推測されているのである。込められた魔力放出も可能ではあるがそれを行うと込められていた魔力がパアになってしまう。だが同時にその瞬間だけはあらゆる防御を潰せるほどの破壊力と、あらゆる攻撃を防げるだけの防御力が手に入る。しかしその時間は本当に短く、上限まで入れた状態でも1分が限界なのだ。

……これもなんだか言って使い勝手がいいからな。いや、それは魔力が豊富な奴の台詞か。ま、杖に暴食があれば問題ないだろう。

あんま得意じゃないんだが……対結界用の呪文でも試してみつかな。たしかこのメモの3ページあたりだったはずだが……。

「つと発見。えーつと……エト・アルマ・ウエルバ・ウルネラント……効果範囲がわからんが広いにこしたことはないだろうな……」
『逆巻く時間 我は残る 逆巻く時間 周囲は残る ここは幾つも遡る』

……過去の讃歌』」

一瞬にして図書館内全てに魔力が満ちる。外見的变化は何もなく結界も作動したままだ。

「……………きた！反応ありだぜ！！」

場所にして図書館右の隅。そこには何の変哲のない本棚が並んでいるだけ。認識阻害とはつまるどころただの時間稼ぎでしかない。そこにあると一度でも認識できてしまえばもう効果は何一つとしてなくなるのだから。つまるどころその本棚はあくまで虚構。結界の作用でそこにあるように見えて、そこにあるかのように触れられる。

だが、認識したナギの目には本棚ではなく重圧な石の扉が立っている。取っ手などは存在せず、その中心に魔方陣とラテン語が刻まれている。ナギは日常的なラテン語文を読むことは出来ない。勉強サボってだから。

だからナギは

問答無用で破壊した。石の扉を。

扉の先には広い空間があった。恐らくこれは空間歪曲魔法技術の応用だろうと1人で納得する。四方の壁は高く、窓がない。そのため日の光も届かない。埃っぽい空気の中を歩く。

目の前には腰ぐらゐの高さの石の台座。そして……真つ赤な本。

……なんだ、これは？裏表紙、背表紙、表紙の何処にも何も書かれていない。明らかに何処でもありふれていない本。

そして、矛盾。

あれだけ大掛かりな結界でその中に入ったこれは魔力の欠片一つも感じられない、まさしくただの本。

手に持ってみても何も感じない。ページを1つめくってみる。そ

ここには扉とおんなじラテン語の文字が書かれていた。

もしかして、この文字の羅列がこの部屋、引いてはこの本の秘密なのだろうか。とりあえずメモしておこう。後で爺さんに読ませるために。

でもこの本どうすっかなー。何にも効果はなさそうだし、高く売れそうにもないけど……ここまできて何もしないで帰るっていうのも癪だしな。もって帰っちまうか。本当に使えなきゃ古本屋にでも売り払えばいいし。

片手に本を抱えて石造りの隠し部屋を後にする。

振り返ればそこには本のぎっしり詰まった背の高い本棚が並んでいるだけだった。

「おーす爺さん。ちょっと聞きたいことがあんだけどいいか？」

「なんじゃいナギ？夜遅いからできるなら勘弁して欲しいんじゃが……用件はなんじゃ」

「ちよいと本読んでたら気になる文章があつてな、これってなんて書いてあるんだ？」

当然みせるのは書き写したあの文章だ。この文章について何か

アクションするか、いやただ訳してくれるだけでもいい。そこからこの本が一体何なのかを見極めることが出来る、はず。

「……………ナギ。お主はこれが読めんのか？」

「ああ。俺の学力については良くわかってるだろ？だから聞いてるんだ。呪文関係の言葉なら発音から何まで完璧だがこういうのはな……………」

「ならお主には指に触れている言葉を自分の最も理解しやすい言葉に脳内変換してくれる呪文を教える。それを覚えて自分で読め」

そう言って爺さんは俺のメモ帳を奪ってサラサラと書き綴っていく。ああ、呪文の種類によって書くページとか決めてたのに…………。

書き終わったら書き終わったでポイってかんじで投げて寄越すし…………このメモ帳が駄目になったら俺は呪文が使えなくなっちまうんだぞ？理解してんのか、ジジイ！

まあ、ありがたく頂戴しますよ、そんなくそありがたい呪文。勉強せずして字が読めるって素晴らしい！

今夜は（も）野宿だが魔法がありや光なんてものはいつでも作り出せる。この本だってそれほど厚くないし重くもない。読み終わるまで左程時間がかかるわけでもない。なら今日中に読み終わってさっさと売り払うとするかな。

「ほれ、用事が済んだのならさっさと出て行かんか。わしはもうねむい」

「ああわかったよ。眠いっつてもまだ九時過ぎじゃねーか。年寄りつてのも楽じゃねーな」

「そう思うのじゃったらもう少しいたわったらどうかね？」

「男に優しくするのは、生憎趣味じゃないんでね。いい夢見ろよ、爺さん」

そう言っただけで俺は部屋を出て今朝立った丘へと向かう。

丘についた頃には時間にして九時半を回ったところだった。本来空を飛んでくれば数分でたどり着くはずだったが、途中で珍しく酒場から出てきたスタンの爺に見つかって今まで追いかけてこをしていたのだ。

まったく、無駄な体力使っちゃったぜ……。あの爺は無駄に元気だから困る。俺を見かければ、立派な魔法使いがどうのこうのと説教してくる。別にそんなものどうでもいいっつーの。

さて、とりあえず翻訳魔法を掛けてっつと

「それじゃ……………秘密の本を読むとしましょうか。せめて面白いことが書いてありますように」

『夢の続きを…』これが開いてすぐ書いてある言葉だった。あの扉とこの本に共通している一言。これは何を意味しているのだろうか。疑問に思うことなく次の文字に目と心と全てが引き寄せられた。

『Altria Pendragon』

アルトリア……ペンドラゴン！？おいおい、こりゃ一体何の冗談だ？ペンドラゴンって確かアーサー王の姓だったよな。ってことはつまり、この本を書いたのは今は亡きペンドラゴンの子孫の書いたものなのか！？しかもアルトリアってアーサーの女性の読み方と同じじゃねーか！………どんだけ大層な名前なんだよ。

そんなことを考えて「実はすっげー値打ちもので触るだけで価値さがんじゃねーの？」等、意外なことに焦りと緊張でページをめくる手が汗ばんで震えてくる。まるで自分の物じゃない他人のオモチャを壊さないようにと気遣う子供のようだ（子供だけだな）。

自分にはこんなにも子供っぽい面があるのかと驚いたが（子供だけだな）この際大して気にしなかった。気にならなかった。

素早く内容に目を向けると、そこに書かれていたのは正義の味方を目指す一人の男の話だった。

だがそれはハッピーエンドになる心温まる童話などではなかった。何度も挫けかけては起き上がり、何度も転んでは泥にまみれて再び起き上がる。そんなことの繰り返し。

やがて男は誰かを救えるだけの力を手に入れた。それと同時に立ち上がる。俺は、正義の味方になるんだと。

だが、男の最後は呆気無いものだった。振り返らずに手の届く範囲だけを助けて、助けて、助け続けた結果に嘗て助けた人に裏切られて殺された。

それでも自分を殺した相手のことは憎まなかった。それでも自分は正義を目指し続けようと思いつけた。だが、彼に与えられた仕事は感情も意思も与えられずに淡々と人を殺すだけのものだった。

『生きている限り争いはどこに行っても目に付いた。きりが無い。何も、争いのない世界を望んでいたわけじゃない。ただ俺はせめて自分の知りうる世界では誰にも……涙して欲しくなかっただけなのにな。』

1人を救えば、そこから視野は広がってしまうんだ。

1人の次は10人、10人の次は100人、100人の次は……

…幾つだったろうな。

そこまでできてようやくわかったよ。俺が抱いていたものは都合のいい理想論だったと。

だが…そんなことはどうでも良かった。初めから、感謝して欲しかったわけじゃない。英雄などと持て囃される気もなかった。

俺はただ……誰もが幸福だという結果のみが欲しかった。

一人を救うために何十という人の願いを踏みにじってきた。

踏みにじった人間を救う為により多くに人を蔑ろにしてきた。

何十という人の救いを殺して、目に見える物だけの救いを生かして、より多くの願いを殺してきた。

今度こそ終わりだと、今度こそ誰も悲しまないだろうと、つまりない意地を張り続けた。

誰も悲しまない様にと口にして、その影で何人かの人間には絶望を抱かせ…。

それでも、誰かを救えるのならそれでいい。俺は…その思いを守りきれなかった。

意味の無い殺戮も、意味の無い平等も、意味の無い幸福も。俺自身が拒んでも見せられた。「俺」でもなく「正義の味方」でもなく「守護者」である俺には、もはや自分の意思などない。

俺が望んだものはそんなものではなかった！

俺はそんなもののために……守護者になどなったのではない！

『！』

そこにはまるでその男の心からの本音らしきものが殴り書きにされていた。そう、まるで此処だけ男が書いたかのように。そこにはこの男の後悔の念が滲んでいた。

物語の人物に感情移入するとはなんとも自分らしくないと思った。ただ悲しく、悔しい思いが胸の中を駆け巡る。ああ、本当におかしい。この俺が此処まで感傷的になるなんて。

男はただただ人を殺し続けて彼は自分の夢を、理想を見失ってしまった。やがてその精神は磨耗しきってしまい、嘗て自分の掲げた理想に絶望し、そこにいままで抱いたことのない感情が胸の中に芽生えた。

それは憎悪。

やがて男は決意する。醜い自分を消してしまおうと。過去の自分と言う存在を殺して殺して、今の自分と言う存在をなくしてしまおうと。

ついに彼はその機会を得る。お互いを殺す戦争の一員として。

男は、嘗ての自分と対峙した。己の全てをかけて。自分の抱いた絶望を、想いを全てをさらけ出して。それでも……完成された自分でも、過去の未熟で甘いだけの自分に勝つことが出来なかった。

本当に、眩しかった。自分の信じた理想をただ一途に信じ続けている自分が。自分は、自分になどならないと……自分を否定した自分が。

『誓った言葉と、守るべき理想があった。その為なら何を失っても構わなかった。

人に裏切られても、自分さえ裏切らなければ次があると信じ、無くしていった物があって、落としていった物がある。

嘆くこともなく、傷つく素振りも見せないのなら……拾いきれず、忘れ去ってしまう物はいつだって出てくるだろう。

だから……これだけは忘れないように誓ったのだ。

正義の味方になる。

それが自分の願いでないとしても、自己の罪を薄める為の詭弁であつたとしても、守り抜こうと。

例えば世界に疎まれても、世界中の人に疎まれても、この身が呪われようともそれだけは……その誓いだけは。

ただ悲しむ人を見たくなかった。周りが笑っていてくれるだけで幸せだった。そんなものは偽善かもしれない。けど……それを美しいと感じたことはなかっただろうか。

理想を追った。追いつけた。

一度も振り返ることもなくただ前だけを見続けていた。

そのことは……そのことだけは……間違っただけじゃなかった。

ああ……ようやく、ようやく思い出せた。

そんな人生だったけど、自分の物じゃないものだらけの、嘘にまみれた人生だったけど……

私の……いや、俺の人生は……胸を張っていえる、人に誇るものの出来たんだなあ……。

ようやく……ようやく答えを得ることが出来た。

ならば私は突き進もう。もう一度私は正義を求めよう。

例えその先に破滅しか存在しない道のりだとしても、そう信じて……
『果て無き理想と信じて。』

こちらにも先ほどと同じように男らしき筆跡で書かれていた。ただその内容は苦しいだけの感情ではなかった。

歡喜。

あまりにも前向き過ぎるその感状は痛いほどに伝わった。

私は……答えを……私なりのもであるが、見つけることができ

た。皮肉なことに、それをくれたのは自分だった。だからこそ、と男は決意する。

俺は、俺であり続ける。叶いもしない夢を抱き届かぬ理想を追い求める、愚か者であろうと。全てにとつての正義ではなく、己の信ずる正義を見つけようと。

そこでこの物語は終結する。

続きがあるのなら読んでみたいと、俺は思った。これからこの男はどのように生きていくのか。また挫けてはいないのだろうかと、娯楽目的の本などを自主的に読んだのは初めてだったナギは、その物語の先を想像するという行為に耽っていた。

「……………うっし。この本は売らねえ。俺がもらおう！」

本を持ったまま勢いをつけて立ち上がったとき、ナギは気付いた。もう1ページ残っていることに。

しかし過去に濡れてしまったことがあるのか、はたまた人為的なものはわからないが、張り付いていて手ではがすことが出来ない。

そこで思い至ったのは懐にある暴食。慎重にやろうとやらまいと本を傷付けるのは確定なのだが気になってしまふのだから仕方ない。もしかしたら続きなのかもしれないのだから。

「慎重に…慎重に」

ページとページの間になんか少しづつ刃を進めていく。この際多少はパリパリと砕けて欠片となって崩れてしまふのは気にしない。

刃を奥まで差し込めたのでゆっくりと広げていく。

そこに描かれていたのはこれも扉と同じような、いや全く同じ魔方陣。それと英語による文章だった。

英語のコレはとても悲しいものだど、俺は直感的に理解した。そして、それを自然と口にしていった。

「体は剣で出来ている (I am the bone of my sword.)

血潮は鉄で、心は硝子 (Steel is my body, and fire is my blood.)

幾たびの戦場を越えて不敗 (I have created over a thousand blades.)

ただ一度の敗走もなく (Unknown to Death.)
ただ一度の勝利もなし (Not known to Life.)

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う (Have withstood pain to create many weapons.)

故に、生涯に意味はなく (Yet those hands will never hold anything.)

その体は、きっと剣で出来ていた (So as I pray Unlimited Blade Works.)

プロローグ（後書き）

初めまして。初めてここに投稿させていただくことになったwreathと申します。

一応第一話ですが、クロスキャラとか今のところ出てきてません…
…でいいのかな？名前はノーカンで。まあ誰が出るかは丸分かりな
んですけどね（笑）

マンマンテロテロは登校地獄の一部だということにしてナギの始動
キーを作りました。ちなみに意味はありません。こんなカタカナだ
とカツコイんじゃないかな？って感じで作りました。

ナギや魔法学校の校長はこの話の感じだとオリキャラっぽくなっ
ちやいました。

そういえばエヴァって紅き翼の面子といつ知り合ったのかなーと思
いまして。詠春は麻帆良に居れば会えるかもしれないですけど古
からの知り合いみたいだったし、アルなんか登校地獄後一度も会
ていないようでしたので、登校地獄より以前に知り合ったってこ
とですよ。そこらへん曖昧だ。

（オリジナルの紹介）

・ 『逆巻く時間 我は残る 逆巻く時間 世界は残る ここは幾
つも遡る 過去の讃歌』

対結界魔法用魔法。自分自身ならびに周囲のものの時間を一切変更
せず魔力の流れのみを逆行させる魔法。周囲のものに対して時間移
動を行うわけではないが、時間を遡るといふ行為には違いないので
消費魔力がかなり大きい。しかし効果も絶大で、結界の張られたそ
のときの寸前まで魔力は遡り何処が結界維持の起点になっているの
かを判別することが出来る。魔力感知が得意だったりする人なら百

発百中で結界を抜けられる。

たとえば、修学旅行でネギの嵌った結界も、どの時間どの場所どの箇所か特定できる。感覚としては何も無いところにいきなりポンと出てくる感じ。

・ 『グラトニー暴食』

マジックアイテム。アンティークとしての価値も高い一品。多少のことは本文でも語っているので省略。上限まで魔力を溜めて魔力解放したときの威力は、攻撃力と言うと乖離剣エアの2倍弱。防御力と言うとアイアス25枚くらい(3.5倍かな?)。アヴァロンは防御というより結界なので比べる対象ではないと判断。強すぎるだろ、と言いたい画面前の皆さん。まず魔力を上限まで上げることが出来ないでしょうし、これだけの力を使った場合魔力反動でまず死にます。死ななかつたとしても数日間体が全く動かさなくなりそうです。そういったデメリットもあると頭の片隅にでも覚えて置いてください。また、これは上限まで溜めた場合で、そこに届いていなければ威力は極端に落ちます。某RPGのドラクエのマジックの魔法の威力は極端に落ちます。あと魔力がカラでない限り刃が欠けたり真つ二つに折れても貯蓄魔力を消費し修復することが可能。基本的に自動修復だがさせないこともできる。

第一話（前書き）

書き忘れましたが、これは処女作です。これおかしいだろ、みたいなところも多々あります。駄文ですみません。

技量もないくせにクロスに挑戦って、無謀ですよね…。

エミヤシロウを殺せなくても構わない！正義の味方を目指せなくたって構わない！俺はただ守りたいんだ、自分が見つけた答えを！爺さんに憧れた正義でもなく、俺が！俺自身が！探して探して見つけられた“正義”を！彼女との……約束を！！

俺はこれから頑張っていくんだと、大丈夫なんだと。

ああ……だがこの想いは何時まで持つていられるのだろう。参加した聖杯戦争の記憶が既に記録化し始めている。遠坂の余りにも乱暴で粗悪な召喚。校庭でのランサーとの死合い。衛宮邸でのセイバーとの邂逅。何もかもがぼやけていく。

また私は……アーチャーから守護者へと戻るのだろう。意思も感情も捨てただだの便利屋に成り下がるのだろう。

ならせめて、この身がアーチャーである間だけは気高くあるう。せめて私が俺である間だけは素直になろう。決して許されず叶うことのない夢を、願いを描こう。

……せめてもう一度……

……エミヤシロウとして……

.....正義を目指し.....

.....自分の理想と正義を手にしてみ

たい.....

正義を求める正義の味方

Magister Nobleres
World's Justice
Magister

第一話

Side ナギ

それはただの偶然だった。

手にしていた暴食をいつの間にか強く強く握りすぎていたのか手の薄皮が剥けて少し血が流れた。その血が暴食を伝って魔法陣の中に数滴垂れた。痛みを感じて手を開けば暴食が手から滑り落ちて魔法陣に刃を立てた。

はつとなり手を伸ばしたときに巨大な魔力の奔流を感じた。あふれ出る魔力は暴食など軽く凌駕し、ナギすらも霞んで見えるほどのものだ。そんな中で暴食の貯蓄魔力がどんどん絞り取られていくのがわかる。

紅い本は一定の魔力を喰らって満足いったのか、次に魔法陣が紅く輝きだす。と同時に今度は暴食にどんどん魔力が貯蓄されていく。

「な……………何が起こってんだ、こりゃあ……………」

多少の違いはあるもののそこに輝く陣はこの世界に存在する物質^{アポ}転送^トや召喚の際に用いられるものに酷似していた。そしてこれ程までの魔力が働く召喚をナギは幾度か目にしたことがある。

『最上位精霊召喚』と『大公級上位悪魔』の二つ。どちらも人間程度が優位を保ったまま使役できる存在ではない。現に公爵級悪魔は召喚されてもすぐ術者を殺して魔界に帰ってしまった。

そんな存在が此処に呼ばれようとしているのか？それこそがこの本の隠されていた本当の理由で爺さんもそれを知っていた？いや知っていたならこんな危険なものは本格的に封印を掛けてしまえばよ

良いものを、何故？そもそも書いてあるのは物語だ。精霊、悪魔、召喚のどれもが関係ない。だがそれ以外に何かがある？この魔力量、どう考えても異常としか思えない。精霊ならまだいいだろう。こちらが下手下手に出ていれば機嫌を損なうことはないのだから。だが悪魔は？ここには多くの魔法使いがいるが、本気で暴れたら勝つことすら儘ならぬだろう。

考えているその隙に魔法陣の大きさは最高潮に達した。一際明るい紅に包まれて目を瞑る。再び目を開けたその先には

「英霊、エミヤ……召喚に従い参上した。君が…私のマス…ター…
…か？」

困り顔の真つ赤な騎士がそこにいた。

Side エミヤ

私はただ座で魂として揺られていた。そこまでは確実に覚えていた。段々と記憶が記録に変わっていくことを認識し、無理な夢を描いたことも覚えている。

だがそんなことは関係ない。守護者でしかない俺が何故、自分の意思を持ったまま召喚されたのか？妥当な答えは世界ではなく人に

召喚された、だろう。だが聖杯の気配を感じない。つまりは存在しない。魔術師が聖杯のシステムを利用せずに英霊を召喚するなど無謀もいいところだ。

しかし殊私にとっては嬉しいことこの上ない。記憶をもったまま召喚され、守護者の枠を一時ではあるものの外れることができた。ならば召喚者に礼を言わねばなるまい。

恐らくは目の前にいる青年こそそうなのだろう。……なるほど、大した魔力量だ。かのキャスターには遠く及ばぬものの稟、いや遠坂よりも多い。召喚後すぐ、ということを考えても常人でこの量はかなり破格だ。

「さて……古くからの手筈通りに進めよう。英霊、エミヤ……召喚に従い参上した。君が…私のマス…ター……か？」

まで、おかしいぞ？これだけ膨大な魔力をもっていて、これだけ豊富な魔力が私の中に蓄えられていて、それでいて召喚の現場にいるのに……眼の前の少年にラインを感じない？召喚者は別に居る？遠坂のようにポカをやらしたのか？それにしても不具合が見当たらない。

ここはやはり直接聞いたほうが賢明だろう。向こうも私と同じように驚いた表情を貼り付けている。だがそれではつきりした。私は目の前の少年に意図して召喚されたわけではないと。

「あー…しようね」なあああああああああああああああああ

あああああああああああああ！！！！！！！！」つく！一体なんだというのだ！？」

「お……俺の暴食と、ペンドラゴンの本があああ！！ない！無くなってる！！」

「お、おい少年。ひとまず落ち着いてみたまえ。まずグラトニーとは何だ？それに先ほどペンドラゴンと……」

「あ、ああ……俺は落ち着いている。K O O L……じゃない、C O O Lになれナギ・スプリングフィールド………
…オーケー。まずは自己紹介だ紅い人。俺はナギ。ナギ・スプリングフィールドだ」

「（最初の名乗りを聞いていなかったのか？そのほうが好都合だが）……私は……そうだなアーチャー………とでも呼んでくれ」

「なんだ？人に本名乗らせといて自分は名前を言いませんってか？礼儀がなつてねえよ、礼儀が」

「すまない……今はとある理由で名を語ることはできない。日本に行くことができれば確認が取れるのだが………」

む、周囲にかなりの数の気配があるが……困まれているのか？殺気は感じられない。どちらかと言えば警戒の色がかなり濃いいな。

……すこし揺さぶってみるか。

何の変哲もない強化魔術を両足に掛ける。感覚の鋭い魔術師なら

ばこの程度の行為でも次の行動は予測できるだろう。そしてそれをさせぬように警告に出てくるはず。総合的な力ではまず私のほうが圧倒的だ。ならば武力行使はしないはず。

その状態で足を一步でも踏み出せば…

「まっつてくれんか。アーチャーと名乗る者よ」

…フィッシュ。見事に釣り上げられた訳だ。

出てきたのは立派な髭を拵えた老人。そこに立っただけで威厳溢れるような身なりをしている。地面につくほどに裾の長いローブを纏い長い杖を片手に持つ姿は、それこそ童話の中の魔法使い像そのままだ。今までいろいろな魔術師を見てきたが、このような格好をした魔術師は初めて目にする。よく見れば目の前の少年もローブを着込み背中に大きな杖を背負っている。僅かな月明かりで確認できる他数人も似通った格好をしている。

まっつたく…この地域の魔術師は皆童話が好きなのか？私の知っている本物の魔法使いもそんな格好はしていないというのに。魔法使いの容姿の情報を全く握っていないという田舎ならまだしも、これだけ魔術師が居ればそこそこ大きな組織だと予測できる。だといふのにそれでは余りにお粗末だろう。

「ふむ。待て、と言われてもこちらは特に何かをするつもりは無かったのだが？」

「おいおい。あんなあからさまなことしておいてそれは無いんじゃないかアーチャーさんよお」

「この際そんなことはどうでも良い。……お主と落ち着いて話をしたい。ついてきてくれぬか？」

「落ち着いて話をする、という点は賛成する。罨でもない限りその提案を呑もうと思うが、罨で無い確証が無い」

「そこはわしの顔を立てると思ってくれぬか？」

「まあ生半なもので無ければそうそうやられるつもりは無いからな」

「ぶつちやけお主にはどんな罨仕掛けようと勝てる気がせんわ」と小さく零し背を向けて歩き始めた。老人についていく私と、私についてくる少年。その他大勢が付いて来る事は無かった。

「さて。ここでならゆっくりと話せるじゃろつて。わしのこととは校長とでも呼んでくれい。……ここに呼んだのは他でもなく君と話をするためじゃ」

「無論、私もそのつもりで来たのだ。しかし、揃いも揃って此処の人間は魔法使いごっこがすきなのか？」

「……………？それはどう意味かな、アーチャー」

「簡単なことだ。私も何人か魔法使いを知っているが杖などを携帯する必要がない。いや、魔法使いに限らず杖を媒介にする魔術師すら見たことが無い。そこまで大型だとむしろ邪魔だろう。だいたい刻印があるならば全く持つて必要ない」

「はあ？魔法使いと魔術師は同じだろ。杖は無くても大丈夫だし大きいと確かに小回りが利かないが、大魔法をぶつ放すには杖は必需品だ。それくらい常識だろ？」

「一体何処の常識だ、それは？大魔法をぶつ放すとは…どちらが常識知らずだかわからんな。そもそも魔法使いと魔術師は同意だと、笑わせる。魔術師では魔法を理解すらできない。できないものをどのように放つというのだね」

「だあ~~~~~うっせ！だったら実演してやるよ。大魔法をぶつ放してやるよ！！」

そう言うと少年 ナギ は徐に席から立ち上がり担いでいた杖を握り締める。

それにしても何なんだここは。魔術を魔法と呼び、あまつさえ魔法使いときた。この地は最早外とは連絡を取ることすらできない封鎖された地域だとも言うのか。

「ご老人もご老人だ。あれほどの貫禄があるのならばあの程度の間違いは正すべきだ。よもや貴方が子供のときからこのような状態だったとは言わないでしょう。ああ、そんなに必死に彼を止めようとしないで……」

「来れ雷精 風の精雷！ 雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐
雷の暴風！！！」

「なっ！！！」

五小節以上の大魔術の使役だと！？あの歳で！？

右手から発せられた暴風は目の前の重圧そうな石造りの壁を易々と吹き飛ばしていった。

……なるほど。これだけの威力のある魔術を私は知らない。あのキャスターでもそう易々と撃つことは出来ないものだろう。大した魔術だ。これだけの威力を有していて外界と切り離されていれば大魔法というのも頷ける。独自に研究・開発されたものなのだろう。

「これでどーだ。これを見てもまだ魔法じゃないとか抜かすか、アーチャー」

「確かに素晴らしい威力だ。此処まで攻撃的な魔術も私は初めて見た。が所詮それは魔術だ。魔法ではない」

「では君にとって魔法とはどのようなものなのだ？」

「これは常識だと……まあいいか。魔法とはいくら科学が進歩しようとして起こせぬ奇跡のことを指す。ついでに魔術とは科学を持つてたどり着けるものだ。私はそう解釈している。死者を蘇らせた

り、数多ある平行世界を移動したり、魂という存在を物質化する。
こういったものだ」

「確かにのう……なしえることのできぬ奇跡、それが魔法。では君
の魔術を見せてくれんか？」

「……………それは構わないが此処で見たものは他言無用だ。私
の魔術はかなり特殊なのでな。 投影、^{トレース}開始^{オン}」

ふむ。手本を見せるのだからでき得る限り最高の宝具を投影しよ
うではないか。

創造の理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し

成長に至る経験に共感し

蓄積された年月を再現する。

彼の手に収まるは夫婦剣『干将・莫耶』。命尽きるまで共にある
うと誓った一組の夫婦が作り上げた剣。エミヤとして信用が置け愛
用しているうちの1つ。

久しぶりに工程を一から行なった所為か、いつもより剣に艶があ

るように見える。

ふむ。我ながら良い出来だ。奮発して少々多めに魔力を使ってしまった。

……………そういえば私が存在し、魔術を使うための魔力は何処にあるのだろうか？体の奥にかなりの魔力塊を感じるがエーテルで構築されている体で霧散しないのか。いや、エーテルで構成しているという前提から違っているのか？つまり私は完全に受肉しているということか？セイバーのように。

まあそのうちわかることだろうから問題ない。

それで、ご老人と少年はどのような反応をしてくれるのだろうか。やはり遠坂の様な反応を返すのだろうか。

「仮契約のアーティファクトでは…ないよな。カード持ってなかったし」

「^{アポーツ}物質転送…というわけでもなさそうじゃな。陣の展開も無かった。^{ゲート}転移魔法を開いた痕跡も無い……………のう」

「それは当然だ。言っただろう？私の魔術は投影というものでな、オリジナルを複写できるのだ」

「はあ！魔力の物質化ってことかよ！？こつちからしたらそれこそ、アーチャーの言う魔法だつて」

「む？こちらでは投影魔術、グラデーション・エアは無いのか？確

地位が高ければ高いほど好ましい」

「わしの知り合いに1人おるが……………何をするつもりじゃ？」

「調べて欲しいことがある。F県の冬木市、そしてそこに住む住人衛宮、遠坂、間桐だ」

「ちょっと待っておれ。恐らく数分あれば調べがつくはずじゃ
おお近衛よ久振りじゃな。すまないがちと調べて欲しいこと
が…」

これで確定する。私が私に、エミヤシロウになれるのが。

そういえばこの少年は私が召喚された時になにか叫んでいたよう
な……………おおそうだ。

「少年…ナギ、と言ったか。たしか私の召喚時に叫んでいたが……
あれは何だったのだ？」

「あ！すっかり忘れてた。お前が出てきたとき俺の暴食とペンドラ
ゴンの本がなくなっちまったんだよ……………どっちも結構気に入っ
たのによ」

「ペンドラゴンの本…と言うのは一体なんだ？何が書いてあったん
だ！？」

「ちょー！いてえから肩から手を離せ！」

「す……すまない。取り乱してしまった」

「……いやいいけどよ。何にも表紙に書かれてないんだよ。んでもって中身は確か正義の味方を目指す男の話だった。タイトルは夢の続き……だったかな？著者は……」

「……アルトリア……ペンドラゴン」

「え。なんだ知ってんのか、あの本。実はかなり高価で有名な本だったとか？」

「馬鹿な……ありえない。セイバーは俺がここに来ることを知っていた？そんなはずは無い。彼女はエミヤシロウがアーチャーであると気付いていなかったはずだ。……ならば、何故。それこそ宝石翁の奇跡でもなくては不可能だ……。仮に宝石翁の手助けがあったとして、何故アーチャーにそこまでのことをする。敵として相見え、刃を交わした者で、彼女のマスターを殺そうとした私を。このような親切の押し売りを……」

「おいこら。何一人で物思いに耽ってるんだよ」

「いや……すまない。私は本を知っていたのではなくてその著者と少々面識があつてな。そのことを考えていた」

「じゃあやっぱそのアルトリアってのはアーサー王の子孫なのか？知り合いだつてんならそこらへんも知ってるよな？」

「ふふふ……アーサー王、か。その話はまた後にでもするとしよう」

恐らくは言ったも誰も信じはしまい。アーサー王が実は少女で本名をアルトリア・ペンドラゴンであるなどな。

仮に信じたとしてもそれは大昔のことだ。故人と面識のある、など下手な嘘だ。妄言を吐いているだけと思われるのがオチだろう。

それよりももう一つの…

「グラトニーとは一体何のことだ」

「……………なんか適当にはぐらかされた気がするけど、まあいいか。暴食つてのは俺の持ってたアーティファクトだ。魔力を蓄えることのできるナイフだ。アーチャーが出てきたと思ったら本と一緒に消えちまってさ」

「ではそのグラトニーはかなりの量の魔力を溜めていなかったか？」

「そう、それなんだよ。あれの中身が空っぽなら此処まで気にはしなかっただろうけど……………」

「やはりか……………恐らく私はグラトニーと本を依り代に召喚されたらしい。そう思えば辻褄が合う。体の中にある不自然な魔力塊とそれを霧散させない体。その両方がグラトニーの特性というわけか」

そう考えれば俺の固有結界内（世界）にグラトニーは存在するはずだ。

..... あった。

暴食グラトニー：宝具ランク、レンジ、最大補足、特性：
魔力放出E、EX、魔力の貯蓄、自動修復

魔力放出EX.....セイバーのそれを圧倒的に上回る程ものか。
とんでもない化け物ではないか。おまけに自動修復と来た。これは
特性を引き継いでいる私自身が自身の魔力で回復できると言うのか。

投影、開始。

「私が投影したものだが、能力に差異は無いはずだ。魔力の籠って
いない贗作でよければ使ってくれ。ああ頑丈さは保障しよう」

「ありがたくもらうけど.....便利な能力だなそれ」

「専ら投影できるものは武器関係のみなのだがな。それ以外は魔力
を倍以上に消費する」

この体が完全なる受肉でもエーテルによる構成でもない中途半端
だということにはわかった。霊体化することはできずにセイバーのよ
うに自分の肉体に対して魔力放出を使えない。にしても各器官に魔
術強化は施せる。食事による魔力供給もできるのだろうか.....？

その場合私も腹ペコ王の称号を得てしまうのか　　！！！！セイ
バーは足りない供給分を食事によって得ていた。私の場合魔力へと
変換したら暴食に貯蓄されるのだろう。そして私にはラインが存在
せず供給魔力がゼロだ。つまり、消費する魔力の回復方法はやは

り食事しかないのかああああああ！！！！

ついに俺も宝具『無限の胃袋』を手に入れてしまったのか。

「調べがついたぞい……………ナギ、彼はどうしたのだ？」

「さあ？勝手に思考に沈んで勝手に悶えてる」

「……………はっ！……………ごほん……………見苦しいところをみせてしまったな。すまない」

「うむ、では結論から言う。冬木市は存在している。遠坂は冬木で宝石商を営み、間桐はその親族にあたり現在の市長も間桐の者だそうだ。じゃだ……………衛宮は一切の情報が無かったようで何も聞いておらん」

衛宮が存在しない。衛宮士郎も存在しない。エミヤシロウはここにいる。ならば……………俺は、この世界で俺は……………エミヤシロウとして生きることが出来る。正義を目指し、自分で見つけた正義と理想を掴める。

叶うはずのない夢が、叶った。ありえないはずの未来が、来た。

「そうか……………衛宮は無かったか……………では改めて自己紹介といこう。私…いや、俺は英霊エミヤ。在りし日の名前を……………エミヤシロウ。此処とは別の場所で枝分かれした世界の住人だ。」

1997年、この世界で、ヒミヤシロウは確立した。

第一話（後書き）

あとがき？

正義を求める正義の味方第1話はいかがでしたか？今回も短かったですよね

エミヤが出てきました。ぶっちゃけプロローグの冒頭でわかるっちゃあわかるんですけどね（笑）

内容としてはネギまと型月のクロスでは恒例の魔術と魔法についての相互理解を書かせていただきました。上手くできていたでしょうか？

何故エミヤがセイバーの真名を知っていたかということ、言わずもがなですが、FATEエンドの士郎だからです。

暴食にはこの物語のキーパーツになってもらう予定でいます。エミヤ召喚の依り代として、魔力源として、似非アヴァロンとして、切り札として。ちなみに現在の貯蓄魔力総量は7割埋まっています。ナギの溜めていた分は召喚で使用され空になり、英霊エミヤの持ちうる魔力全てがすぎ込まれた状態です。

聖杯戦争時の能力値としてエミヤはBでした。セイバーもBランクで12000〜13000とあったので、セイバー＋士郎分で13500と仮定します。凜が5000でキャスターの最大時が20000と。ナギを7000とおけば計算も大体合います。

セイバーよりも魔力を多くとっているのは生前は魔術師というか魔術使いだったので生粋の剣士よりは多いだろうと自己解釈。ちなみにこの数値はあくまで魔力総量についてなので戦闘力に直接の影響はありません。ラカンの強さ表とは一切関係がありません。

現在の時間軸を決定しました。

ナギは現在7歳とし、これから日本に向けて旅に出る準備をするために帰ってきたところです。

あとオリジナル設定の追加です。

ネギまの世界では悪魔は公爵級が最高のようですが、このSSでは大公級と王公級を上追加します。

ちなみに最上位精霊とはテイズでのマクスウェルやオリジンといった面々です。ウンディーネとかは上位精霊とします。

上位精霊 公爵級、最上位精霊 大公級、最上位<王公級といった感じです。ついでに言えば神と呼ばれるものには劣っています、王公級は。

設定だけで出てこないという落ちの可能性もありますが。

第二話（前書き）

結構改訂しました

第二話

一番初めに嫌いになったのは自分だった。もしもあの時僕が死徒^{シャトレイ}を殺していれば奴らは村に来ず、あんなことにはならなかったと。

一番初めに殺したのは父だった。父の研究が原因で、愛しき人を優しくした人々が全て死んでしまった。それでも父は止まらなかった。性懲りもなく同じ実験を繰り返し返していたから、同じ惨劇が繰り返されると思っ、それを防ぐために。

次に憶えているのは母代わりだ。何年かは覚えていないけど、随分とお世話になった。だけど、殺した。あのままだと食屍鬼が地上に解き放たれて、多くの命が失われるから、それを防ぐために。

「子供の頃…僕は正義の味方に憧れてた」と僕は言った。

ああ。確かに憧れていたんだ。

だけど僕の中の正義は、直ぐに黒く淀んでしまったんだ。

あの時……あの時彼女を殺せていけば、逃げ出さなければ、救おうなどと考えなければ。正義の味方なんてものを夢見ていたから、救うという選択肢が、助けたいという選択肢が出てきてしまったんだ。

僕が正義の味方を夢見ていたからあそこまで被害が広がってしまったんだ。

僕にとって正義とは、選択を鈍らせるものに成り下がってしまった

た。いいや、恨むべき、憎むべきものになってしまったんだ。

だから僕は全てを救うなんて考えない。

より多く、より早く、救う。ただそれだけが僕の正義。

9のために1を切り捨てる。10救うことはできないから。

950のために50を切り捨てる。必要な犠牲だから。

5001のために4999を切り捨てる。より多くを、救えるから。

命をただの数として扱うようになってしまった。誰に感謝されるわけでもなく、誰の笑顔が見られるわけでもない。

ココロが、重かった。

誰かを救うことの喜びを……僕は全く知らなかった。

だから分からなかった。何故心が重いのか。

そんな中僕は君に出会えた。君を救えた。もしかするとあの時初めて、僕は誰かを救えたのかもしれない。「生きていてくれて、ありがとう……」と心の底から思えたから。あの時本当に救われたのはどっちだったのだろうか。

「うん、しょうがないから、俺がかわりになってやるよ。じいさんはもう大人だから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、

じいさんの夢は 「

ああ……………君はどれ程までに僕の心を救ってくれるんだい
……………?

「俺がちゃんと形にしてやるから」

……………土郎。

本当に、君は僕にはもつたいない優しい息子だったよ。

だけどね土郎。もう一つだけ……………我俣を言っ方がいいかな？僕が
愛する僕の息子よ。

……………僕のように成ってはいけないよ

……………僕に憧れてもいけないよ…

……………正義は何も……………

……………一つだけじゃないんだよ…

W o r l d ' s N o b l e r e d ' s j u s t i c e M o r
M a g i s t e r M a g i s t e r M a g i s t e r M a g i s t e r

正義を求める正義の味方

第二話

.....

..... 士郎は士郎の正義を.....

..... 見つけてね.....

私がここウエールズに召喚されて一月が経過した。そろそろ頃合の時期だ。何が頃合なのか、召喚されて数日たったときのことだ。

「何？旅に出るのか？」

「ああ。もともとその下準備のために帰ってきたからな。エミヤが召喚されたりと色々忙しかったからな。住む場所も決まったし、この村の奴らに事情説明もあらかた終わったんだ」

「それはすまない事をしてしまったようだな。一言謝罪でもしようか？」

「そんな皮肉に口を歪めるな。お前はその性格を矯正したらどうだ」

「生憎とこのしゃべり方が定着してしまっただね。意識しようにもなかなか改善されんのだよ」

一人称を俺にしようも気付けば私と呼んでいる。素直に笑おうとしても皮肉な顔しかできない。心理戦を有利にするための口調がいつの間にか地になってしまったのだ。

今となつては意外に気に入っている自分がいるから構わないのだが、如何せん周りの評価がよろしくない。

「この際あなたの口調はどうでもいい問題だ。いきなりだがなエミ

「ヤ。お前も旅に出たらどうだ？」

「……………なるほど。確かにいきなりだな。私としてはどうしてそんなことを口にしたのか気になるが……」

「此処はエミヤの知る世界じゃない。魔術や魔法で散々討論したのは忘れてないだろ？あんな感じで此処とそっちじゃ違いが多いだろう。社会勉強って言うわけでも無いけど、いい経験になるんじゃないかなって」

「……………ふむ。一理どころか十理ある」

「だろ？だから、とりあえず爺さんに聞きたいことを聞いてそれなりの知識が付いたら今度は経験だ。つまり旅に出る」

「悪くない提案だ。では私はこちらについての知識を蓄え、一月経ったあたりにウェールズを発つとしよう」

ということがあった。それからほぼ毎日魔法学校に通い詰めだ。校長に質問をし図書館の本をあさり知識を増やしていった。……………最も苦労したのは書物関係だったな。新しいものは英語なので問題は無かったのだが、古くなればなるほどラテン、古代ラテンで表記されているものが多くなる。おかげで今では読み書きなら英語や日本語よりも得意になっただろう。会話をするには英語が楽だ。

更に言うならば本の中にはドイツ語やフランス語のものも混じってて、なし崩しに多くの言語を覚えてしまった。

誤解してもらっても困るが、私は列記とした日本人だからな。

そしてナギの言うとおり、調べれば調べるほど俺の知識とは違うものが出てきた。具体的な例を挙げるならば吸血鬼についてだ。

こちらの真祖の存在だ。星によって生み出されるわけでもない。ある一種の呪いによって真祖となるらしい。そしてその呪いは過去の秘術となっているため当然解除の方法も無い。そして死徒というものも存在しない。吸血する側の意思で吸血鬼にしたり奴隷にしたりは可能だが基本的に殺せないらしい。体の血を飲み干せば殺せるだろうが一回の吸血で2？は流石に多いのだろう。

この吸血鬼という種族で最も有名なのはエヴァンジェリンという真祖だ。600万ドルの賞金首で最強の魔法使いらしい。

このようにそれなりにこの世界の情報を手にいれた私は旅の準備をしている。ナギはアメリカを経過して日本に行くと言っていたので、私はヨーロッパから中東、西アジアからアフリカ。海を渡って南アメリカで日本。このような道筋をたどろうと思う。

私はさまざまな地域を練り歩いて、見つけようと思っているのだ。私の正義を。

幸いなことにこの世界には『立派な魔法使い^{マキステル・マキ}』、私が挫折した正義の味方を目指す人で溢れている。これならば私のような存在は必要ない。………爺さんとの約束を果たせなくなるのは悔しいし申し訳ないけど、俺はもう一度考えてみる。

旅に出ると言ってももともと私には荷物も何も無い。当然金も無い。だから準備も何も無いし、なにも準備ができないと言うのが正

しい。

いや、2つだけあった。

校長にもらった美しい細工の銀の指輪だ。1つは魔力殺しだと言っていた。確かに今の私の魔力は大きすぎるから何かと狙われる可能性も否めない。そういう意味で完全でないにしろ魔力を抑えるものはありがたかった。

そしてもう1つの方なのだが……効果を教えてもらえなかったが、校長が言うにはお守りだそうだ。確実にそれ以上の何かではあるだろうがな。

さて……私も、旅を始めよう。正義を求める旅を……。

とりあえず忘れてはいけないのはイギリスは完全でないにしろ島国だ。

路銀も無い。パスポートも無い。さて、どうやって海を渡ろうか？

「最初っからこんな問題に突き当たるとは……この程度少し考えれば分かることだろうに……。仕方ない 投影、開始」

『アイスコフィン全てを閉じる冷気の檻』氷の精霊が宿るとされる魔剣で斬りつけるもの全てを凍らせ永遠の美としてのこす。レイウアテイン災いの枝や炎形保つベルジュ扶狂いの刃の対極にあるものである。

柄を握り刃を海中へと沈め、魔力を流し込む。しっかり放出先をコントロールしながら海面を凍結させていく。少しでもコントロールを間違えれば即座に真冬の北極海の出来上がりだ。綺麗……とは言いがたい一直線の氷の道ができると同時に飛び乗り歩いていく。この作業を距離にして役50km日付にして3日掛かった。その間の食事は釣り上げた魚をレーヴァテインで焼いたものだけだった。途中で船などが通らなかつたことは運が良かった。

………こんなことなら素直に校長にパスポートと金の問題を解決してもらえばよかった。

だがおかげでわかつたこともあつた。眠っている間、正確には体の運動が極限まで行なわれていない状態に指輪から魔力供給されるのだ。解析してみた結果、体を休める行為に連動する概念武装のよくなものだ。マナをオドに自動変換し体内に流してくれるありがたいものだ。

………ついでに食事でも魔力は回復した。

第二話（後書き）

なかがき？

第二話です。エミヤが旅に出ました。

やっべえ。くそみじけえ。まあ、あくまでこれは繋ぎだからどうでもいいんだけど。

この後二話の内容として、欧州編・アジア編・アフリカ編・南アメリカ編となる予定です。

エミヤシロウの旅記録〜欧州編〜（前書き）

ちなみに今書き留めが八話分ある。

それ全部使い切ったら一月に一回更新できたらすげえんじゃない？
みたいになる。

エミヤシロウの旅記録〜欧州編〜

懐かしい町並みだ。記憶にあるものと比べると所々時代の違いが出てくるが基本的な雰囲気は何時の時代も変わらないものなんだと実感した。

生前の聖杯戦争の終了後遠坂と一緒に倫敦に行ったことがある。その時と時代も国も違つのに同じだと言つのがなんだか少し、嬉しかった。

折角陸に上がってなんだが、何とかして資金を集めなくてはならない。手っ取り早く集めることができるといえばやはり賞金稼ぎだろうか？確か魔法関係の仕事は結界の張つてある店で扱っていることが多いんだっけ？となると……………北にあるあれかな？

S i d e 店長

カランと音を立ててドアが開く。

……………この朝早い時間帯。完全に結界で閉じているうちの店の扉を叩くとは……………運がいいのか悪いのか。他にもわかりやすい店があつただろうに……………

さて、何時までもお客さんを待たせちゃ失礼だ。

高難度専用クライアント、『ヴァサーゴ』の開店。本日一番乗りはどんなお方かな？

Side エミヤ

この店がこちら周辺で最も嚴重な結界で遮断してあった店だ。店の位置といい結界の事といい、余り明るい仕事ではないのは明確だ。だがあえて此処を選んだ。それはなぜか。

すぐに仕事に取り掛かれて、危ない仕事のほうが報酬が高いからである。そしてリハビリも兼ねてのことだ。

ドアを開けると共に錆付いたベルの音が鳴る。しばらく経ってから中年の男が現れた。短く白髪の入り混じった髪と不精髭。そしてメガネ。

「ここは日本語でも大丈夫なのかな？」

「いらつしゃい。日本人とはまた珍しいな。それにこんな朝早くから仕事探しとは随分と熱心じゃないか」

「ああ。なにぶん路銀が心もたなくてね。早く仕事を片付けて真つ当な食事でありつきたいのだよ、こちらとしてはね」

「だったらオススメのメニューを提示しようじゃないか。お前さん………かなりできるだろ？」

そう言って主人は私の格好を上から下へと目線だけ動かして眺め

る。一瞬魔力殺しの指輪に視線を向ける。

………魔法関係の仕事の提示者ならば魔力の感知ぐらいは出来るのだろう。私の指にはめている魔力殺しに加え、聖骸布とポディアーマーを見れば簡単に予想もできるだろう。

私から視線をはずしてカウンターの下を覗き込み、3つの紙を差し出してきた。それぞれ仕事内容、報酬、期間、場所が明記されている。

- ・ 仕事内容 麻薬密輸結社の破壊

下記の場合にて1975年8月9日に取引が行なわれる。

当日に乱入しようとその後に追跡しようとする本人の判断に任せる。

関係者の生死は問わない。組織の壊滅確認後報酬を送る。

報酬	800? (日本円にして約10万円)
期間	承諾から1ヶ月以内
場所	ブリュッセル郊外 988-67ass

- ・ 仕事内容 魔法研究者ウィルドー・キヤムの研究内容調査

生体魔法学者キヤム氏に非人道的な研究の可能性ありと見られる。

しかし協会はこれを了承しているので表沙汰に調査できない。

なので研究所に潜入し写真やレポートなど証拠になるものを取ってきて欲しい。

研究内容が危険域に達していると本人が判

断したならキヤム氏の殺害も容認する。

その後研究内容を吟味し判断が正しいかどうかの処置を決める。

報酬 9000? (日本円にして約12万)

キヤム氏を殺害した場合 - 1000?。判断が正しくないと判決されたとき任務失敗とみなし報酬はゼロとする

期間 指定なし。同任務を受けているものは既に4人いるので早い者を優先

場所 オステンダ 街948 - dc64

此処はフェイクの可能性あり。新たに判明しだい連絡あり

・ 仕事内容 賞金首メーガス・ヴァルヴォルドの捕獲

メーガス・ヴァルヴォルドが留置所を脱獄。

脱獄先と思われるモンズにて被害報告が相次いでいる。

捕獲を第一とし不可能であれば死体でも可。

報酬 2000? (日本円にして約2万5千円) + 賞金

23000ドル (日本円にして約230万)

殺害した場合 - 200?。

期間 承諾から七日以内

場所 都市モンズ内。逃亡した形跡は見られないが、

細部の特定は不可

..... 全てにおいて殺害が許可されている。つまりこの世界の魔法使いにとっては完璧にこなすのはかなり困難と言うわけか

結社の破壊は完璧にこなせる自信がある。皮肉なことだが守護者として多くの者をこの身1つで殲滅してきた過去を持つ。調査においても問題はあるまい。姿と気配を消せる宝具を使用すればいいだ

けのこと。魔力をかなり余分に消費するがそれだけで金が手に入ることを思えば十分だ。賞金首の捕獲も容易い。最悪殺してしまってもかなりの額が手に入る。

よし。

「この依頼、全て引き受けさせてもらう」

「ほう……やはりそう来たか。兄ちゃんほどの腕ならまあ心配ないね。それじゃあ契約金だ。3つで合計170?だ」

「主人よ……すまないが今私は路銀がないといったであろう?これでどうだろうか?」

そう言っ取り出すのはあらかじめ投影しておいた『干将莫耶』をカウンターに載せる。宝具としてはC-と低い部類に入るがそれでもかなりの魔力の籠った、この世界で言うアーティファクトだ。投影品なので此处で手放したとしても痛くもなんとも無いのだ。

主人は多少の驚きを感じているのか目を丸くした。がすぐに顔を引き締めて干将莫耶を手にとる。握っては緩め握っては緩めと簡単な動作を繰り返して、静かにカウンターに戻した。

「オーケーだ。俺は現金派なんだがこれほどのアーティファクトを見たのは初めてだ。そういうことで特別許可してやるよ」

「ありがたい。ではこれはもらっていくぞ。早速取り掛かりたいの

でな」

三枚の紙を徐に掴んで店を出る。現在私はオステンダにいて今日は7月28日だからまずはメーガスの捕獲だな。モンスには徒歩のペースで五日ほどで到着できるはずだ。8月2日にモンスに着き一日でメーガスを発見しだい捕獲ないし殺害。それと同時に教会に連絡を入れて回収してもらおう。回収が済んだらすぐにブリュッセルに向かう。ブリュッセルへは3日もあればたどり着ける。密輸当時までに時間があれば指定ポイントに罾を仕掛けておく。結社の殲滅完了と同時にオステンダに戻ろう。それまでに新たな情報が来ればそこへ向かい、無ければ張りこもう。

そうと決まればモンスに向かおう。ルーセラーレ、コルトレイク、トゥルネと行くのが一番近い道のりだろう。まずは……南南東か。

「そうだ兄ちゃん。あんた……名前は？」

「ふむ……アーチャー、と。今はそう名乗っておこうか……」

そういえばすっかり忘れていたよ。この身は英霊だ。本来なら眠ることも食事することも不要な存在なのだ。魔力回復は眠れば十分にできる。ならば食事をして回復するという行為を省けば一日に進める距離が変わるのでは？と思いついて実行してみたら見事に予

定より2日も早く到着できた。

メーガスはこの町にいと情報があるが細部まではわからない。なら身体的特徴を頼りにしらみつぶしに探すしかないな。

メーガス・ヴァルヴォルド。身長180cm後半でスキンヘッド。左側頭部から右眉まで大きな傷跡がある、と。……流石にこれだけではな……。私の視界に映れば問題ないがこの町はなかなか広い。聞き込みがやはり有効手段だと思っただが外見的特長が少ないな。まあ期待しない程度に聞いてみるか。

そういえばいくらか視線が突き刺さっているな。この服装のせいかな。……着替えるでしょうか。いや待て。私は現在無一文だ。当然服を買うことはできない。

……正直気は進まぬが服を幾つか解析し投影しよう。できれば飾りが少なく黒い方がいいかな。ワンポイントで赤い模様などもいい。

そう考えるとこの町は実に都合がいい。メインストリートには露天商が多く構えてあり、アーチャーである私にとっては何処にいようと視界に納めることが出来る。建造物の上から幾つか解析させてもらおう。

……ふむ。こんなところでもいいだろう。

彼が身につけているのは黒くゆとりのあるジーンズ、赤いブイネツクのカットソー、その上に黒いカジュアルシャツ。ついでにアタ

ツシユケースも投影し聖骸布を仕舞っておいた。因みにボディーマーは装着中である。首下に覗く金属も見ようにはお洒落になるものだ。

一応着替えたは良いが、実のところ余り聞き込みをする気はないのだ。賞金2300ドルとは元いた世界ではかなりのものだろう。しかしこちらの世界ではどうと言うこともない。それよりも上の賞金首もごまんという。大した力を持っているというわけでもないだろうし、現在逃走中の身と来た。余程の自信家でもなければ堂々と道を歩けるものでもない。ならば人の寄り付か無そうなところを調べたり、夜中に町を歩くなどすれば案外すぐに出会えるだろう。

余裕を持って3日は行動できる。だが、早く済ませるに越したことはない。寢床や食は問題ないというか要らない。しかし食事がないというのは人生の3割は確実に損している。早急にメーガスを捕らえブリュッセルに向かう。恐らく時間的に余裕ができるからそこで食事をすればいい。主に狩りで食材を集めて。

「……………取らぬ狸の皮算用、だな。さつさと終わらせて金を手にいれよう。」

一言残し、颯爽と屋上から姿を消した。

それから数時間、街中にある裏路地、廃墟を回ったがそれらしい人物にも会わず痕跡も見あたらなかった。だがいくつかの場所はチェックしておいて、夜の調査時に注意しておこう。

それでも何も無ければ、明日は郊外の探索だな。

だが、さて。俗にいう日没までまだ大分時間があるのだがどうしてくれようか？歩き回って確信したが、広い。人目を気にせず跳躍できるならどうとでもないが昼間は無理だ。もう一度同じ道を歩くのは勘弁願いたい。

仕方ない。露天でも眺めて冷やかしいこうか。まったく、こういったときに無一文とは悲しいものだ。どうせだから食材を買い、この国の料理に挑戦しようとも思えば食材を買っただけの金も無く器具も無い。器具に関しては投影すればいいが、何分種類が少ないので使用する側としてもつまらない。

このご時世、金が無ければ娯楽もなにも無い。金を掛けずにできることと云ったらそれこそウィンドウショッピングだろう。

そんな理由から大通りの露店を眺めながら歩き回ってるわけだ。時折人ごみのほうに目を向けてスキンヘッドの男を捜したりもしている。

だが気になることが1つある。あの聖骸布も脱いで今は世間一般の服を着ている。聖骸布を羽織っていた時に比べれば視線も柔らかくなり数も減ったが、それでも見られている。男女を問わずに。

それならばまだ我慢ができる。視線など気にしなればいいのだから。だが困ったことに幾らかが声を掛けてくるのだ。流暢なドイツ語で。なまじこちらでもドイツ語が使えるのでついつい返事を返してしまう。

そうすると観光に来た母国語しか話せない旅行者、という先入観が拭われるのだ。旅行者、という考えは払えないだろうが話せる相手に変わりは無い。何を目的として接触してくるのかが理解できないが、恐らくは私のような容姿が珍しいのだろう。まったく……人の見かけのみで寄ってくるなど……どこぞのナンパ師でもあるまいし……。

などと考え、時にぶつぶつと口に出しながら歩いていた。だからだろう。目の前から走ってくる少女に気がつかなかったのは。

ドンー

「……………っ！」

「む？」

丁度鳩尾の辺りに鈍い衝撃があった。

何事かと下に目を向ければフードを深く被った10歳程度の少女が1人尻餅を付いていた。

特になんの変哲も内容に見えたがその服装が奇抜だった。体全身を覆うようなフードつきのローブ。真っ黒な手袋とロングブーツ。ジーンズも穿いており、肌の露出がまったくといっていいほど無い。今は春。暑いとまでは言わないが、ここ最近は温かい陽気に恵まれているので絶対に暑い格好だ。

何故なのか気になるところだが、とりあえず私の注意力の散漫が

原因だ。早く起こしてあげて非礼をわびよう。

「すまなか……………いや、日本語では通じないか。……………」
「ぶつかってしまつてすまなかつた。立てるかい？」

「っ！……………だ……………いじょうぶ……………です。自分で……………立てますから」

むう。差し出した手をスルーされるといふのは中々に寂しいな。
しかしどこにも怪我はないようだ。

それにしてもこれはどういうことだろう。この子はもしかや極度の人見知りをする子なのか？視線を一切こちらに合わせようとせず、動きもしない。私とは逆向きに走っていたのだから、起き上がったなら隣を抜け通るのが普通というものだ。

「……………ふむ。急いでいたのだろう？なら、早くしたほうがいい。どんな用事なのか私には図りかねるが」

瞬間、少女は顔を上げ、一瞬目を合わせずに頭を下げて横を通り抜けていった。ただ……………

微弱な魔力と、濃い血の残り香を撒き散らしながら。

そう、それはまるでつい先刻まで誰かと魔法を使った殺し合いをしていたかのような……………。

振り返ればその少女は人ごみにまぎれて見えなくなっていた。

………とりあえず少女の詮索は置いておいて、この残留魔力をたどって少女が何処から来たのかを解明するか…。

たどり着いた場所はとある郊外の森の奥。その一帯は木が伐採された後があり、朽ち始めているいかにも古い洋館があった。そして魔力の残り香もその洋館の中に続いている。その洋館に広がっていたもの。

夥しいまでの血、血、血、血、血………

数えることすら億劫になる積み上げられた死体、死体、死体、死体、死体、死体………

人体の腐った匂いも無く、血も全然乾燥していないことからほんの少し前に行なわれた殺戮のようだ。しかもその中には賞金首、現在にしてエミヤのターゲットであるメーガス・ヴァルドヴォルドの身体的特徴に一致している死体があった。

これは漁夫の利、として受け取っていいのだろうか？ 久しぶりの実戦ということで期待していなかったといえは嘘になるのだが………
…ふむ。とりあえず連絡をしておくか。

たしか魔力の籠った何かでこの契約書を燃やせばいいんだつたな。
投影、開始『フロンベルジュ炎形保つ抉狂いの刃』。一刺して契約書は消し

炭になる。これで数分すれば協会から何らかのアクションがあるか

らそれまで待てばいい。

……………それにしても解せんな。

あの少女の痕跡をなぞって行けば無残も無残な殺戮現場。つまりは少女はこの現場にいた。血を浴びるほど近い距離に。

普通に考えるのであれば、彼女はここに転がっている者共が生きていた頃に捕まっていた。そこにたまたま通りかかった正義感溢れる強い誰かが皆殺しにして去っていった。そして助かった少女は後先考えずただ我武者羅にその場を後にした。町で私とぶつかったときの異様なまでの警戒はそうだったことの後だったからのかもしれない。彼女に残っていた魔力は、その正義溢れる強い誰かが使用した魔法を直に受けたってことになる。

ここで矛盾が生じる。ざっと見積もって十数人を殺せるほどの魔法を使用した。その中には低いとはいえ賞金を掛けられるほどの男もいた。そいつを殺すための魔法を受けて傷すら負わなかった少女？まずありえない。

それ以外で残留魔力と血の匂いが付着する仮説といえは1つしか思い浮かばない。

彼女自身が直接魔法を使い殺戮し、その時血を浴びて匂いが付着した。これしかありえない。追ってその仮説が正しいのであれば自分の意思を持って行なった可能性が最も高い。ならば私とぶつかったあれは演技だったのだろうか。私のようにこの場に辿りついた者が、自分がやったと思わせないための。その全ては彼女を犯人からはずし、第一の仮説を当てはめさせるための布石ではないのだろうか。

ならば同時に疑問が浮かんでくる。それだけの力を持ち頭の回る彼女は一体何者なのだろう、と。

などなど考え込んでいると消し炭となった契約書から小さなホログラム映像がでてきた。

「こちら魔法協会クライアント統率部です」

「こちら契約者アーチャーだ。賞金首メーガス・ヴァルヴォルドの捕獲を成功した。ただ捕獲の際、多くの増援とメーガス本人を殺害してしまった。捕獲対象以外の殺害はマイナス報酬になるのかな？」

「いえ、悪党に肩を貸すものは即ち悪です。あなたは立派な魔法使い（マギステル・マギ）として十分に仕事をこなしました。マイナス報酬はありませんのでご安心を。……座標確認完了と共にアーチャーによる任務の遂行を受理。これより遺体回収作業に移ります。座標は確認できたので立ち去っていただいて結構です。報酬については契約をした店に行けばすぐさま支払われます。ただし契約時に確認されたと思いますが捕獲対象の殺害により、支払われるのはメーガスの賞金のみとなります」

では、と最後に一声掛けてホログラムは消えた。

「……………立派な魔法使い……………世のため人のために力を使う、正義の魔法使い……………」

正義を見つける旅というのも中々に難しいな。この世界には既に正義の味方としてのあり方というものが存在してしまっている。あの愚かな理想のような、な。

正直な話だが、立派な魔法使いの話聞いたときは「自分の代わりである正義の味方が居るんだ」と考えた。だがエミヤシロウが正義の味方を放棄すればそれは既にエミヤシロウではなくなってしまう。なら別に全てを救う正義の味方でなければいいのではないか？彼のキシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグのような生き方もいいのかもしれない。大切な何かのためであれば正義も悪も嗤い撥ねる、そんな“正義”。

確かに憧れる。

私はもう十分に“正義の味方”のエミヤシロウとして生きた。ならば“正義の味方”のエミヤシロウを辞めてもいいのではないかと何度も心の中で葛藤した。この身は“正義に味方でない”エミヤシロウであろうかと。

私はもう“全てを救う”正義の味方として生きた。ならば“全てを救う”正義の味方を辞めてもいいのではないかと何度も心の中で葛藤した。この身は“一人を救う”正義の味方であろうかと。

私は十分に“エミヤシロウ”として全てを救いながら生きた。ならば“エミヤシロウ”として全てを救うのはもういいのではないかと何度も心の中で葛藤した。この身は“エミヤシロウ”を外れ、大切な何かを救って生きようかと。

その他諸々を考えて考えた結果、探すという結論に到った。この

世界の協会、魔法使いはなにも一枚岩ではないのだ。違反を行なう魔法使いもいれば罪を犯すものもいる。その良い例が賞金首の奴らだ。何故立派な魔法使いを目指さないのか。恐らくその者達は皆自分だけの正義を、貫くべき何かを見つけることができたのだろうと思う。自分の正義を護るために、違法し、罪を犯し、罪を重ねる。

私はその正義を聞きたかった。そっくりに真似るつもりは毛頭ない。それは私自身と相手に対する侮辱行為でしかない。

そしてその1人になるはずだったメーガス・ヴァルドヴォルドは何者かによって殺された。もっとも、生きていたところで話をしてくれるかは不明だったが。

まあ、こうなってしまうた以上無理な話だ。潔く諦めて次の依頼に取り掛かるう。……次はブリュッセルで殲滅戦だったかな。

Side ????

私は今とても機嫌が悪い。

昼間にここ最近になって見つけた古ぼけた洋館でのんびりと過ごしていたのだ。穴の開いた屋根からは暖かい光が注ぎ、窓の外れた窓枠から涼しい風が通り抜ける。外観は悪いが中々に快適な場所だと気に入っていたのだ。

今日も例に漏れず穏やかな陽気に包まれて過ごしていたというの

に、空気の読めない馬鹿共が勝手に集まりおつて……

あまつさえこの私を追い出そうとしたのだ。私がいるのを見て、跪いて謝りたおしてくれば見逃してやらんでもなかったものを。ただ数を集めただけのクズが幾らいようと、とびぬけた一には敵うはずが無い。たったそれだけのことも理解できぬクズどもの所為で、お気に入りの場所を汚らしい血で汚してしまった。いくら気に入ったとはいえ汚い血と、その匂いの充満した場所では過ごしたくない。なので私は泣く泣くそこを手放したのだ。

しかしいくらなんでも一度は気に入り過ぎた場所だ。死体を放置するのもどうかと思う。

そういえば、と私は思い出した。あの中のリーダーを気取っていた奴は確か、最近脱獄して警戒が布かれている奴だったなと。ならば丁度いい。奴を捕まえるための魔法使いが協会からの派遣、もしくは依頼によって捕らえに来る奴がいる。ならば後始末はそいつに任せよう。

そう思い立ったが吉日。すぐさま行動に移そうと、服を着込み町を散策する。明らかに魔力を保持していて戦闘経験のありそうな人間を探しに。

そして見つけた。黒と赤で構成されたファッションで身を固めた黒人という程肌の色の濃くない男を。

魔力を収集・吸収する指輪と魔力殺し。その魔力殺しを持ってしても隠し切れない魔力量。そして何より、私の勘が告げる。

あの男は私と同じ化物だと。

もしあの男が本気で私を殺そうとすれば、私など手も足も出ないだろうと。

だからこそわからない。何故私はあの男を選んだのかが。あの男が私を知っていれば襲ってくるというリスクがあったにもかかわらず。

当然のように男は私の辿ってきた道を遡っていった。十数分で現場にたどり着くことだろう。ならば早々に姿をくらましてこの町を去ろう。

ただ……

あの男とはいずれまた邂逅する、そんな私の“勘”が治まらずいた……

Side エミヤ

二つ目の任務 麻薬密輸結社の破壊 は終わってしまえばあつという間だった。

名も無い剣・槍・斧などありとあらゆる武器を投影し一斉に壊れた幻想を発動させれば相手はすぐに冷静を崩した。1つあたりの威

ブロックファンタズム

力はせいぜい爆竹程度だが、数が重なれば音と光がかなりのものとなる。

防衛線が崩れ烏合の衆と成り下がったものを干将莫耶で切り伏せる。それこそものの数分で片がついた。

協会にも既に連絡を済ませ確認を取ってもらった。もはやこんな死体だらけの場所にいる必要が無い。それでも俺は腰を下ろし空を見上げている。

「……………私は…何をしているのだろうか」

この身を襲ってくるのは途方も無い虚脱感。

私はこの世界で体と心と自由を手に入れた。正義を得るために旅に出た。

それがどうした？私が今しているのは結局のところ虐殺だ。特定の人間の所為でより多くの人間が苦勞し、危険な目にあう、迷惑が掛かる。だから殺す。

守護者であった時と同じではないか、これは。

いや、守護者のときよりも性質が悪い……………。今の私は拒否できる権利を持っている。それでいて行為を拒んでいない。

根本が同じというわけか…

いくら心を決めようとも多くの人間と比べてしまつのは私がエミヤシロウであるからだろう。結局のところ私はどこまで行っても変わる事ができないのか？

「ふう……いや、いかな。考えが後ろ向き過ぎる。この身は不死者……魔力さえ尽きなければ死ぬことすら叶わぬ。時間だけなら嫌というほど在る」

守護者のときのように途方もない時間の中で磨耗してしまわない限り、だがな。

守護者であつたときもこのように、呼び出された後思い耽つていたな。私自身ここまで変わりがないと笑えてくるな、まったく……。

……む？妙な魔力作動を感じるが、これは……？

ああ……協会から任務用紙を使つての情報通達か。私の残りの任務はヴィルドー・キヤムの研究内容調査のみだ。つまり新しい、もしくは本物の潜伏場所を発見したとそういうことか。

「魔法協会クライアント統率部より『魔法研究者ヴィルドー・キヤムの研究内容調査』の任に就いているものに通達。最寄のクライアントへ行き、そこで聞き出してくれ。既に情報は送っております」

……直接教えてもいいと思うのはなにも私だけではないはずだ。

ま、既に2個終えているから溜まった報酬をもらうついでと思えば苦でもない。しかし最寄といっても私はこの町の何処に何があるかを把握しているわけではない。千里眼スキルがあるので探すのに苦労はしないのだが。

ふむ、オステンダであることには変わりないが北部郊外 - 9
9 - a330g。街から離れたか。確かに危険な実験をするならば申し分ない場所なのだろうな。

日の光が差し込んでこない、暗くじめじめした森の中に地下室ありの外見小さい小屋でも建っているのだ。

何故そんなにはつきりと断言できるのか、だって？それは当然……

「こうして入り口に立っているからなんだろうな……」

正直にぶつちやけると、番地などを教えられても現地人でない私にはどこなのか検討もつかない。だからとりあえず北部郊外と書かれていたので北に向かって歩いていったのだ。すると森に出くわした。それでもただ足を進めていたら、迷った。方角もわからない。本来であれば迷った時点でそこから動かない方が正しい。しかしこの地に知り合いがいるわけでも、国家権力に連絡が取れるような道具も持っていない。ならば、と歩き続けた結果がこれだ。

その考え自体が、遭難する人のそれとは気付いていないことについては突っ込まないで頂きたい。なんだかんだで彼はエミヤシロウなのだから。

とりあえず話を戻そう。彼は今ヴィルドー・キャムの研究所と思われる小屋の前に立っている。すぐにでも潜入は可能だろうが、1つの事実が彼の足を押しとどめているのだ。

何故、何の魔力も感じない？

彼のいた世界でも、こちらの世界の魔法使いでも大抵のものは自分だけの領域を持っているものだ。そして当然のようにそこには結界、何がしかの魔力的動作が仕込まれているものだ。その中に秘密があるのであれば尚のこと。

しかし、ここから何も感じない。ここも偽物なのか、それとも中に入られたとしても何も取ることは叶わないという自信の表れなのかはわからない。

ただ1つ、勘が呟く。

ここは一筋縄ではいかない、と……………

埃くさい部屋の中を慎重に、一歩ずつ進んでいく。

まるで長い間使われていないような雰囲気さえある。積もった埃の量がそれを違和感なく表現している。

一階、つまるところの地上には資料らしいものは何一つ見つからなかった。だが1つ、一番奥の部屋の隅に埃の被っていない本棚を見つけた。暗がりによくわからないがいくらかずらしたような跡も窺える。

埃を立てないようにゆつくりと動かせばそこには暗い蛍光灯に照らされてぼんやりと浮かび上がる隠し階段が現れた。

本命はこの下にあるのだろう。

「これは……!？」

階段を下りた先の光景はまさしく魔術師のそれであった。

ホルマリン漬けにされた眼球や脳、他にも指や腕足、皮膚もある。爪、髪、骨らしき白いものも見える。研究材料などというものには収まりきらないほどの数と種類。

錯乱したレポート。満タンの輸血パック。

「……人体実験をしているのか? いや、それならばこんなバラバラのパーツではなく完全な体一つあれば事足りるだろうに。バラバラでなくてはならない理由はなんだ?」

「ふおっふおっふお……それについてはこのわしが直々に教えてやるうではないか。御客人」

「ほお…日本語が使えるか…まあいい。その台詞は、私が協会から遣わされた者とわかつての発言か？」

「知りたがる人に説明したがるのは研究者としておかしいかね？」

「おかしなことではないのだろう。だが、自分の知識を容易に他人に公開するのはどうかと思うが？」

「ふお…ではそこいらのレポートを読んでみればわかることじゃ。わしは何も見とらんかった」

おかしな人間だ。研究者でありながら研究内容を他人に披露する。ただの研究者ならその行為は問題ではないが、目の前にいるのは疑いの掛けられている者だ。

秘匿すべき内容を然も当然のように教えるその精神がすでに逝かれているのかもしれないな。

適当に1枚のレポートを手にし、目を通す。

『ようやくだ。ようやく完成に目処が立った。』

骨格にはN0.21のものを使用した。大きさはどれも平均的であるが骨密度が高く、長期に使用するには最適と判断。魔力による固形維持と強度増強を促す。

各種筋肉はばねの特性を生かせる肉食獣の物を使用。特に両腕両足

の靭帯が発達しているので骨子と組み合わせるのが難しかったが、特に失敗もなく終了した。だが、あくまで人の骨に動物の筋を使用するのはサイズの徹底的な違いが出た。仕方がないので肥大化を防ぐ手立てとしていくらか筋をそぎ落としてパーツとした。

内臓には全て吸血鬼の物を使用。類稀な再生能力を有しており最適と判断。

実験結果に伴い体内の血液も吸血鬼の物を使用。血液のみを使用すれば血管が焼け落ち、内臓のみを使用すれば圧倒的に血液が足りない。しかし臓器と共に血液を使用すれば臓器は吸血鬼の血を求め、血の回りが良くなることが判明。さらに一定の血量と魔力を一部に集中させればその部分の能力が著しく強化されることも判明した。

胸筋背筋共にNO.33より使用。多すぎず少なすぎずこれもまた平均的な体のつくりのため特に改ざんすることもなし。

間接部分以外の皮膚はNO.04とNO.18とNO.29とNO.36から使用。採取素体の肉体年齢が低く、弾力や肌理の細かさ全てを取って外見的に綺麗に仕上がる。1人あたりから取れる皮膚の量が少ないため4体と使いすぎた感も否めないがこればかりは仕方ない。

間接部にはNO.13とNO.25から使用。こちらは幼体とは違い、長く使い込まれ伸びのある老体のものを使用。さらにパーツが古いと若い者よりも劣化が遅くなることが判明した。若い細胞に囲まれた古い細胞は自らを若い細胞と勘違いを始め細胞分裂を多く繰り返す。結果何度も細胞が新しくなり劣化が始まらないのだと推測

顔の骨格は改ざんのしようがないので現状維持。

残すところはあとわずかだ、徹底的にそして完璧に仕上げてみせようじゃないか………』

「……これは!？」

「そう……わしの研究、それは……合成^{キメラ}生物の製作じゃ。もつともそのレポートは合成生物のものではないがな。推測はつくであろう?」

「ホムンクルス……か? いや………」

ホムンクルス 錬金術において、人の精と幾つかの要素を以つて育てられる、子宮を用いない生命の誕生法によって生まれる者達のことを指す。 を鑄造するための技術、錬金術は存在しないはずだ。ならばそれは…一体?

そうだ。この世界には魔術は存在しない。なら私の知るホムンクルスが作られるはずが無い。

つまり、

「器か」

「その通り。それは魂の器じゃ…とびきり上等のな。ホムンクルス…人造人間などよりもこちらのほうが圧倒的に素晴らしい!」

「素晴らしい？心も何も持たないただの肉塊がか？私はそうは思わんよ」

「何故理解しない？それは魔法を使用して作られたものではない。私の純然たる医学知識と技術のみで作り上げたのだ！そして完成したそれはほとんど老いることの無い肉体、更に強靱であり、より不死に近づいた！そう！！これこそ死ぬことも老いることも無い、人間を超越したモノだ！！」

「……………何故、そんなものを作った。多くの命を犠牲にしてまでも」

「何故？何故じゃと？そんなものは決まっている」

つかつかと奥の暗がりのほうへ進んでいき、立ち止まる。ほんのりとした明かりに照らされて……………そう、水槽のようなものが後ろに見える。

まるでどうだといわんばかりに両手を思いっきり振り上げて声高らかに叫んだ。

「このわしが……………このわしが！永遠を手にするためじゃ！！」

「自ら人を外れると言っのか……………」

「そうとも。人間は酷く脆い生き物だ。車に撥ねられれば死ぬ。転んで頭を打つても死ぬ。平和に生きても100も生きられない。何

時死ぬかもわからない愚かで学の無い人間が生きるよりもこのわしが生きているほうが余程有意義だ。役に立たない命がわしのために役立つのだ。奴らも満足しているだろう」

「立派な魔法使い……というのは世のため人のために力を使うものだろう？そして魔法使いは例外なくそれを目指すものだと聞いている」

「立派な魔法使い……正義の魔法使いか……もちろん知っておるよ。そしてもちろんわしは正義に則って行動しているとも。最も、それはわしの正義にだがな」

「お前の……正義？」

「そう。これは正確に言えば正義ではないが、わしの為になるわしの正義といったところじゃ。多くの者のためになる正義ではなくわしのためだけ正義」

自分のしたいことをするだけの、最も自分資本のあり方。その方向性を善か悪かで区切りをつければそれは悪だろう。

そして最も懂れるあり方。

だが………認められないのも、また事実。

「それでどうするのだ、協会から来たお主は。わしを殺すか？私利私欲に力と知識を使った魔法使いとして」

「……………」

「…………沈黙は了解と取るぞい。生憎とわしは死ぬわけにはいかぬ。もはや器は完成し、このわしの魂魄を移すだけとなった。最早止める術は無い！」

多くの命を費やして作られた人を超えた、半永久的な肉体。自分資本の精神。

何時かまたその体が崩壊するとき、彼は同じ行為を繰り返すだろう。

そのたびに多くの命が失われる。放縦の正義によって。

ならば、それを見て見ぬ振りをすることはできない。俺はまだエミヤシロウだから。

無言のままその手に夫婦剣を投影する。

「…………お前が生き続けられ、多くの命が失われる。私は…………俺は、見逃すことはできない」

「結局お主も今まで会ってきた他の魔法使いと同じというわけか…………つまりらんよ。この理念が理解できぬとは」

「…………理解できなくはないさ」

この身は一度世界と契約を望み、永遠となった。永遠になればさ

らに多くの人が救えると盲目的に信じて。

永遠を求める理由は正反対であっても理解はできる。求める理由を。永遠となった結末も。だからこそ……………だからこそ……………！！

許すわけにはいかない……………

衛宮士郎に限らず、この俺と同じ思いをさせることを、俺は！

許すわけにはいかないんだ！！！！

「わしの夢が！わしの悲願が！！ようやく叶う！！！！」

「人という存在は……………あくまで人でなくてはならない。人間という脆い存在でなくてはならない、何故それがわからない！永遠には絶望しか存在しないと、何故わからない！」

そうだろうな、と彼は言う。

だが、自分の欲に忠実にならずして何が研究者だ。絶望しかないのだとしたら、わしはいくらでも時間を費やし研究を重ね絶望の答えを見つけ出す。わしはいままでずっとそうやって生きてきた。

自分は研究者だ。研究せずしてなにが研究者か。

「研究こそがわが生涯だ。わしは常に究めたい、この世の全てを。そのためには永遠の時間が必要なのだ」

ヴィルドーの足元が淡い青で輝きはじめ、連動するかのよう
に水槽と中の体を青く染める。

さらに他の水槽の羊水が抜かれ、かなりの数の合成生物が姿を
表す。こちらを睨んでいることから、恐らくヴィルドーからの命令で
私を敵視しているのだろう。

羽を生やしたライオン。人の頭にゴリラの両腕、馬の下半身のミ
ノタウロス。首から下は人間で顔が爬虫類のそれ。背中に八本の蜘蛛
の腕の生えたモノ。大きさはそれぞれ大型犬程度だが如何せん数
が多い。

……………だが、それだけでは済まないようだ。ヴィ
ルドーの後ろに高さ3メートルはあるう高さに光る六つの眼。その
どれもが赤く狂気を宿している。

それぞれ獅子、山羊、蛇の三頭を有しておりまさしく伝説通りの
合成生物の語源ともなったキマイラだ。当然のごとくその身に内包
した魔力はかなり膨大なものだ。これは暗に周りの合成生物は大し
た魔力を持っていない、と言っているわけではない。一個体として
はかなり豊潤だろうがキマイラの前では霞んで見える。それこそ生
前の私とキャスターのサーヴァントほどの差がある。実際にキャス
タークラスを保有しているわけではないぞ？

だがこれほどのものを作り上げる彼は卓越した技術を保有してい
る。それは確かだ。

「さあ！やっちゃってしまえ、我が作品よ！！目の前の男を八つ裂きにするー！」

今ここに号令が掛かった……………開戦の。

だが……………キマイラたちは一斉にヴィルドーに向かって動き出す。ゆっくりと、確実に。

「な……………おい、お前たちの標的はあいつだぞ！？お、おい……………」
ちにくるんじゃない……………。ひっ！よ……………よせ……………ヨセエ
エエエエエエエエエエエエエエエエ！……………！

ぶちっ

まるで気泡緩衝材の潰される音を大きくしたような音が響く。

青く光っていた魔方阵は光を失い、地下研究室は微弱的な蛍光灯のみの明かりとなる。

その微弱的な明かりに照らされるのはヴィルドー・キャムだったものの。胸は見当たらず潰された丸いものが見え、近くに目玉がむき出しに転がっている。両足は噛み千切られたのか左は足首以下が、右

は膝以下が無くなり骨が見えている。

だれが見ても分かる。即死だ。

だが、まるで飢えた獣のように肉を求め、食い漁る。

肉という肉全てに、文字通り骨も残さず食べきったようで何も残っていない。

ぎろり、と口を赤く染めた獣がこちらを振り向く。

「やれやれ……………研究内容を掻つ攫いに来ただけだというのに……………割に合わないな、これは。報酬は減るし無駄な戦闘はあるし……………」

ぎゅっと干将莫耶を握り締め臨戦態勢へと移行。攻撃対象合成生物およびキマイラ。これだけの数だ、下手をしたら食われかねん。

「……………いいかキマイラ共。これから行なわれるのはお前たちの食事でも、私との戦いでもない。……………
……………虐殺だ」

その言葉を理解し激昂したのか、その一言を皮切りに戦いの……………いや……………虐殺の火蓋は切って落とされた。

次々に襲いかかってくる合成生物を切り伏せる。左から来れば干将で、右から来れば莫耶で、淡々と。時にそれを投擲し複数を抉り、時に干将で受け莫耶で薙ぐ。

彼の周りに積み上げられていく死体、死体、死体。

数えることすら億劫となる量。その数は30を越えたあたりか、徐々に動くものが見えなくなり………0になった。

「やれやれ……彼も随分なものを残して逝ってくれたものだ」

確かにここにいる合成生物は全て掃討し終えた。ただ1つの本命を除いて。

その姿は最強にして最凶。古代ギリシアの怪物。三つの首をもたげ、六つの瞳で窺ってくる。

怒りと狂気に染まった真っ赤な瞳。仲間、同族が殺されたことに対する怒りか悲しみか。はたまた自由になれた喜び、獲物を見つけたことに対する歓喜か。

□

『!』

-----!!!

「全く耳障りな声だ。……………その口、早々に開けなくしてやろう！」

その手に弓を投影し、矢も番えずに弦を引く。傍から見ればおかしな光景だろうが、これが私のスタイルだ。

「我が骨子は
I a m b o n e o f 捻れ狂う
m y s w o r d .

生み出すはケルト神話のアルスター伝説に登場する剣。フェルグスの持つ魔剣であり、彼の約束された勝利の剣エクスカリバーの原典であるとも言われている逸品。

ただそこには剣としての面影は欠片も残っていない。骨子を捻じ曲げられ貫くことを念頭に置いた矢が出来上がる。

三日月のように反らされた弓の弦を離す。

「カラドボルグ
偽・螺旋剣！！！」

その姿、軌跡は正しく稲妻を連想させる。だが最高のものを投影してしまえば、眼前のキマイラなど容易に吹き飛ばしてしまい研究所そのものが崩壊しかねないからかなり手を抜いているが、そんなことを微塵も感じさせない。

そして稲妻は容易にキマイラの左前足を吹き飛ばす。

それとほぼ同時に壊れた幻想を発動しキマイラの巨体を吹き飛ばす。

頭を貫くことはできなかつたが足を？ぎ、その上に魔力による爆発を直接ぶつけたのだ。合成生物などでは耐えられるものではない。

だがそれは絶対ではない。

确实と確信することはできないのだが、どこか安堵する私が出た。だが、それが命取りとなった。

直後、影が動いた。

「
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

人で例えるのなら大きく息を吸うような動作。

伝承ではキマイラは炎を吐くとされている

凶悪な炎が塊となって、煙を払い眼前に現れた。

炎塊目視で確認
時間、不足。

防御不可

熾ロ・アイアス天覆う七つの円環の展開

炎塊目視で確認

回避可能

脚部魔力ブースト使用。無

だがそれもみるみるうちに修復されてゆく。暴食グラトニーの修復だ。

先ほどまでじんじんとした感覚しかなかった腕が感覚を取り戻してきた。

どういうことだ……先ほどの一撃で確実に片足を吹き飛ばしたはずだ。

だが、目の前のキマイラはどうだ。

四肢で力強く地面に立っているではないか。

……なるほど、超回復いや高速回復といったところか。

なににせよ、足を吹き飛ばすだけでは倒すことは愚か足止めにもならないということか……。

ならば、首を落とせばいい。

すぐさま干将莫耶を投影し駆け出す。暴食による魔力強化はまだ続いているためかなりのスピードで近づき、跳ぶ。

一振りですぐ蛇の頭を切り落とし、莫耶を投擲し山羊の喉を突き刺す。すぐさま干将も投擲し獅子の頭へ突き刺す。そして、壊れた幻想。

だが……

……着地した際にキマイラの凶爪が振り下ろされる。

切れ味が良いだけの無銘の剣を投影し爪と爪の間に切り込み、前転をするように回避と斬撃を繰り返す。

そして剣を後ろ足に突き刺し、距離をとる。

振り返ったキマイラは蛇の顔が全快しており、山羊と獅子のそれは毛は一切生えていないものの形だけで言えば治っていると断言もいいほどに戻っていた。

「ちい！首を落としても無意味か…」

おそらく魔法的要素化が再生を司る器官が体内のどこかにあるだろう。それを破壊しないとコイツは倒れない。裏を返せば、その場所さえ特定できれば倒せるということにもなる。

都合がいい。解析は私でも十分に使いこなせる。

解析、開始

それぞれの頭……にはない。当然四肢にもなく……心臓部に魔力の結合体を発見。どうやら心臓と結合しているようだ。

キマイラが再び息を吸い込む。

再び脚力強化を施す。

吐き出されたものは同じ炎ではなく、爆炎といった感じだ。

高温の空気と共に周囲の可燃物が激しく燃え上がる。煙が立ち上り上手い具合にこちらの姿を隠してくれる。

多少肌が焼ける感覚を受けながらも炎を潜り抜ける。

現在のポジションは丁度真後ろ。

キマイラはまだこちらを捕捉していない。ならば、すぐにでも仕掛けて一撃で終わらせる！

「
I am the 骨子 bone of 捻れ狂う my sword.

槍。 思い浮かべるは最速の槍兵。彼の得物である必殺の槍。真紅の魔

る。 投影されたそれを、新たに投影した弓 フェイルノートに番え

くられ幻想種。これからお前を貫くは因果逆転の魔槍。いかなる
防御も無用と思え、既に結果は決まっているのだから。

喰らえ真紅の魔槍。これからお前が貫くはギリシアの怪物。いかなる
思慮も無用と思え、貫くものは目の前なのだから。

放て、その名は、

すつと右腕を上げる。

「さよならだ……………幻想種。

壊れた幻想」

指を鳴らせば、未だ突き刺さる真紅の魔槍がけたたましい爆音と共に炸裂する。

キマイラの肉体が如何に強固であろうとも内側からの衝撃には耐えられるはずもなく、粉々の肉塊へと変貌する。

無残に飛び散ったそれを一瞥し、その場を離れる。教会に報告せず。

Side 店長

カラン、と入り口のドアに備え付けられたベルが音を立てる。

客かと目を向ければそこにいるのはアーチャーと名乗った男が一人。

「おや、随分と早いお帰りじゃないか。依頼は終わったのかい？アーチャー」

「おかげさまでな……1つは降りさせてもらうがな」

「ヴィルドー・キャムの件だろう。協会側から連絡があった。正体不明の何者かが本人を殺してしまっただと……な」

「その『正体不明の何者か』のおかげでみすみす賞金を逃してしまっただよ」

「……………ま、こつちとしてはどうでもいいんだが……………ばれてねえだろうね？」

「はて？何を言っているのか私には理解しかねるよ」

受けた三つの依頼をもの十日足らずで三つとも全て終えた男。

ヴィルドーの件の正体不明の男というのはほぼ間違いなくアーチャーだろう、と俺は思う。協会はすぐに後始末を行なったらしいがこちらにはその道のプロも集まってくる。その中の一人の情報がヴィルドーの任務だ。

研究室から本人の遺体こそ見つからなかったが、床に着いた血痕、同研究室にあったキマイラ及び合成生物から肉片、血液が発見された。

キマイラに残る魔力から測定し、キマイラ本体の魔力量をそのまま戦闘力としてみればおよそ1200後半と判断されたい。かなり、とは言えなくも高位だ。

何より今現在この街、この国には現在強者がいない。メーガスのような小物が逃げ延びていたのもそれが理由だ。

そこに現れたのが、この男。絶対強者。そのキマイラに対しほとんど無傷で勝利するなど旧世界の中ではかの闇の福音ぐらいしか思いついたらない。

この男が何者で今までどう生きてきたのか、全くの不明。これだけの實力があるのならば多少なりとも噂は耳にするはずだ。

だが、それが一切無い。

だからだろうか……

「1つ耳寄りな情報を聞かせよう」

「……………拝聴料は払わんぞ？」

「正直なところ耳寄りでもなんでもないと思っただがな……………知ってる奴は知っている、そんなもんだ。そんなもので金はとらねえさ」

「ふむ。まあ聞いておいて損はないだろう」

最強の人間と最強の化け物……………

「闇の福音、マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い、ドール・マスター人形使い、悪しき音信、禍音の使徒、童姿の闇の魔王……………異名を上げればきりないが、エヴァンジェリ

ンが極最近中東イスラエルにいた。そんな情報だ」

二つが出会えば何かが起こると、このときの俺はなぜか確信していた。

エミヤシロウの旅記録〜欧州編〜（後書き）

あとがき？なかがき？

第二話の其の一です。2・1話にすべきか3話にするか、ぶつちやけ今も悩んでいます。

初めての戦闘でした。しかし戦闘とは呼べないほど文章は稚拙。他の作者さんが「戦闘描写は難しい」と言っていますが、身にしてみました。

次、アジアです。中東です。西です。

エミヤシロウの旅記録 〱 其の二 亜細亜編 〱 (前書き)

期末テストつかれた。

戦闘値 ラカンの強さ表

エミヤシロウの旅記録 其の二 亜細亜編

Side エヴァンジェリン

「ニウイス・カースス
氷爆」

特に冷気を強力に上げたそれを私に向かってくる雑魚共に直接食らわしてやる。5人のうち3人を凍らせてやった。ほっとしても勝手に逃げるだろう。

そして相変わらずチャチャゼロはやる気がないし……何が、「俺ガ戦ウノハ強い奴ダケダ。雑魚殺シテモツマンネ。」だ。そもそもお前は私の人形だろうが！何故私の言うことを聞かないんだ！！

……………そうだな。次に作るとしたらもつと従順な従者にしよう。

いや、今はそんなこと……どうでも良くないが置いておこう。

ここ最近私はついていない気がする。幸運がパラメータで見れるとしたら恐らくEな気がする。うん。

暇だからと世界旅行を始めてみたのはいいが、如何せん賞金稼ぎが煩い。

まあ。私ほどの有名人がそこ等辺をほっつき歩いてたらそりゃわらわら寄ってくるものだろう。

「自分デ言ッテリヤ世話ネエナ」

「……………何か言ったか、チャチャゼロ…」

ケケケ、と笑うだけ。

そういえばここ一月ないし二月でよく耳にする噂がある。とある人間についてのだ。

凄腕の傭兵のようで魔法世界からも裏組織からも賞金をかけられているらしい。特に有名な話がこれだ。

なんでもヴィルドー・キラムという研究者が合成生物キメラの生成を協会に秘密裏に行なっていたらしい。それを調査しに行った者が見つけたのは多くの合成生物の死体と、大きく飛び散った肉片だという。調査の結果は単純に魔力や体のつくりなどを戦闘値に表した場合キマイラは1200前後、合成生物は個々の差はあるが平均して200前後。どちらも並大抵の人間の手に負えるものじゃない。だがこれを殺したといわれているのだ。うわさの男は。

少しばかり考えてみようか。

なら人じゃないものと考えられるか？答えは否。人外で確固たる意思を持ち強大な力を持つ、それは私のような吸血鬼や悪魔と呼ばれるものだ。そんなものが顕現しているのだとすれば、この世界はもっと酷いことになっている。吸血鬼なら普通は離れてひっそり暮らすものだ。ならば私が知らないだけの強力な魔法使いや傭兵か？キ

マイラを殺せるだけの力を持つものを？人はそれを人と呼ばない。
化け物と呼ぶ。

……………化け物？……………そうか……………奴だ。奴に違いはない。確
固たる意思と、異常な力を持ちながら、その体は人。そんな化け物
が1人、いた。

「……………クツ……………ククククククククク……………アーハツハツハ！
！！」

「ウオツ！オイオイ御主人……………ツイニ気が触レタカ？」

「なるほどなるほど……………正体不明、か。あくまで知らぬ存ぜぬと
いくつもりか……………？」

少なくとも奴は協会に対して協力的ではない。即ち属していない。

面白い。実に面白い。奴とて初めの頃は洗脳紛いの教育を受けて
いたのだろうか……………それでなお持つ反骨精神。

「もし再び出会うことがあれば酒でも酌み交わしてみるか？」

「オ！俺モ忘レンナヨ！」

S i d e エミヤ

アーチャーことエミヤシロウは現在襲われている。その際に思わず「なんでさ!？」と叫んでしまったのはご愛嬌。

うん。ぶっちゃけ俺にも何で襲われるのか分からないんだ。

ただ歩いて旅をしてトルコを横断してシリアの国境を見つからないように越えた辺りから急に攻撃してきた。ああ、あらかじめ言うておくが国境付近には魔術……魔法的な何かを感じることもなかった。これは千里眼と解析を駆使したため間違えようの無い結果だ。

この中東、西アジアはお世辞にも治安がいいとは言えない地域なので紛争に巻き込まれた。テロ団体の一員に間違えられた。ならまだ分かるのだが……あからさまに魔法を使ってくる。

私にはこの世界で知り合いと呼べる存在は無いに等しい。当然出会いがしらの魔法を使ってくるやつなんかに心当たりは無い。

しかし襲われているのもまた事実。

「さて……この場面をどうやって切り抜けるか………」

さて、とりあえずここで現在のエミヤシロウの立ち位置を説明しておこう。

丁度二ヶ月前に魔法協会の依頼を受けて金を稼いでから、ヨーロッパ

ツパの国々を転々としながら旅を続けてきた。しかし元より金を掛ける必要のない便利な体のため依頼を受けたのはその一回ぼつきりである。

魔法協会はというとアーチャーを探していた。いや、現在進行形で探している。ヴィルドー・キラムの事件から、キマイラという存在を殺したと思われる人物の捜査に乗り出した。真つ先に名前が拳がったのは当然のごとく、其のとき依頼を受けていたエミヤシロウ入れた5人。

更に当然のごとく、エミヤシロウ意外は本名登録のため所在はすぐに明らかとなり、当事者ではないと除外された。

そして必然的にアーチャーと名乗った男の調査になったのだが如何せん情報が少なすぎる。というか情報はアーチャーという偽名のみ。外見的特長も一切判明していない。

だが記憶を見ることのできる魔法を使ってヴァサーゴの店長の記憶を覗いたのだ。まあ店長は報告こそしなかったが特に口止めもされたいたわけでもないのであっさり公開したわけだ。

日本人、褐色肌、白髪という特徴がばれてしまい、記憶を映像化、写真化できるというある種レアな呪文を行使できるものによって顔写真ともどもまほネットに掲載されてしまった。懸賞金1000ドルで。

しかし情報は一向に集まらない。いや、これは語弊だ。集まらないのは目撃情報だ。皮肉なことに協会の依頼を全うしようとした局員などが現場に到着するも既に終わっていたり、依頼対象となっている賞金首もいくらか捕まえられている。現場に縄で雁字搦めに締

め付けられて放置された状態で……。

そして、その現場を目撃したもののや当事者を問いただしてみれば出てくるものはみな『白髪の黒人』と声をそろえる。

協会側はこれらの行いを全て慈善として行なっていると勘違いをし、なんとも欲しい人材だとアーチャーに掛けた懸賞金を更に上げる。

そんでもって、そんな協会側の動きを察知した大きな組織だったいわゆる（・・・）悪は、同類がやられた仕返しか、はたまた自分の安全のためかは知らんが非公式でありながらもエミヤに賞金をかける。

そんな両者の繰り返しが続き、今となっては表も裏も関係なく彼を求めるものが後を絶たないという。

因みに、まほネット掲載公式懸賞金…………… 14万9000ドル（約149万円）也。非公式賞金…………… 30万ドル（約300万円）也。

表より裏のほうが高いのは当然である。裏はその道で稼いでいるプロの中のプロがいる。当然表よりも情報が入ってくるのが早く、正確であり、数が多い。表の知る大きなことから、表の知らない本の小さなことまで含め、情報量の差は圧倒的といっていいほどだ。

まあそんなわけで彼の元には客人御礼であっていいのにもかかわらずほとんど、というか今回が初めてのエンカウントというのはなんと saying 言いよら……。

では、説明終わり！

「……………集い来りて敵を切り裂け　魔法の射手！連弾・砂の7
矢！！」

「…………魔法の射手、連弾・風の11矢！」

「くっ！追尾性というのもなかなか厄介だ……………な！！」

向かってくる計18の矢を切り伏せる。と同時に干将をブーメラ
ンのようにして投げる。

コースは向かって右側の魔法使い正面。これは当然のごとく回避
されるが、

「っ！おい、後ろ！！」

「…………へ？」

旋回して戻ってきた干将が左向かいの術者目掛けて飛ぶ。味方の
声にとつさに反応し振り向きざまに杖を向け呪文を唱えるより先に、
干将が杖を真つ二つに切断する。続いて、魔力障壁に差し掛かるも、
並みの術者の急ごしらえの障壁で勢いの付いた宝具を止められるは
ずが無い。

障壁も切り裂かれ、そのまま吸い寄せられるかのように刃は首に。

「
カ
ラ
ド
ボ
ル
グ
偽・螺旋剣！！！」

旋風も竜巻の前ではそよ風に過ぎない。そんな言葉を体现するかのように、放たれた剣の後ろには暴風を越える暴風が存在した。発信源であるそれは目の前の暴風を蹂躪し、自分の配下に加えながら突き進む。

コンマ0秒で雷の嵐を抜ける。術者は魔法発動後の硬直が解けず、はたまた、自分の渾身の一撃があっさりと破られたことに対するシヨックか、指一本動かさない。

それは即ち、死を意味する。

眉間……というには少々大きい穴が開いていた。穴の開いた頭は、貫通時の衝撃の所為か首から無理矢理引きちぎられたかのような無残な分かれ方をしている。引きちぎられた皮、脂肪、筋肉、食道、血管、神経……。

流れ出した血液は、もう1人のものと相まって広く地面を濡らしていく。

人を殺すという行為に躊躇いを覚えず、その後の光景に心を動かすことの無い私はやはり衛宮士郎ではなくエミヤシロウなのだと思覚する。

「……………だがやはり殺してしまったのは早計だったな。何故か問
いただすべきだったか……」

とりあえず確認できたこと。自分は誰かの恨みを買っている。

うむ、今更だな。

ここ最近でも大分組織を潰したり、人を殺しているから何処から刺客を差し向けられても不思議ではない。

その考えも外れてはいない。アーチャーに賞金を掛けたのはそういった組織の所為であり、殺すように依頼するのもそういった組織の指示でもある。

そして、何時誰が何処で襲ってきてもおかしくない状況であると認識すれば、先ほどの襲撃も含めこの国、あるいはこの先の街で大掛かりな何か仕掛けられていると思いついても不思議ではない。

エミヤも当然そのことを危惧する。

「街中で騒動を起こすわけにもいかないか……仕方ない。遠回りになるが、大陸内部から森や山を抜けていくとしよう」

Side ????

日も沈んで、梟など夜行性の動物がひしめくくらい森の中、それ

は存在していた。

「……痛い……痛い……痛い」

なんでこんなにも痛いのか？なんで私だけが痛いのか？

「……怖い……怖い……怖い」

何も見えない闇が怖い。そこかしこから聞こえる音が怖い。そこかしこから感じる気配が怖い。

「……寒い……寒い……寒い」

吹き抜ける風が冷たい。周りから向けられる視線が冷たい。心が、冷たい。

「……助けて……誰でもいいから……私を……」

そんな眩きをまるで聞き届けたかのように

「……………ふむ。とりあえず、食事にするかね？」

暖かい光が、そこにはあった。

「……………」

「何も警戒することは無い。ああいやそれも無理なことか……。食べないというのなら私は無理強いしないが……………」

焚火の前にはいかにも狩りたて捌きたてのような肉が木の棒に刺されて焼かれている。彼の隣に猪らしき毛皮と血塗れた刃物があるので間違いない。

でも何故だろう？

私はこの森の中を彷徨っていた。

それは追い出されたからだ、故郷を。

私が化け物で彼らは私を恐れたから。

何処の町の人も私を恐れて、追い出した。

なのに何故この人は私を怖がらない？ 恐れない？

私が化け物が気が付いていないのかな？

「……………私は……………化け物、吸血鬼…なんですよ……………？」

私が化け物だって知ればこの人も離れていくと思った。

だって今までみんなそうしたら離れていったから。なのにこの人は

「それがどうした？ 吸血鬼だからといって血しか喉を通らないわけでもあるまい」

知ったとしても、私から離れなかった。

そんな事実1つが本当に嬉しくて、久しぶりに暖かさを感じて…
…私は泣き出してしまったんだ……。

S i d e E m i y a

森を抜けてこの国を抜けようと思い早速行動に移し、私は森の中を歩いていた。なんてことの無い平凡な森だ。無駄に広かったり、

移動したり、吸血植物なんてものも存在しない。

日がどっぴりと暮れた中仕留めた猪を連れ枯れ枝を集めた。それでもって火をくべて猪を捌ききつた後のことだった。

近づくと気配が1つ。

目に強化を掛け、気配のするほうへと意識を集中する。暗がりではないと気づいたところだが、何とか確認できる。

恐らく、少女。見かけだけで年齢は計れないが、余程の成長不良でなければ1、2、3といったところか。向こうはこちらに目もくれずただただ俯いたまま向かってくる。二人の距離は焚火の明かりだけでその姿が見えるほど近くだというのに、全く気付いた気配が無い。

そして新たに分かったこと。彼女はかなり荒んだ姿をしていた。着ている服は所々が擦り切れ、解れ、これでもかというほど汚れていた。子供特有の張りのある肌に幾つもの傷跡があり、長く伸びた髪はほこりを被ったかのように艶がなかった。

ただ単に森に迷った少女、では処理できない。明らかに長期間に亘った迷子。あるいは……勘当。

「……………助けて……………誰でもいいから……………私を……………」

そして、僅かに聞こえた彼女の声。

……助けて……等と言われたら……私にはそうするしかないではないか、まったく。

「……………ふむ。とりあえず、食事にするかね？」

そのときの彼女の顔ときたら……実に滑稽（言葉にすると酷いかな）だったよ。喜びと悲しみの入り混じったような、言葉であらわせぬものだったと言っておこうか。

そして現在、彼女は泣き崩れている。私の腕の中で。

ああ、言っておこう。この行為は下心あつてのものじゃない。自分で言うのもなんだが、私は子供の扱いが上手くないと思っている。まして泣かれるなど、どう対処していいのか全く分からない。しかし女性を泣かせたら理由や過程がどうであれ男の責任で男が泣き止ませるべきだといつも遠坂が言っていた。それを思い出した俺は実行しようとしたわけだ。だが俺はそういった経験が、こう言っではなんだが一度も無い。イリヤとか桜は何度かあつたような気がしないでもないけど、その後大抵俺が二人の要望を聞き入れて終わり、というパターンだった気がする。だから経験上分からないのだが、何を思ったのか藤ねえが買ってきた「これで万全教育ママvol.14」をチラツと読んだとき、子供は母親に抱いてもらうのが一番安心するのです。とか書いてあつたなと正にどうでもいいことを思い出したが今回ばかりは助かった、と早速行動を起こしたのだ。抱きしめたときビクツと体が硬くなったが、背中を撫でてしていると徐々

に硬直がとれてより一層泣き声が大きくなったのだ。……………安心したためだと、思いたい。

そんなわけで俺の……………ゴホン……………私の腕の中で彼女は丸くなっていくのだ。涙も止まって、短くしゃっくりを繰り返す彼女はとても真つ赤な目をしていた。

「……………それで、落ち着いたかね？」

「ぐずっ……………はい。どうもすみませんでした……………」

「……………ふむ。とりあえず名乗ろうか。私はアーチャーという……………」

……………君は？」

「……………エルミューダ・K・ホンダ……………です」

「ほう……………日本人とのハーフか？なるほど。顔の彫の深さと黒髪はそういつことが」

泣きやんでくれたので自己紹介をしたまでにはいいが……………続かない。

何故こんな森の中にいたのか……………だめだ。いきなり相手の中心を付くことになる。

吸血鬼というのはどんな気分だ……………これもだめだ。何処をどうとつても嫌味にしか聞こえない。

「あ、はい。そうなります」

「その間の吸血衝動はどうした。君は真祖ではなくただの吸血鬼のようだが？」

「……………え〜っと……………自分の血を吸っていました。……………人から吸う気にはならなかったので」

「ほう……………吸血衝動をそのような形で抑えられるのか」

「とりあえず血が喉を通過すればいいみたいです」

・
・
・
・
・

「なに？エミユは倫敦生まれなのか」

「アーチャーさんは倫敦知ってるんですか！」

「ああ。この世か……………この国に来る前に住んでいたことがあってね」

「そうなんですか！私、あの国大好きです！嬉しくて楽しい思い出

「いっぱいです！」

「私もいい国だと思うよ。……………今となつては真冬のテムズ川に突き落とされたのもいい思い出か……………」

「……………え？」

・
・
・
・
・

会話つて意識すると続かないよね？いや、そんなことはどうでもいいのだ。

「とりあえず、まとめようか」

「はい」

「君が吸血鬼と化したのは凡そ三年前。倫敦生まれの倫敦育ち。早朝の牛乳配達員のバイトの途中、やけに朝霧の濃い中ショートカットとして森を抜けていたら同じバイト仲間の子が倒れていたので介抱しようと思つた。すると霧の向こうから真っ黒な格好をした男がやってきて、噛まれたと」

「……………」

「……………ふむ。結論から言えば、君は人に戻れる可能性を有している」

「えっ！」

この世界での真祖以外の吸血鬼化のメカニズムは余り知られていない。その取り分けの理由として、原因は血を吸われると思いつまれているからだ。しかし実際のところ吸血鬼に血を吸われても貧血で倒れるのがせいぜいだ。

この世界での吸血鬼化は、そう……………吸血鬼の血を送り込まれること。

吸血鬼と人間の違いは 拳げれば限が無いが 血に魔力が含まれているかどうかだ。いや、正確に言えばどの魔法使いや人間にも魔力が内包されていればそれは血液に含まれる。決定的な違いは、濃度。

食塩水に例えよう。通常の魔法使いの血液を水、魔力を塩としたとき通常の魔法使いは 3g / ? となる。逆に吸血鬼の場合は常に飽和状態といってもいい。

そして吸血鬼の血液は未だに解明されていない要素が幾つもある。こればかりは解明してないのでわからないが、その中に原因となるものが含まれていて魔力と強く結びついている。つまり魔力ある要素、という式も成り立つ。

その要素が極めて魔力依存性の高いものだとしたら？人間の血液
中の僅かな魔力では足りず、体内中の血液という血液を求め、巡る。

もし血液中の魔力が足りなければ？当然魔力を、血を求める。吸
血鬼と同じように、衝動が起こる。魔力を補給しろと。

つまり魔力を補給しなければ吸血衝動は収まらない。エミユのよ
うに自分の血液を吸ったところで効果はなく、当然押さえ込めるは
ずもない。彼女の場合は思い込み、プラシーボ効果によるものなの
だろう。「吸血鬼は血を吸えば大人しくなる」という思い込み。

そしてその欲求は言わば吸血鬼にのみ発動する血の呪い。本来吸
血鬼にのみ働くがそれが吸血鬼でなければ？なんてことは無い。魔
力補給が可能な体に改変される。強制的に。これが吸血鬼化の正体
だと協会は定めている。

恐らく吸血鬼であれば吸血鬼化を解除できるワクチンを作り出す
ことは可能だろうが、解除は現段階では無理とされている。唯一可
能性があるとすれば体中の血をすべて抜き、純粋な輸血するだけだ。

だが、忘れてはいけないのはその吸血鬼化は血の呪い。呪いであ
ることを。

呪いとは須らく魔術的要因と密接なかわりがある。つまり発動
または存在自体が魔術。

ルトルブレイカー
破戒すべき全ての符 魔力で強化された物体、契約という関
係、魔力によって生み出された生命といった魔術に関するもの全
てを「作られる前」の状態に戻してしまう究極の対魔術宝具。

「吸血鬼化の呪いに魔術要素があり、それを寄り代に発動しているのなら……呪いの発動そのものを、いや、呪いそのものを失くす。君が血を混入させられる前の状態、吸血鬼となる前の状態に戻すことができる」

「っ！それ、本当なんですか!？」

「だが同時に問題もある。先ほど言ったように、これに魔術が関わってなくてはいけないことが1つ。もう1つが………対象が生長する生物であることだ」

そう。固定された魔術や成長することの無い、生きていない魔法生物に関しては何も問題なく使える。だが問題は成長するということ。破戒すべき全ての符は、「作られる前」の状態に戻すこと。

これを身体的に変化したものを対象に発動すれば、どうなるのか。

「可能性ではあるが………君の容姿そのものが血が混入する前に、つまり3年前の状態に戻ってしまうかもしれない」

「………でも、それぐらいなら………」

「君は分かっているのか、体が短時間に変化することの恐ろしさを。成長するにしても、後退するにしても瞬間的に肉体のありとあらゆる細胞が数を変える。腕は短くなり、足も短くなる。そこは何かなるだろう。それでもかなりの激痛が走るが。だが脳はどうなる。」

現在の状態から脳の許容量が減れば、記憶障害。最悪植物になる可能性も捨てきれない。いや、即死の可能性ももちろんある」

「……………」

「それでも戻りたい、というのであれば拒否しない」

吸血鬼化を解く可能性もあれば、死ぬ可能性はある。

私はそれを危惧しているため警告をするが、最終的に決定するのは彼女だ。

「答えを急ぐ必要はない。吸血鬼であっても生き続けることはできるのだ。下手な賭けに出て命を終わらせることも無い」

「……………」

「もう一度言う……………答えを急ぐ必要はない。……………今日はもう眠るとしよう。一晩、考えてみる」

Side エルミューダ

そういつとアーチャーさんは木に依り掛かってしまいました。

………なんだか、会って間もないのにいっぱい話してしま
った……。

ただ、分かったことがあります。それはアーチャーさんにとって
も優しい人だってこと。

だから私に、危ないよって言うてくれた。

だから私に、答えを選ばせてくれる。

それらの行動の根底に同情や哀れみ、打算があつたとしても、そ
れはとても嬉しいことだから。

はい。私、エルミューダ・K・ホンダは既に答えを選択させてい
ただきました。

私は明日、一世一代の賭けをしますので………今日はもう、早く寝
ようと思います。

「………誰かが傍にいて………こんなにも安心………できる
んだね………」

薪の燃える音を聞きながら、私は眠りにつきました………。

朝独特の冷えた空気と僅かに聞こえる鳥の声で目が覚めました。

吸血鬼になってすっかり慣れてしまったことの1つですね。こればかりは嫌な習慣じゃありませんよ？

とはいえ夏も過ぎた今ではこの時間は些か肌寒い。

ぶるつと身を震わせると目の端に映る紅い何か。……………そういえば昨日は1人じゃなかったんだっけ……………。

(……………暖かそうだな……………アーチャーさん)

日が昇って間もない時間。寒い。起きていない。暖かそう。

……………ちよつとぐらいなら平気だよね？

アーチャーさんの肩に頭を預けて、目を閉じる。……………やっぱ、暖かい。

Side エミヤ

目が覚めると隣にえらい美少女がそこにいた……………寝よう。

いや、彼女がエミユであることは顔を見ればすぐに分かる。気に

なるのは、何故隣に、それもぐっすりと熟睡しているのかだ。

恐らくは、久方ぶりの安心感のようなものを感じているのだろうが、如何せん無防備すぎるぞエミユ。

しかしこれでは動きようが無い。エミユが起きる前には食材を集めたかったのだが……………ま、いいか。私は本来食事を必要としな
い体だし、彼女は吸血鬼。

しかし昨日は暗かったためよくわからなかったが、エミユの髪は
多少黒ずんでしまっているが銀色のようだ。

ふむ。では起きるまでこの髪の感触を味わっているとしよう。

……………今までの知り合いの中にこれほどまで寝起
きの悪い人はいたであろうか？いや、ない。反語。

正確な時間は分からないが、「大分明るくなってきたな」「ぐら
いから「夏過ぎたけどまだ日が高いんだな」と思えるくらい。

もう少し具体的に表すと、「部活動の全国大会会場へ向かうため
の集合時間」から「バスだの電車だの使って目的地に到着した時間」
くらい。

よつするに6、7時間だ。

流石に足が痺れるというものだ。いや、正確には足の組み方を変えたら痺れるだな。やはりこういつとき霊体化できる体が羨ましい。

しかし……

「……………そろそろ、起きてくれるとありがたいが……………」

正直暇だ。

それもそのはず。エミヤは目が覚めてから一步も動いていない。否、動けない。動くということは即ちエミュを起こすことになる。

いや、これだけ時間が経っているのだ。流石に構わないだろう。

しかし不謹慎だがこの子を見ていると思い出せずにはいられない。銀色の髪しか共通点が無いのだが……………

「……………姉さん」

思い出してしまうのは、いけないことなのかな。

「……………ううん……………」

「……………やっとお目覚めかな?」

「ん…………アーチャー…………さん？」

だが…………

「ああ、そつだ。それにしても随分と眠るのだなエミユは」

「うえ…………あ…………もうお昼…………ですね」

少しくらい甘えるのは許して欲しいな。

「答えは…………選べたか？」

「はい。私の答えは昨日の時点で決まっていたから。私は…………
…………戻りたいです」

「そつか…………」

やはり、というべきなのだろうな。彼女は吸血鬼である自分を豪く嫌っている節があった。

昨日の時点で出した答えを一寸の淀みなく貫こうとしていることからもそれは窺える。

「昨日も話したが、それは死ぬ可能性も付いてくる。……………いいんだな？」

「はい」

「人に戻る過程でかなりの痛みが付いてくる。……………いいんだな？」

「はい」

「若返り、身長が更に低くなるが……………それでも、いいんだな？」

「はい……………って、それはどうでもいいじゃないですか!!」

「いや。女性は大抵自分のスタイルについて何かしらあると思っているのだが……………無いのか？」

「無いかと言われればありますが……………そんなことを聞く空気じゃないですよ!」

なんとも締まらない。これから命を賭ける者の空気ではない。

緊張のしすぎは確かに良くない結果を招くことがほとんどだが、
緩みすぎるのもどうだろうか？

投影、開始

『ルルブレイカー破戒すべき全ての符』

「体の何処でもいい。これを突き刺せば、解除されるはずだ」

「これで……」

短剣、というにはかなり歪な形をしたそれ。剣本来の斬るという
概念を取り除かれた形。

傍から見れば怪しいの一言に尽きるそれが、今の彼女、エルミユ
ーダにはパンドラの最後の希望のように輝いて見えていることだろ
う。

「できることなら心臓付近か噛まれた場所が好ましいのだろうが……
……それで頸動脈を切ってしまったては元も子もないからな。指先
などでも問題はないはずだ」

「……はい」

「それとそんな形でも切れ味はナイフほどあるから、ザックリ逝か
ないようにしたまえ」

私には何も出来ない……。

気を強く持つように祈ること以外は………何も。

S i d e エルミューダ

渡されたのは変な形のナイフ。アーチャーさんの前なので口には
しませんでしたが、とても変です。

私はそれと右手に持って左手に向けています。

思い出すのはアーチャーさんのあの言葉。

「それとそんな形でも切れ味はナイフほどあるから、ザックリ逝かないようにしたまえ」……………もっと前です。

「若返り、身長が更に低くなるが……………それでも、いいんだな?」……………これでもないです。というか、女性にこんなことを聞くアーチャーさんはマナーがなっていないと思います。

「とりあえず、食事にするかね?」……………そう、これ。今の私を受け入れてくれた最初で、恐らく最後の言葉。

なんてことはない、本当にただの質問。

だけど、嬉しかった。

ただただ、嬉しかった。

だから、本当は少し、躊躇っているのかもしれない。自分の我侭だけを押し通そうとしていることに。だって、

「……………もしこれで死んじゃったら……………恩を仇で返すことになるのかな?」

あの人はあつて間もない私のことを本気で助けようとしてくれたから。

すゝは……………すゝは……………

けど、本気で助けようとしてくれたからこそ、

痛い痛いイタイ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛いイタイ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイ!!!

足が、手が、腕が、腹が、胸が、首が、顔が、血液が、全てが熱い。煮えたぎっているように熱い。

私は声に鳴らない悲鳴を上げ、そして意識を失った。

当然、そこから先は何も覚えていない。

それでも何かを語るのだとしたら、それは熱くて苦しくて痛い時間だったと言いましょ。

でも、次に私が目覚めたとき、アーチャーさんの泣きそいで嬉しそうなお顔が見れたから別にいいかなと思う。

エミヤシロウの旅記録 ～其の二 亜細亜編～（後書き）

あとがき？なかがき？その2

以上、第二話の其の二でした。いわゆる4話。

急展開？そうですね。書いてて自分でもなんだこれ？とか思いました。

吸血鬼云々はもちろんのごとくオリジナル設定です。真祖とはもはや別の吸血鬼とと思ってください。老いもすれば死ぬ。日の光に長時間当たっていると気分が悪くなり、体が動かせなくなる、など弱点もあります。吸血鬼化は魔法儀式のようなもので治療できるらしいので、ならルールブレイカーでもできるだろといった感じのノリです。

ではオリキャラのエミュについてです。どうぞ

エルミューダ・K・ホンダ

1963年生まれの12歳。ロンドン生まれのロンドン育ち。

因みに貨物船に乗り込んで海を渡った。中々アクティブである。けど基本的には臆病、一度決めると頑固。それこそ士郎のように。

ルールブレイカーにより肉体は9歳の頃に戻るも、何故だか髪の毛は変わらず、12歳で肩口ぐらいたったのが9歳の体では背中の半ばにまで掛かっている。

髪の色は銀。エミヤよりは濁った色をしているがイリヤよりも澄んでいる。

瞳の色は赤の強い紫色。

体をきれいにしてきちんとした服を着せればイリヤに見えないこともない。というかそっくり。エミヤにしてみれば思わぬ悩みの種。違うと分かっているけどどこか重ねてしまうご様子。

好きなもの アーチャーさん、ネコ、かわいい服、アーチャーさんの料理

嫌いなもの アーチャーさんの皮肉な顔、争い、ぬめりのある食べ物（なめこ、オクラなど）

とりあえずアーチャーが好き。吸血鬼だった自分を普通に扱ってくれた初めての人だから。でも言葉にできない。吊橋効果とも言つ。最近、アーチャーというのが偽名と分かって（証拠はないが）本名が気になって眠れないとか。彼が魔法使いに追われていることを知って、何とか力になれないか考えている。アーチャーの元で目下日本語勉強中。

こんな感じ。次の話でも大分時間が跳ぶのでこの設定を適用してください。

どうぞよろしく願います。

エミヤシロウの旅記録 く其の三 阿弗利加編く（前書き）

総合PV10万 & 総合ユニーク1万 & お気に入り100突破しました。ありがとうございます。

ネギま世界の賞金はどついう基準で決まっているのだろう？今回も短いです。賞金額の日本円を年代によって変更するのはぶっちゃけ面倒なので1ドル＝100円で押し通します。そついう強引なところが気に食わない方はお引き取りください。勝手ですみません。

エミヤシロウの旅記録 其の三 阿弗利加編

Side エルミューダ

アーチャーさんと出会ってどれほど過ぎたのだろうか。

時計など持っていないし、カレンダーもない。唯一確認する方法は町に着いたときだけ。

けど、当分その方法も採れそうにありません。

なぜなら

今砂漠のど真ん中だからです。

暑いです。果てし無く熱いです。

向こうロンドンにいた頃は海が見たい、砂漠を見たい、月に行きたいといろいろなことを思いました。でも、もう十分です。この暑い中、延々と同じ光景の中を歩き続けることは苦痛にしかならないと実感しましたから。

せめてこの体にもっと体力があれば、何かが変わったかもしれないのに。

せめてこの体にもっと体力があれば、歩き続けることができたかもしれないのに。

せめてこの体にもっと体力があれば……

……こんなにも赤面せずに済んだ筈なのに。

何を隠そうこの私、今、アーチャーさんに背負われているのです。

因みに今のアーチャーさんの格好は真っ黒なズボンに真っ黒な鎧（？）に真っ赤なマント（聖骸布というものらしいです）ということでも暑そうな格好です。手には何も持っていません。私が前見たときは鞆を持っていたと思うのですが、気付いたらなくなっていました。そのことを聞くと、「ああ、そのことか。ただ消しただけさ。何、簡単なことだ。私は魔法使いだからね」と答えました。言い終わつた後ちよつと昔を懐かしむような顔をして。

いやー……魔法使いって本当にいるんですね。元吸血鬼の私が言うのもなんですけど。

でもアーチャーさんって全然魔法使いらしくくないですよ？杖も持っていないし真っ黒の帽子とマントも持っていないなんて。いえ、疑ってるわけじゃないんですよ。魔法使いじゃなかったら私を治せるはずがないですから。

とと、話がそれてしまいました。

何故こんなことになってしまったのかという事です、単に私の体力がないだけなんです、長らく吸血鬼をしていただけあって貧弱という要素が抜けてしまっていたんです。

あの時は実質十二歳児の体でも成人男性並みに動けましたから。

九歳児の体に戻ったのにかつての体と同じように行使していたらすぐに疲れて動けなくなることもなんて簡単に予想できたはずなのに………うう。

暑い日差しと熱の籠った空気と焼ける砂。歩きづらい砂の上を歩いていられるはずがない。よって早々にダウンした、そういうことだ。エミヤからすれば当然の結果だというわけで、こうなることを予測して邪魔になる投影品を予め消しておいたのだ。

後ろで赤面しているエミユのことなど気にもかけないこの男は当然エミユの様子に気付くこともなく、ただひたすら休ませることの出来るオアシスを探していたのだ。

S i d e エヴァンジェリン

今彼女は休憩している。

誰が見ても「あ、こいつ寛いでやがる」と言ってしまうたくなるほどに。

空には雲ひとつない炎天下の下、眩しすぎる日差しを遮ることができる唯一の場所で。

僅かに茂った草木と、小さなせせらぎと流れる水。人はそこをオアシスと呼ぶ。

「流石は赤道近辺といったところだ、暑い」

「服も黒ケリヤ当然ダロ」

しかし暑いといつてもここは別だ。木々により日光は遮られ水場独特の涼しさと、時折吹くそよ風が実に気持ちいい。

暇つぶしにと始めた世界一周。昔は逃げ回るためによく砂漠を利用していたが、今改めて歩いて（飛んで？）みると随分と面倒くさかった。何処も彼処も見渡す限りの砂、砂、砂。何処に向かって歩いているのかも分からないこんな場所をよく使っていたものだ。いや、そうだからこそ逃げるのには丁度良かったのだらう。

ここも昔は森があったのだとは思えないほど広く、閑静だ。

まあその森の名残に、今世話になっている。

周囲に人払いの結界を布き、影のゲートを使って取り寄せた真っ白のプールチェアに同じく真っ白なビーチパラソル。そして真っ白なサイドテーブル。透き通るように青いトロピカルジュースも忘れずに、どこかのプライベートビーチの如くデコレートしてある。

「だが、暑いからこそ、感じることでできるものもまたそこにあるというものだ」

「ソレヨカ、涼シイ部屋デ酒ガ飲ミタイネ」

「二言目には酒、酒、酒……ほら、これをやるから少し静かにして
る」

「オツ……ナンダヨ。安モンジャネ
イヤ、誰モイラネ
エトハ言ツテナイゾ？」

「やれやれ………これでもう一息つけ………む？何かが結界内に侵入してきたか？」

「しかも一直線にこちらへ向かってくる。認識障害も効果をなさないか………となると魔法関係者か、面倒くさい。」

「はぁ………何のために結界を張ったと思っているんだ、侵入者は」

「ふむ、それはすまなかった。こちらは連れがへばってしまって休憩場所を探していただけなのだが」

「そこは空気を読まんか空気を。何のための結界だ」

「ほう？つまり君はこの僅か九歳の子女を猛暑の砂漠の中連れまわせというのかね」

「誰もそんなことは言っていないだろう。オアシスが見えた、だが結界が張ってある。明らかに何かある場所に連れて行くわけには行かない。よし、別の場所をあたろう。このぐらいは考えろと言っているだけではないか」

「残念ながらここから半径4キロの範囲には他になかったのだ。多少の危険を孕んでいたとしても、目の前の高級素材に手を伸ばしてみたくなるだろう？そういうものだ」

「たかが数キロではないか。そんなもの飛べば時間も掛かるまい」

「生憎この身は飛ぶことの叶わぬ非才なのでな。……」

「……それよりも、いい加減彼女を休ませていいだろうか」

奴の後ろには漫画のごとく目を回した少女が顔を赤くして頂垂れていた。

「症状的に結構重度の熱中症だと思うのだが。先ほどからまったく反応がない」

「それを先に言わんか！とりあえずパラソルの下に寝かせろ、私は水を用意する！」

「了解だ」

台無しだった。なんかもう色々台無しだ。

砂漠の中にある小さなオアシスでゆったりと寛いでいたところに、熱中症の患者が運び込まれた。

ああ、そのことだけなら別に困りはしない。適当に日陰に放置して目が覚めたら追い出せばいいのだから。

だが、今私の目の前にいるのは、いつかすれ違ったことのある『化け物』。

そう、化け物だ。この私が本能的に危険だと感じたこの男。この男だ。この男のはずなんだ……が、

「……うむ。上出来だ」

何故こいつは紅茶を入れて寛いでいる……！

パラソルとプールチェアにテーブルの一式がああ少女に占領されたのもう一式用意しようとした。

先ほどまで飲んでいた甘いトロピカルジュースとは反対に紅茶を飲もうとついでに茶葉も取り出した。

そしたらいつの間にか茶葉は奴の手の中にあり、見慣れた紅茶ポ

ットを片手に既に蒸らし時間へと進んでいた。

そうして出来上がった紅茶なのだが…

「……………？どうした。飲まないのか？」

「……………少なくとも出会ったばかりの身元不明の男が入れた紅茶など飲む気にはならないだろうが！！」

「ああ、君の言っていることは至極当然の事だ。別にそう思うのは構わない。だが、この茶葉……恐らくダージリンのSFTGFOP。それもセカンドフラッシュだろう？名実共に名高いダージリン、98の湯で2分と50蒸させてもらった。もちろんゴールドエンルーに則っている。紅茶の良し悪しが分からない人間にとってはどうでもいいが君は違うようだ。それは取り出した茶葉からも分かる。だからこそ分かるはずだ」

「……………」

「私を入れた紅茶は、飲む気になれんかね？」

実にいい香りが漂ってきて、視線がちらちらとそちらに向いてしまふ。

ああ……………飲みたい。

口に持っていく動作でその香りを仰ぎ、口に含み口内をその豊潤な香りで満たし、独特の渋みを味わいたい、熱いともいえる温度が

喉を通る感触を感じたい。

ああ、くそっ！どうにも私は難儀な性格だ！

素直に手を伸ばして飲めばいい。ただそれだけのことが出来ない。一度ああ口にしてしまった以上、覆したら、なんと云うか……こう………負けた気がするのだ。

しかも奴はそんな私の葛藤を知ってか知らずか、涼しい顔で口にいる。

「……………悩むのは自由だが、冷めては香りが無くなるぞ」

その一言が引き金となった。

悩んで迷って、それで紅茶を飲む最善のタイミングを逃すなど愚の骨頂。

恐らく一種の反射だろう。気付けば私は既に紅茶を口にしていたのだから。

ほう……………思わず頬が緩んでしまう。それは当然素の茶葉の良さも関係しているのだろうが、今まで飲んできた紅茶で一番とも思える香りと味だった。

「くくく……………」

「……む、何がおかしい」

「いや、おかしいところは何も無いさ。ただ、散々飲むのを渋っていた紅茶を飲んだその感想を聞こうと思ったのだが………君のその顔を見れば言わずもがな」

「つな！」

羞恥で顔が赤くなるのが分かる。

奴とはほんの数回言葉を交わしただけだが、それでも絶対といえることが1つ、分かった。

「お前……性格悪いだろ……」

「……まあ……否定はしないがね」

「それは自覚していて直す気が無いと？殊更性質が悪い」

「それは失礼。何分この話し方と考え方は、いつの間にやら定着してしまっていたのですね。私自身そこまで気に入らないというわけではないので、そちらも是非とも気にしないでくれ」

「物凄く傲慢なお願いだな、おい」

なんだか、私1人が気を張っているようで疲れる。

この男、飄々としている……というわけでもないのに、掴み所がなくその全体像が把握できない。

強者だということも分かっている。いつかすれ違った際の雰囲気、それが醸し出していたからだ。

だが今はどうだ？

強者らしい威圧感や雰囲気すら感じさせない。それは私にも出来ることだが、あくまで戦闘など緊張する場面とは無縁の場所だ。

この男、恐らくアーチャー、は私に気付いているだろう。

眼前の現代で最強の魔法使いと謳われ、同時に最凶の魔法使いと揶揄される私に。

それでいて尚この態度。

随分と肝が据わっているのか。はたまた私程度では危惧するに値しないと云いたいのか。

「君は………ふむ。いつまでもお互い三人称で呼ぶのは好ましくないな。袖振り合うも多生の縁という。ここらで1つ名前の交換でもしようか」

などと考えていると奴からふざけた提案が出た。

白々しい。

まあ確かに自己紹介が必要ないからといって拒否をすれば、私の尊厳に関わる。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはそんな基本的なことができない奴だと。

今まで散々名乗りを上げてきたのだ。

「とりあえずの礼儀というやつだ、私から名乗ろう。私はアーチャ」と名乗っている」

「ふん。名前の交換と言っておきながら、自らは偽名か？」

「君の言うことは全く正しい。しかし私は、何故か知らぬが他の魔法使いに追われているのだ。昔から、壁に耳あり障子に目ありというだろう？」

「こいつはアホなのかと疑ってしまう一言だ。」

「ここ最近異常ともいえる早さで賞金が上昇しているこの男が、「何故だか知らない」などという。」

しかも壁に耳あり障子に目ありなど、日本の諺を見た目外国人の私に使うか普通。ましてここは私の結界内だ。侵入者がいれば直ぐに察知できる。」

「……………はあ……………私はエヴァンジェリン。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

「ほお…君が噂に名高い闇の福音、マクダウエル嬢か」

「む？何だその反応は。どうせ知っていたのだらう？自分で言うのはなんだが、有名だからな私は」

「噂や文献で君のことは知っていたが写真などは一切見たこと無かつたものでね。いやはや、まさかこんな幼子とは」

「幼子いうな！私は500以上だ！」

「……………ならご老人、とでも呼べ「ババアでもないわ！！！」…
…ハア…言っていることが支離滅裂だと思わんのか」

「思わん！！」

全く失礼な男だ。こんな見目麗しい女性を見て幼子だババアだの
言いおつて！

まあ、そのようにむきになる姿こそが、正に幼子のそれなのだが
幸か不幸か彼女は全く気が付かない。

そしてここで意趣返しをしようなどと画策するから子供なのだ。

「アーチャー。そちらはどうなんだ？名前が出始めて数ヶ月で10
3万ドル（約1億300万円）の賞金を懸けられるなど、はつきり
言って異常だぞ？魔法協会も本格的にお前を捕らえようとしている
ではないか。そのうち、生死を問わず、なんてことになるかもな…

……ククツ」

おお、おお。目を見開いちやっとなあ。闇の福音から面と向かってそんなことを言われれば誰だって驚きはするだろう。

ふふん 私を虚仮にした当然の報いだ。

確かにアーチャーを驚かせることは成功して、ささやかながら報いることもできただろう。

だが、当の本人といえば

「なっ！私は………賞金を懸けられていたのか！？」

「おiiiiiiiiiiiiiiii！そこか！？驚くところはそこなのかああああ！！？？」

「……は！まさか他の魔法使いに襲われていたのは、私の賞金を狙ったことだったのか！？」

「遅い、気が付くのが遅すぎるぞアーチャー………！」

全く見当違いのところで驚いていた。

「では何か？貴様は向かってくる魔法使いの悉くを殺してきた、と」

「ああ」

「で、その理由は？」

「一緒にいた子、エルミューダというんだが、その子は元吸血鬼でな。魔法使いという『正義の味方』は化け物に対して寛容ではないだろう？殺しに来たのかと勘ぐってしまい、つい…な」

「それにしてもこの額の上がりようは尋常じゃない。何か大きなことでもやらかしたのだろうか？」

「……………云十人の集団を、十数度…な」

いつの間にか相談みたいになっていた。

「いやはや……………それにしても驚いた。まさか私に賞金が懸かっているとは……………これでも形を潜めていたつもりだったのだがな。」

やはり、エルミューダを養うための金を賞金首を狩り、賞金稼ぎを家業としていたからそこから噂が広がってしまったのか？

「しかし私がそれだけの人数を殺していたとして、私の6倍近くの賞金が懸けられている君は殺した数も実力もかなりのものなのだろうな」

この一言がまさかこう続くなんて誰も予想し得なかっただろう。

それじゃあお互いに戦って、お互いに実力を肌で感じ取ってみよう、と……。

S i d e エヴァンジェリン

異常だ。はっきり言ってこいつは異常だ。

幾ら有名な賞金首や、魔法使いを殺したとしてもたかが数ヶ月でこの額は異常としか言いようがない。

この私も、全ての吸血鬼に掛けられる低額な賞金から始まり、真祖とばれ、本国や協会本部から差し向けられる手のものを殺し続け、時として死んで魔女狩りの時代を乗り越えてきた私が数百年と生きてきてようやく辿り着いた額だ。

それをたった数ヶ月、私を仮に500年、アーチャーを仮に半年の6ヶ月としよう。それでも1千分の1の時間で私の6分の1に辿り着いた。

もし金額が殺した人数と比例するのなら奴はここ数ヶ月で一体何人を殺めたのだ。

元とはいえ吸血鬼を抱え、キマイラという人では手の出せないほ

どの化け物を殺し、という付加要素はあれども単純に考えて私の殺した数の6分の1。

私は誰よりも強く、誰よりも殺しを知っている、そう自負していた。だからこそ、

「しかし私がそれだけの人数を殺していたとして、私の6倍近くの賞金が懸けられている君は殺した数も実力もかなりのものなのだろうな」

だからこそ、この一言が私の癪に触った。

「ならこうしよう。貴様と私、お互いにどれほどのものなのか殺り合ってみようじゃないか」

エミヤシロウの旅記録 〱其の三 阿弗利加編〱（後書き）

あとがき？なかがき？その3

以上、第二話の其三でした。いわゆる5話。

今回は短めです。次が戦闘になるとの事で少々覚悟を決めさせてください。

次の話は……

エヴァ「どうせだから真夜中に偶然であった二人、という設定にしよう」

アチャ「……………」

エヴァ「最強である私が最近名の売れてきた賞金首兼賞金稼ぎを偶然見つけて、という感じがいいな」

アチャ「……………」

エヴァ「そして二人で他愛もない話をして、戦闘開始……………素晴らしい…私は作家としての才能もあるんじゃないのか……？」

アチャ「……………」

エヴァ「いいな？私たちは今夜初めて会うのだからな！忘れるなよアーチャー！」

アチャ「……………なんだ……………この途方もない虚脱感は……………」

ゼロ「ケケケ……………」

という会話の後から始めるので、冒頭で話がかみ合っていない？と感じても突っ込まないで下さい。

あと、エミユはどれだけ寝てるんだという突っ込み（ry

ちなみに次は、「阿弗利加編 - 2」となります。

エミヤシロウの旅記録 く其の三の二 阿弗利加編く(前書き)

この回もオリジナリティで溢れています。ご注意ください

エミヤシロウの旅記録 其の三の二 阿弗利加編

「……………貴様が…アーチャーか？」

「人に名を尋ねる場合は自分から、と言いたいが……………ふむ。その通りだ。そちらはマクダウエル嬢と見ていいのかな」

私がそう問いたなら彼女は唇を釣り上げ、こう答えた。

「ああそうだ。私こそは人形使い、不死の魔法使い……………闇の福音エヴァンジェリンA・Kマクダウエル。最強の魔法使いだ」

「オイオイ御主人、オレモイルゼ」

「ああ、君のことも知っている。人形使いの殺戮ドールの最高傑作であり従者。チャチャゼロ、だろう？」

チャチャゼロ。おそらく世界で初めての意思を持った人形。

エヴァンジェリンに魔力供給されることで自立も可能。

小さな肢体でありながら武器を片手にする戦闘を好む。その身の軽さを生かした高機動戦闘はかなり光るものがある。

そんな彼女にも二つ名が存在する。『殺人ドール』、『月夜の殺し屋^ダ』前者はそのままで。後者はエヴァンジェリンからの魔力供給量^{ルナマイ}

が増え、能力が格段に上がる満月の夜に例えているのだろう。

「それで？最強の魔法使い様が一介の賞金稼ぎに何の用件かな。ああ、いや。これは純粋な疑問だ。……………君自身が賞金稼ぎに接触という行為に対する……………ね。私の記憶、知識が間違っていないなら君は賞金稼ぎを歓迎していないはずだ」

エヴァンジェリンは悪名高い真祖の吸血鬼だ。

初めは僅かな賞金だった。吸血鬼として生きている者には等しくつけられる程度だ。

そして、その金額に目の眩んだ賞金稼ぎが次々に襲ってくるため迎え撃った。

自衛のために繰り返した行為が皮肉にも彼女の首を重くした。

自分の意思とは関係なく、生きたいから……………生き物として当然の欲求に従った。

協会は彼女を悪とし、彼女もまた悪となった。

だが彼女は他人を殺すといった行為を良しとしていない。

協会の被害記録によれば殺されたのはほんの一握り。ほとんどは氷付けにされただけで、その後解凍され死ぬことはなかった。

他人を殺さない優しい吸血鬼。

私は彼女、エヴァンジェリンをそう認識している。

だからこそその疑問だ。襲われる可能性を否定できない存在と接触する行為。

「ほう……随分と調べている様だな、アーチャー」

「自慢ではないが殊君に関してはそれなりの知識を有しているのでね。さて、こちらの質問に答えてくれないか？」

「一言でまとめるのなら……気になった、だろうな」

「これはまた随分と抽象的なことだ」

「お前は周りの人間の評価を知っているか？正体不明の賞金稼ぎ、戦闘スタイルも不明、そして最強」

アーチャー……ごく最近に名を馳せはじめた本名不明の実力者。

戦闘スタイルは確認できていないが、名から推して弓を使用するものとされている。

腕は確かで、協会や他の賞金稼ぎやギルドが手を拱いている相手を拍子抜けするほどあっさり捕獲、もしくは殺害する。

彼に捕らえられた者は皆口を揃えて言う。

「あいつはおかしい。今まで逢った人間とは比べものにならない。勝てるどころか逃げることもすらできない」

「もしあいつに勝てる人間がいるなら、それは人間じゃねえ」

「変な質問をされた。君の正義はなんだ、信念はあるか、と」

「こうなんだ、と返したらなるほどな言われた」

不可思議で理解に苦しむものだろう。

アーチャーの行いそのものは俗に言う正義だ。でありながら悪に正義を聞く。

「考えるにお前……………迷っているのだろうか？……………正義に」

「……………確かに、迷っている。正確には探している、だがな」

「ふん……………つくづく可笑しな奴だ。正義を探す？ふざけているのか貴様……………正義に形はない。真贋もない」

「自分でも理解しているつもりさ。この行いに意味はなく、ただの徒勞であると」

正義とは確固たる形を持たない、各々の考えや思想により柔軟に変化する。

「クツ……ククク……つまり愚かな貴様は私にも教えを請うと、そういうことか？」

「ああ。そのように受け取ってくれて構わない。……それで？名高き悪にご教授願いたいのだか？」

「身の程を弁えろ、と言って一蹴するのが当然なのだが……」

「ふむ……それは実に残念だ」

「まあ待て。誰も教えないと言っていないだろうが。……知っているかアーチャー。私は悪い魔法使いだ。悪にものを頼むときは代償がつきものだろう？」

「つまり君は、私に君の望むモノを差し出さなければいけないと？」

「いや？貴様は特別だ。形だけのモノなどいらん。私が貴様に望むモノは一つ…………力を示せ、最強！！」

「弱者には何も与えず、か」

「最強の名がふさわしいのか私が見極めてやる。この！最強の魔法使いがなー！！」

ああ…………恐らく俺はこの月の美しい夜の邂逅を忘れることはないだろう。

私ではなく俺であったことは不覚だが。

月を背に不敵に笑う彼女はどこか、侵すことのできない神聖なものに見えたのだから。

S i d e エヴァンジェリン

愚か者……なる程、確かに愚か者だ。

有りもしないものを求め、望む。

己の行動を異端と理解しながらも進む。

やはり私の感じたものは正しかったわけだ。真つ当な人間ではない。チャチャゼロの評したように歪んでいる、実に歪な存在だ。

だがな

「最強の名がふさわしいのか私が見極めてやる。この！最強の魔法使いがな！！」

最強は私だけだ！

「行け！チャチャゼロ！」

「アイサー御主人！」

今夜の月は十六夜月。満月と比べればまさに月とスッポンだが、それでも昼よりは魔力量が増える。

チャチャゼロに送る魔力もかなり豊富だ。熟練の剣士であっても今のチャチャゼロには勝てないだろう。だが、

「……………速いな。それに重い」

「ケツ…一撃で終わってしまつたらツマンネエト思ってたが……………イネエー！」

チャチャゼロの斬撃を黒い中華刀で受け止め、奴は悠然と立っていた。

……………アーティファクトか…？かなりの魔力を感じるな。

得物に関してはあちらの方が上か。ならばこのまま打ち合ってもチャチャゼロの鉈が痛むだけだ。ならば……………

「チャチャゼロ！奴の足を止める！私がでかいのを一発見舞わせる！」

「オイオイ御主人……………俺ガコイツニ勝テネエツノカヨ！」

くっ、こういう時は完全な僕であれば手が掛からないと言つのに。
チャチャゼロは奴に勝てない訳ではない。ただ、現在の魔力供給量では厳しいということ。

思いのほか、チャチャゼロの維持には魔力が掛かる。

チャチャゼロに魔力を多く割けば、その分私の攻撃か防御が緩くなる。それが危険なのだ。

奴はアーチャーだ。弓を使うとは限らないが、遠距離攻撃を得意とするからそう名乗っているのだろう。

それも生半可なものではないはずだ。

それを魔力を消費した状態で受ければ流石の私も防げる自信は正直言つて無い。

なればチャチャゼロを足止めにして、余った魔力で奴を集中放火する。

確かにアーチャーの魔力は膨大だ。だが、奴は障壁を張っていない。

張れないのか、余裕からなのかは分からないが、そこを突かせてもらつまで！

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「む？詠唱に入ったか……流石にでかいのを撃たれるのは厳しいな」

「シャーネエカ……御主人ノ邪魔ハサセネエ！」

「むっ！」

なんだかんだ言いながらも結局言っことを守ってくれるんだがな。

可愛い奴だよ。

カキン、と金属同士がぶつかる甲高い音が幾らか耳に響く。

剣戟をBGMにしながら、更に思考を沈める。

魔力を練る、練る、さらに練る。

一矢によく練った魔力を込め、一矢でも多く作り上げる。

「チャチャゼロー！」

さあ……こちらの準備は整った。

「魔法の矢！連弾、氷の222矢！！」

この圧倒的なまでの数の暴力を防げるものなら防いで見せる！

ものの一瞬で222の氷はアーチャーに襲いかかる。

決まった！完全に回避不能なタイミング。余程強固な障壁でも張っていれば分からないが奴にそんなものは無かった。

ならば……

強烈な冷気と共に発生した霧がはれていく。

「なる程……これ程とはな。発射タイミングも良く威力も申し分ない」

目に映ったのは変わらずに立つ奴と

「だが、私を殺したいなら数よりも防ぐことのできない、君の究極の一を繰り出すべきだ」

足元に落ちている凍りついた無数の剣。

だがそれらは直ぐに魔力の粒子となって還っていった。

いや、一振りの白い中華刀が残り、奴が引き抜く。一瞬ではあるが見えた他の剣は凍っていたが、あの中華刀は霜一つ付いていない。

それにあの形状……

「二刀一对の中華刀……大極陰陽の印……まさか干将莫耶か!？」

「……ほう。流石は古き真祖。色と形状で名を当てるとは」

「ほざけよアーチャー。よもや一刀で私の相手を務めようとしたのか」

大陸中国の秘宝、干将莫耶。死が2人を分かつとしても、何時までも共にいようとすする夫婦の剣。

その真価は両方が揃ってこそ発揮する。元から双剣として作られたので形はもちろん、柄の形や重心まで対称的に作られている。

二刀揃えば扱いやすく、一刀であれば扱い難いという代表的な双剣。

奴は二刀を持っているのにあえて一刀で、力の出せない一刀のみで。

「……私を……侮っているのか!アーチャー!」

大陸国中国の伝説、干将莫耶。それをどこで手に入れたのか。それをどうやって手に入れたのか。損なことは最早どうでもいい。

徹底的に叩き潰す！！

「この私を……誰だと思っている！氷爆！」

ほぼ無詠唱で放った氷爆も、常人のそれを遙かに越える瞬発力により回避される。

これは予測済みだ。

「キャツハ！」

回避直後のチャチャゼロによる襲撃。

と同時に、

「む？これは……」

「忘れたか…私は人形使いだぞ？」

糸を展開しアーチャーを捕縛する。

両足、左腕、胴を二重三重に絡める。首と右腕は他よりもワントーン遅れたため避けられたが、目的は足止めだ。

本命はチャチャゼロによる接近戦。

直ぐに糸を切断されたがその一瞬が仇となる。

右袈裟斬りを干将で受け、耐えきれず手を離れる。

逆袈裟斬りを莫耶で受けるも、こちらも同じように弾き飛ばす。

「モラッタ！」

上段からの兜割。奴の手に得物は無い。

終わったか……。

なかなか持ちこたえたが、所詮そこらの賞金稼ぎと同じか。

あの時奴に感じたものは間違いだったと……つまらん。

背を向ける。

「始末をつけたら追ってこい、チャチャゼロ」

「……………イヤ、スマネエ……………御主人。無理ッポイゼ」

そんなチャチャゼロの声と共に障壁に何かがぶつかる。

大破したチャチャゼロだ。両腕両足は付け根から切り落とされ、顔の左半分が抉られたように無くなっている。

「おい！どうしたチャチャゼロ！」

「ケ……ケケ……ヤッパイ……ツハ、化ケ……物ダゼ」

「くっ……」

侮っていたのは本当はどちらだったのか。

甘かった。

完全に私のミスだ。

私を侮っているのか……本気になっていない私など相手にもならないだろうな。

所詮そこらの賞金稼ぎと同じ？……どれだけ節穴な目を持っているのだ私は。

感じたはずだ、私は。あれは私と同じ化け物だと。

私などでは相手にならないと。

侮っていたのは……私の方だ。

その私の奢りが原因となり、結果チャチャゼロがここまで手ひどくやられた。

「……非礼を詫びよう。アーチャー」

いい加減目を覚ませ、闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。

目の前にいるのは敵だ。最強の魔法使いに最強の騎士、最初にして最後の対等な敵。

侮るな。敬意を払え。

継るな。プライドを捨てる。

慢心を捨てる。

油断を捨てる。

誇りを捨てる。

「私はエヴァンジェリン！エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル！最強の魔法使いだ！！」

全て、彼と対等であれ。

でなければ、彼に勝つことは勿論のこと

「行くぞ……最強！」

「来るがいい……最強！」

戦うことすら叶わないのだから。

氷が舞い、闇が広がり、剣が舞い、爆音が響く。

無詠唱の魔法の射手と投影剣が飛び交う。

そのどれもが牽制。互いの頬を掠め、袖を掠め過ぎていく。

決定打を打ち込める隙がない。

だからこそエヴァンジェリンは攻めあぐねっていた。

（……くそ……。アーチャーの奴め……全く隙がない。）

近距離戦ではチャチャゼロは敗れ、魔法を駆使した遠距離戦でも倒せない。

魔法を牽制に使い接近戦を挑んでも魔法に目もくれず、打撃をいなされる。

接近戦で足を止めて所々で無詠唱魔法を挟んでも決まらない。むしろそれを逆手に取られ魔法発動後の硬直を狙われる。

本来であれば虚勢を練り込んだ戦い方は、上級者との戦闘では正しい判断だ。虚勢だろうと何だろうと、手数を増やしてあたるのは相手に攻勢に転じさせない尤もだ。

しかし殊エミヤに対してそれは愚策。

彼の戦闘は勝つことが目的ではなく負けたくないことにある。

戦いの本質は攻めではなく守り。更に、固い守りを堅いものにしていて彼の数少ない才能。

鷹の眼

ありとあらゆるものを視ることができる眼。

そしてもう一つの要素。

心眼

かなり豊富な戦闘経験からなる戦闘術。

鷹の眼により腕、脚といった筋肉の動きから目の動きを見極め、繰り出される攻撃を予測。同時にコース予測をし、攻撃の真贋を見

抜く。真に対してのみ回避行動を選択実行する。

ただそれを繰り返すだけ。そこに思考時間はなく、タイムラグが存在しない。

幾ら手数を増やそうとも、その中の一握りにしか当てるための攻撃が無ければ、それはエミヤにとって「牽制によって足が止まる厄介な攻め」ではなく「手数の少ない攻め」に成り下がる。本命だけを防げばいいのだから。

元より防御に秀でたエミヤの剣は、当然の如くその程度では破れない。

それ故愚策。

エミヤの剣を破りたいのならば、接近戦において圧すこと。

またはエミヤに攻めさせること。

この二点に限る。

だがエヴァンジェリンが相手に攻めさせるといふ選択をするはずがない。

彼女の性格からすれば圧倒的な攻めへと変えることは明らかだ。

「（なれば防御も回避もできない攻撃をすればいいだけだ！）……
……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷精闇の精」

エヴァンジェリンが最強の魔法使いと呼ばれる理由はいくつかある。

一つは真祖の吸血鬼であること。

一つは膨大な魔力とそれをコントロールできるほどの技術。

一つは闇の魔法と呼ばれるオリジナルアート創作魔法。

そして、デュアルモーション重複詠唱。二つ以上の魔法を同時に行使するための高等詠唱技術を可能とすることだ。

これは同時に発動することも、ワントempo遅らせて発動することも可能なので戦術の幅が広がる技術だが、反面、使用魔力が通常よりも多くかなりの魔力制御技術を必要とするのだ。

それ故に現在重複詠唱を使える術者で公になっているのはエヴァンジェリンのみとなっている。

そしてエヴァンジェリンの行おうとしているのは多段魔法攻撃という方法だ。

多段魔法攻撃とは名前の通り攻撃魔法を時間差で発動する攻撃方法だ。

人海戦術の際に使われる方法である。

特徴は正に数にものをいわせただけ。とにかく弾幕を張り続けること。

戦術もへつたくれもない。

だからこそ明確な対応策もない。

「（魔法の矢、連弾、氷の3矢）闇を従え吹雪け！常夜の氷雪！！
（魔法の矢、連弾、闇の5矢）」

「……………む？」

……………いける。奴は全て斬り伏せるか回避している。

斬られればどうしようもないが避けた分は再び奴に襲いかかる。

「なる程。追尾性能付きの魔法か」

「その通り。つまり貴様は動き続けるか、足を止めて迎撃するか二つに一つというわけだ」

動き続けるならばこのまま魔法の矢を撃ち続ければ、疲労により動きが鈍くなるはず。

迎撃を選んだならばそこに闇の吹雪を撃ち込めば決まるはず。

「……………良いだろう。真正面から全て叩き斬ってみせよう」

「ふ……その余裕、（魔法の矢、連弾、氷の4矢）何時まで保つか
な？（魔法の矢、連弾、闇の8矢）」

攻める、攻める、攻める、攻める、攻める。

防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ、防ぐ。

「チツ……流石に堅い。なら……（遅延魔法設置、闇の吹雪）リク・
ラク・ラ・ラック・ライラック！来れ氷精闇の精！闇を従え吹雪け、
常夜の氷雪！闇の吹雪、セット！」

累計二つの闇の吹雪を遅延魔法としてセットする。

準備は整った。

「集い来りて敵を討て、魔法の矢、連弾、氷の130矢！！」

「……またそれか。一度通じなかったことを繰り返すのかマクダウ
エル嬢？」

「そう思うなら同じように防げばいいだろう？お得意の物質転送で
！」

「もちろん、そのつもりだが？」

今度ははつきりと見えた。虚空からでてくるかのように現れた剣群。

唇が歪む。

あの程度では魔法の矢は防げても闇の吹雪は防げない。

接触。

「解放」

闇の吹雪！

奴にストックした内の一つを放つ。

並の相手であればこれで十分だ。だが、相手は最強だ。それに、慢心は捨てた。油断もない。

一撃を放ってから僅かなラグを発生させ、更なる追い討ちを掛ける。

「解放　　闇の吹雪！！」

同種の魔法による相乗効果によりその威力は通常以上。

それでも奴が傷一つ負っていないければ、取れる手段がかなり限られる。

属性混合の上級魔法二本。単純な威力ならば古代魔法の上級……とは言わないものの、良いところまで食い込める。

そんなものを受けて無傷で居られる者などありはしない。

そうだ。私は勝ったんだ。無事でいられるはずがない。

だが目を向けた先には無情にも佇んでいるエミヤと、五つの花弁を持つ花が咲いていた。

「言ったはずだ、マクダウエル嬢」

花に守られているかのように立っている彼の紅い騎士は

「私を倒したければ」

唇の端を僅かに持ち上げて

「君の究極の一を」

不敵に

「もて、と」

笑った。

Side エミヤ

「集い来りて敵を討て、魔法の矢、連弾、氷の130矢!!」

その半分程の数を投影してぶつけ、壊れた幻想を発動させる。

130の矢に対し70の剣を当てることで、単純計算で残り60矢。壊れた幻想により発生する熱と風圧で残りを溶かし、軌道を外す。

生じた風と氷の冷氣でまた視界が遮られる。

(さて、エヴァンジェリンが余程の馬鹿でなければここらででかいのがくるはずだが)

強いマナの集まりを感じる。こちらの魔法は自身の小源を起爆剤として周囲の大源を纏わせ発動する。

そのため相手を視界に入れていなくてもマナ感知が得意なら、魔法の発動は感知できる。

魔法の威力が高いものならば尚更だ。

「……来る。正面から。」
I am the bone
of my sword.

防ぎきれただけの盾を創造する。

顕れる！

「熾天覆う……七つの円環……！！！」

衝撃と冷気が同時に伝わってくる。そして、重い。

直ぐに一枚、二枚と砕けていく。四枚目にも亀裂が走る。

そこで均衡したせいで気を抜いたせいか、更に押し掛けてきた圧力で体勢が崩れると同時に四枚目が持っていられる。

「くっ、二発目か！だが………先程のものより威力が高い!？」

一度魔法を撃った際の残留魔力を巻き込んだのか？

五枚目、六枚目が破られ七枚目に到達する。威力は大して衰おず、残り一枚で耐えられる筈もない。

「（……仕方ないか）壊れた幻想！」

残り一枚分の魔力を爆発させ、魔法を押し戻してこちらも風圧を受け距離をとる。

本来ならここで偽・螺旋剣をぶつけるのが定石だが、弓につがえる暇がない。

まさか連続してアイアスを投影する羽目になるとはな……。

「連続投影、開始」

くっ……流石に武器以外を連続投影は魔力を馬鹿に喰う。だが、防ぐ！

再び七つの花弁が花開き衝突するが、直ぐに一枚散る。

二枚目に深い亀裂を作り破られたが、そこまでだった。

それにしても、魔法によって発生するこの冷気はどうにかならぬ
いのだろうか？

しかしエヴァンジェリンめ、驚いた顔をしているな。

確かに凄まじい威力だったが流石にアイアス十四枚を貫くことは
不可能だ。

まあ、計九枚つまり城を九つ落としたのだから十分賞賛に値する
のだが。

「そちらの攻撃は終わりかなマクダウエル嬢」

「……………」

「無言は肯定と受け取るが、いいかね？」

「……………断罪の剣」

エヴァンジェリンの腕に魔力が集められ剣を形成する。

遠距離が無理ならば近接距離。

私としても撃ち合いになれば撃ち負けるのは目に見えている。

彼女は無詠唱も得意としているため魔力を籠めるといふシングル
アクション。

対してこちらは投影したものが無銘の剣であれば打ち負け、高位の物であれば投影し弓につがえ狙いを付けて放つフォーアクション。

近接戦闘ならば攻めなければ負ける心算はないのでありがたいが、あの魔力剣、嫌な予感がする。

ダッ！！

カキンッ！！ガン！キン！！

「なっ！？」

ほんの数合打ち合っただけで、数秒鏖迫り合いになっただけで、骨子構成に自信のある干将莫耶が真つ二つにへし折られ魔力に還元されていく。

武器を失ったことを好機と見たか、攻撃が激しくなり急所という急所を突いてくる。

すぐさま干将莫耶を投影し、受け止めるも直ぐ破壊される。

狙ってくる位置は特定できる。急所と作った隙のこの二つ。

だが如何せん武器が保たない。

干将莫耶よりランクの高い物ならば打ち合える合数も増えるだろう。

だが壊されることを前提として投影、しかも高ランクは気分が悪い。

ならばあれを凌駕するほどの魔力を秘めた物か、壊れないという概念武器でなければならぬ。

だが放出系の魔法に回す分も全てを注ぎ込んでいるせいか、かなりの魔力による重みを感じる。

加えてあの魔力剣、低いとはいえ宝具にも打ち勝つ。つまり何らかの魔法的な特性や性質があるということになる。

打ち合える可能性のあるものといえば、あれの特性を上回るほどの魔力量。そう考えると最低でもB以上、尚且つあれに対抗できる何かを内包したものが好ましい。

……剣の丘より検索完了。

「投影、開始 破魔の紅薔薇」

嘗ての第四次聖杯戦争に参加した槍の騎士、フィアナ騎士団が1人ディルムッドが右腕。

魔力で編まれたものを分解、魔力の流れを断ち切ることでできる魔槍。

魔力と打ち合っても確実に打ち勝つことのできる概念武装。

この弱点は固形化されたものは無効化できないというものだが、こちらにはその技術が存在しない。

さらに余りにも広域のものや巨大なもの、魔力量が破魔の紅薔薇のそれを上回っているものに対しても効果は無い。

だがBランク宝具だ。魔力量で負けるということは無いだろう。

ならば打ち負ける要素など、どこにも存在しない！

「はあー!!」

エミヤは槍を突き出し、エヴァンジェリンは対応するように断罪の剣で薙ぐ。

だがその二つはぶつかることなくエヴァンジェリンの腕を貫いた。

いや、正確にはぶつかったが、その瞬間に断罪の剣が霧散したのだ。

結果、エヴァンジェリンは何もない腕を突き出した形になり、刺さった。

「ぐっ」

一瞬何が起こったのか分からないような表情を見せたが、すぐさ

ま後ろに下がって間を取る。

漸く後退を見せた。

つまりそれは攻勢に出るチャンス。エヴァンジェリンの見せる僅かな隙。

エヴァンジェリンも破魔の紅薔薇のカラクリに気付いただろうが、すぐさま対抗策など練れる筈もない。

だからこそ、攻める！

「ちっ　　氷楯！」

「だが、無駄！」

氷の盾も破魔の紅薔薇の矛先が触れた瞬間霧散する。

だがエヴァンジェリンも馬鹿ではない。

氷盾が役に立たないと分かって直ぐ氷の矢を放つ。

それはエミヤも読んでいる。

故に攻勢であつても突然向けられた攻撃を捌けている。

だがエヴァンジェリンはそれをも読んでいた。

彼女はここで九死に一生を得たのだ。

もしエミヤが守りよりも攻撃を優先するタイプだったなら、魔法の矢など気にせず魔法硬直を利用してトドメを刺しただろう。

エミヤの本質は守りなのだ。

ならば、と彼女はここで賭けにでる。

今現在破魔の槍に対抗できるものはない。攻撃は悉く防がれ、防御は須く破られる。

なら、防がせればいい。

こちらが攻めて攻めて攻めていけば、少なくともその間は安全だ。その間に対抗策を練る。

「魔法の矢、連弾、氷の13矢 闇の5矢
氷の8矢 闇の6矢、

「くっ」

次々と魔法を放つが次々とたたき落とされる。

否、かき消される。

だが内一本が矛先を避けて柄にぶつかり、氷る。

(……………？まさか…？)

魔法をかき消す槍に対し、魔法が直撃し尚且つ付属効果も顕れた。

(つまりあの槍には魔力霧散させる効果があるがそれは矛に限定されたもの。そこ以外ならば魔力は通り、効果を発揮する)

(やられた……。恐らく先ほどの攻撃、意図したものではないのだろうが……思わぬ抜け道を示す結果となってしまった)

((彼女(私)は不死だ))

(この槍には不死殺しの効果はない。ならばこそ彼女は多少のダメージなど気にせず、攻勢に出るだろう)

(こちらの放つ魔法を無力化させ、一撃を入れさせる)

((そこで本命をぶちかます!!))

エミヤは撃鉄を下ろしエヴァンジェリンは腕を高く上げる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「強化、開始」

踏み込みの際の脚を強化。

「来たれ氷精、大気に満ちよ。白夜の国の凍土と氷河を！」

辺りに氷精を充満させ冷気を生む。

「破魔の」

「こおる大地！！」

「紅薔薇！！」

地面を凍らせ氷の槍が迫り、赤の槍を地に突き刺しエヴァンジェリンに突きつけ、腑を貫いた。

「ツカハ……ふ……断罪の剣！」

破魔の紅薔薇が柄より真っ二つに切られる。

「投影、開始」

断罪の剣がエミヤの腑を貫く。

エミヤの左手には黄色の魔槍。

「必滅の　　黄薔薇ウウ！」

断罪の剣を、エヴァンジェリンの右肩から切り落とした。

よって断罪の剣が消滅する。

「づあ……………っ！」

「ガッ…！」

痛み分け、正にその言葉が当てはまる光景だ。

片や腹を貫かれ、夥しい程の血を流している長身の男。

片や腹を貫かれ、右肩を切り落とされ、夥しい程の血を流している美しい女。

「暴食、修復使用魔力増量。」

「……………リザレクション全治癒」

ギシギシと音を立てて傷を塞いでいく。

今の私は全て遠き理想郷を抱えているわけではないのだが、やはり私の体は剣でできているようだ。

失った血はさすがに回復できなかったが、傷はだんだん小さいなっていく。

エヴァンジェリンも私と同じように、腹に開いた穴が塞がる。

が、それだけだ。

「な……………なんだコレは！！何故だ、何故右肩が治らない！？」

キツと音を立てるように睨まれる。

「いったい何をした、貴様！何故治らない！！」

エヴァンジェリンは不死の回復力をもってしても癒しきれない傷を不思議に思っているようだ。

それはそうだろう。不死である彼女は負った傷の大小に関係なく「復活」できる。

それに例外はない。そう、この世界では。

だが必滅の黄薔薇はこの世界ではない例外。

必滅の黄薔薇。破魔の紅薔薇と同様ファイアナ騎士団のディルムツドの左腕。

その特性は、この槍を用いてつけた傷は治癒不可となる、というもの。

自然治癒は勿論のこと、魔術による治療も受けつけない。

「これはそういう物なのだよ。治せない傷を付ける槍もあれば、不死を殺せる鎌もある」

「有り得ない……。不死とは死なない、殺せないから不死たるのだ」

「だがそれが現実だ。君は長い時を生きているが、知らないことの方が圧倒的に多い。事実君は神話時代を生きていないが故に、神話時代の武器を名前しか知り得ない」

「ハッ！じゃあなにか？貴様の武器は神話時代のそれだと？」

「そうだ……と肯定したら？」

「ただの妄言だ……と否定しよう！」

氷神の戦鎚！！」

現れるは巨大な氷塊。

だが、それが魔法であるならば何の障害にもありはしない。……
……対象が大きいので効果が出るか不安だが。

「投影、開始」

新たに投影した破魔の紅薔薇を、これまた投影品のフェイルノー
トに番える。

狙うは中心部。破魔の紅薔薇の効果が表れなければそのまま壊れ
た幻想へと繋がれば氷塊の破壊はできるはずだ。

槍を、撃つ。

だが氷塊に一切の変化は見られない。つまりあの大きさのものは
破魔の紅薔薇では処理しきれないものということになる。

壊れた幻想

氷塊を破壊するには十分な魔力の爆発が起こる。

砕けたようでも辺りに氷の欠片が飛び散る。

「………来れ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが!!」

数ではなく完全に質量で勝負に来たと思っていたが、彼女がそれだけで終わる筈が無かったのだ。

「!?!これは…!!」

「ふふふ……150フィートを絶対零度へと誘う広範囲殲滅魔法だ！回避する術などない!!」

既に周囲の砂、植物が凍りつき始めている。

流石にこれの回避は不可能だろう。なら、こちらから広範囲に亘って温度を上昇させればいい。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

「レーヴァテイン
災いの杖」

遙か彼方の太古の時代、神々の時代の終わりを告げる戦いで巨人「スルト」が振るったとされる炎の魔剣。それは余りにも巨大な剣。かの大英雄ヘラクレスであっても振るうことはできないだろうその巨体。

別に振るうために投影したわけではない。ただ……

広域を焼き尽くすにはこれが最も適していたからだ。

宝具ランクにしてA++の災いの杖は投影するだけで魔術回路にかなりの負担を強いることとなるが、その威力は折り紙つき。

冷気を徐々に押し返し始めている。

「なに！クソツ……全ての命ある者に等しき死を！其は安らぎ也！」

エヴァンジェリンは更に詠唱を進める。そして呼応するかのよう
に冷気が盛り返してくる。

真名解放したくともそれだけの魔力を練っている時間が無い。な
により解放してしまえばラグナロクの再来となってしまう可能性が
高い。

「防げまい！防げまいアーチャー！この氷結こそ私の世界……この
孤独こそが私の世界！私の世界を拒めるものなど、命ある限りあり
えないのだ！！」

ならばそれ以外の方法だ。生憎と今の私には1つしか思い浮かば
ないのだがな。

「この氷結が君の世界だというのなら、私が……この俺が、その悉くを凌駕して見せよう!!」

「 I am the bone of my sword .

「ハッ!今更どんなものを取り出そうと私の世界は覆らない!!」

「 Still is my body , and fi
re is my blood .」

「……………詠唱が、続く?」

「 I have created over a th
ousand blades .」

そうだエヴァンジェリン。初めの一節は私の全詠唱のほんの一部に過ぎない。

「 Unkown to Death . Nor kno
wn to Life .」

元来私のこの詠唱には必要性はない。強いて理由をつけるなら、自己暗示だ。

つまり全詠唱を行なうということは、自己のイメージを極限まで

増幅させるためだ。

「 Have withstood pain to cr
eate many weapons .
「 Yet , those hands will nev
er hold anything .
「

私の魔術は投影ではない。私の使えるただ1つの魔術。それは、

「 So as I pray , Unlimit
ed Blade Works .
「

己の世界の展開だけなのだ。

今、異世界で、世界が、塗り替えられる。

Side エヴァンジェリン

一体何が起こった？

奴の英語による詠唱は何だ？

私の世界はどうなった？

目の前に広がる世界はなんだ？

なぜ私は動くことも喋ることもできないのだ……？

世界が、暗転する。

S i d e o u t

無限に広がる荒野。先ほどまで立っていた砂漠の面影は何処にもない。

深夜で月の見えていた黒天は緋色の空へと変わり、空には巨大な歯車が音を立てて動いている。

地面には圧倒的といえるまでの剣。

「1つ……誤解を解いておこうか、マクダウエル嬢」

目を開いて瞬き1つしない彼女に声を掛ける。

余りに身動きがないので聞こえているかは不明だが、構わず話し続ける。

「私は物質転送など使っていない。私の使っていたものは投影、魔力によりオリジナルを複写・物質化できる魔術だ」

「……………」

「そしてその魔術は、私の世界の劣化版というわけだ」

「……………」

「そしてこの世界の展開と維持は思いのほか魔力を喰うのでな、早々に決着を着けさせてもらう」

す……と右腕を持ち上げれば右側の剣が幾つも浮き上がる。

その中から一本の剣を手取る。

剣の名を、吸血殺しという。対象につけた傷が血管を傷つけたとき、刺さっている間血を吸い続けるという呪いじみた剣。一定以上の血を吸い終わると剣身が真っ赤に染まり、許容範囲をオーバーすると砕けてしまい吸った血が本人の元へ返ってしまうという、まったく使いどころの分からない剣だ。

それを数本投影し、エヴァンジェリンの右肩の露出した傷に投擲する。

それをエヴァンジェリンは一切の抵抗することなく食らった。

「……………は？」

おかしい。まったく反応がない。

とりあえず騙しうちの可能性もあるので油断せずに近づいてみると、気を失っていた。

固有結界を解除すれば、あの氷の侵食が全くなっていた。当然災いの杖は固有結界の展開と共に、魔力供給が途絶えてしまったため効果は発揮していない。

つまり彼女は魔力切れを起こして気を失ったことになる。

魔力切れを起こしている状態で、尚且つ吸血殺しによる採血は……………かなり危険なのではないか？

「と、投影、終了！」

「こうして「最強の魔法使い」VS「最強の騎士」は幕を閉じた…」。

エミヤシロウの旅記録 〳其の三の二 阿弗利加編〳（後書き）

あとがき？なかがき？その4

以上、第二話の其の四でした。いわゆる6話。

初めて、ではありませんが戦闘でした。何時かのキマイラ戦とはちがって物凄く長くなりました。疲れました。集中力切れました。

アイアスは、ネギま世界の魔法に対して『射撃系魔法（ex・魔法の射手、雷の投擲）』には結界宝具として作動し無敵を誇る。しかし『放出系魔法、その他（ex・闇の吹雪、断罪の剣）』には魔力の籠った頑丈な盾といった感じでした。そのためエヴァの全力全開の闇の吹雪×2に対してあれ程砕かれる結果となりました。闇の吹雪や雷の暴風などは特に渦巻いているので貫通力は高そうですね。

固有結界はエヴァを倒すためではなく、おわるせかいから逃げるために使ったので某英雄王戦の様には使いません。

ちなみに戦闘を行なった場所はエミュの寝ているオアシスから遠く離れた場所です。ゲートを使いました。おかげでエミヤはエヴァが起きるまで何もできなかつたとか。

しかしあれですね。私の書く文は如何せん会話が多いですよね…
…なんとかしないと。

ちなみにこの後、

エヴァ「どうしてくれるアーチャー。魔力が足りなくて回復できないは血が足りなくて動けないはで散々だぞ」

アチャ「こうなってしまったのも偏に私の責任だ。全快になるまで付きっ切りで介護してやるう」

みたいになって行動を共にします。

次は南亜米利加編です。短編集のような形にするつもりです。

オリジナル宝具&設定

災いの杖（レーヴァテイン）

ランク：A++

レンジ：不明

最大補足：不明

北欧神話での巨人スルトが振るったとされる（正確には違うようですが、ここではそれで通します）炎の魔剣。刃渡りは約180メートルあり柄も含めれば200は優に越える大きさを誇るが、伝承と同じサイズではない。柄も含め剣身は全て真紅でただそこに存在するだけで数百度の熱を発し、使用者以外の全てを焼き尽くす。熱の効果範囲は決まっておらず、注ぎ込む魔力量によって変化する。真名を開放すると熱は全て炎へ変わり、自動でマナを吸収し際限なく全てを焼き尽くし、現代にラグナロクと同じ破壊を発生させる。

吸血殺し

ランク：D+

レンジ：1

最大補足：1人

吸血鬼化の治療用として生み出された短剣。噛まれた部位に即座に刺すことで吸血鬼になる要因を血ごと吸い上げることができる。

1つあたりの許容量は200mlが限界となっている。柄と刃が3：1の割合となつているため、戦闘には全くの不向き。名前の由来は血液中に魔力を多く含める吸血鬼に有効だから。

エミヤシロウの旅記録 〱其の四 南亜米利加編〱 (前書き)

一応これで書き留め終了。またこの話も例によってはオリジナル、自己解釈が含まれています。ご注意を。あと、いつの間にかP.V.2
0万越え&ユニーク2万越えしましたね

エミヤシロウの旅記録 其の四 南亜米利加編

・とある集団の食事風景

「ほら、アーチャー。食わせる」

「君は……それが人に物を頼む態度なのか？」

「うるさい。何故私がこんな不便な体になったと思っているのだ」

今夜の夕食はビーフシチューである。エミュに食材リストと金を渡して買ってきてもらったのだ。

立派な、料理しやすい環境でもなく、食材も決して良品とは呼べるものではないが十分満足のいくものが作れた。

だから先ほどからエヴァンジェリンが食わせる食わせるといってくるのだろう。

「しかしだ、エヴァ。確かにまだ全快ではないのだろうが、もう自分で歩けるではないか」

「歩く程度は簡単だ。だが指先の細かい動きをしようとするとうちにも震えてしまう。幾ら溢してもかまわない、と言っているのであれば私は構わないが？」

はあ…と私はため息をつく。

確かに私は全快になるまで世話をすると言ったが、流石に時間が掛かりすぎじゃないのだろうか。

とは言っても私に吸血鬼について十分な知識があるわけでもなく、彼女に直接問うてみてもはぐらかされるだけなのだろうか。

食事の際の最早固定席となった私の胡坐の上に座り込み背を預けてくる。

これでも最初は顔を赤く染めながらもしぶしぶ座っていたのだが、いつの頃からか全く躊躇うことがなくなったのだ。

そのおかげでこちらも楽になったという言い方はおかしいが、事実世話が楽になったのだ。

だが、メリットがあればデメリットもあるのが世界だ。

「あの……お父さん……私にも、その…食べさせて欲しいです」

今まで手の掛からなかったエミュが異様に甘えてくるようになってきたのだ。

これまで何にしても遠慮がちだったエミュがしたいこととして欲しいことを口にするようになったのは大変喜ばしいことなのだが……何というか、方向が違う。

あの服が着てみたい、あれが食べてみたい、あれが欲しい、等といった物欲ではなく、私と手を繋ぎたい、おんぶして欲しいといった人との触れ合いのほうの欲ばかりなのだ。

これには正直困った。

二人だけのときならば別にいいのだが、大抵がエヴァンジェリンを世話しているときなのだ。

私は体が二つあるわけでもなく、腕が四本あるわけでもない。

無茶ではない。無茶ではないのだ。ただ大変なだけで。

「ふう……おいで、エミユ」

それでも大変な思いをしても、彼女の笑顔を見たいと思うのは何も悪いことではないと思う。

「ぬお！チャチャゼロ貴様！私の分の夕食を食べるんじゃない！！」

「ケケケ……」

・姉妹？兄妹？親子？

「しかし、マクダウエルとエミユは並んでると姉妹のように見えるな」

「む？」

「はい？」

同じ十歳そこらの体格に腰まで届く銀髪と金髪。

少々たれ気味で赤みの強い紫色の瞳とつりあがった青い瞳。

おどおどして小動物の威風堂々としていて大型の肉食獣的な性格。

外見やら性格やらが全くの正反対だが、並んでいるとそっくりなのだ。

「ふむ……となると差し詰め貴様は美少女姉妹を誘拐した変質者か？」

「……せめて父親というポジションにしてもらえないだろうか」

「ふふ……よかったなエルミューダ。美少女だとさ。父親からのお墨付きだぞ？」

「いえいえそんな私なんか！」

「……いや、エミューはどこに出しても十分美少女で通じると思
うが？」

「はう！」

……小動物的吗……我ながら上手い比喻だな。如何せん臆病
すぎるが。

「ほらほら妹よ、いつまで顔を赤くしているつもりだ？お父様に誉
められたご自慢の顔を上げたらどうだ？」

「……………／／／／／（真っ赤）」

……大型の肉食獣か…これ？ただのいじめっ子ではないのか？

しかしエヴァンジェリンが姉か……言動はまるっきり子供なんだ
がなあ……………成る程、実年齢か。

いや待て。実年齢で計算してしまつたらエヴァンジェリンは姉で
はなく祖母か？だが私も、英霊となつてから時間という概念は存在
しないが、かなりの時を過ごしたはずだ。

私が父親だとするとエヴァンジェリンが母親でも違和感はないのか。その逆も然り、だが。

「むーアーチャー、貴様よからぬ事を考えているな！」

「……ふむ。よからぬ事かは分からないが、マクダウエルを実年齢で考えたところ姉ではなく祖母のほうが妥当……ぬお！何をする！」

「だから私はババアではない！」

「まあ私もかなりの時を過ごしているからな……父親という年齢でもあるまい。ふむ……老夫婦？」

「だから！……はあ……せめて老を取れ……」

いや、それだと夫婦になるから。

流石に私にその手の性癖はない。

「私はロリコンではないぞ？」

「私はロリでも幼女でもがきんちよでも無いと何度言えばわかるアーチャー！」

「……少なくとも君のその容姿はロリ以外の何者でもない」

「……………（プルプル）……………キ……………キサマアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

エヴァンジェリンが飛び掛ってくる。

避ける。

顔面ヘッドスライディング。

そんな身体強化もできていない、見切ることの容易な突進など受けてやる義理はどこにもないだろう？

しかし、受身も取れないで無様に地べたと熱い抱擁か。最強種が聞いてあきれろぞ？

「……………クスツ……………あははははははは……………」

「む……………それ見たことがマクダウエル。エミュに笑われているぞ」

「こんの小娘が！貴様まで私を馬鹿にするか！？」

「ええ！？そ、そんなつもりじゃありません！ただ……………」

エミュはそこで一拍置いて

「お父さんやお母さん……兄弟姉妹が居たら……………こんな風楽しい

のこなつて」

「……………」

「……………家族……………」

それに対してエヴァンジェリンがポツリと呟く。

家族。

数百年も生きてきたエヴァンジェリンと、吸血鬼になってしまいい国から逃げ出したエミュと、正義の味方になるべく故郷を離れ世界と契約したエミヤシロウ。ここに居る全てにとって今は無き物。

大抵の家族は例に漏れず、幸せで暖かいものだろう。

だがここに居るものは皆その暖かさを知っていながらもなくしてしまった。

だが、

「……………ふ。何を言つかと思えばそんなことか」

「……………」

「私は既に、エミュの父親になった気で居たのだがな」

「……………えっ？」

家族とは、同じ血が流れていなければいけないのか？否。

家族とは、名字が同じでなければいけないのか？否。

家族とは、戸籍が存在しなければいけないのか？否。

お互いがお互いを必要とし合い、お互いがお互いに支え合えて、
お互いがお互いに思い合えるそんな関係こそが家族ではないのだから。
うか。

衛宮切嗣に拾われ養子となったエミヤシロウには血縁関係者など、
居るのかもしれないが、一切居ない。

だがそれでも、父親であった衛宮切嗣、祖父であった藤村雷画、
姉であった藤村大河にイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

同級生の遠坂凜に柳洞一成、美綴綾子、陸上部仲良し三人組……
……あと真桐慎二。下級生の真桐桜。冬木で知りえた人々。

それこそがエミヤシロウにとっての家族であり、冬木こそがエミ
ヤシロウにとっての家であった。

いきなりだが、エミヤシロウという男の精神は破綻している。

自分よりも他者、自分よりも他の事、自分よりも……といったよ
うに全てにおいて自分の価値を下げている。

何故なのか。中身が無いからだ。

エミヤシロウには中身が無い。だからこそいつも誰かを、何かを優先する。

その優先する誰かもしくは何かが、エミヤシロウに中身をくれるからだ。

エミヤシロウにとって、家族は自身に全てを与えてくれた人だ。それはいつの時代どの世界でも変わらない一つの真理とも言える。

彼女がそうだ。

エルミューダ・K・ホンダ

この世界で初めて彼が救った人物。

初めてできた、守るべき人なのだ。家族なのだ。

「家族になるのに資格は必要か？血が必要か？名が必要か？籍が必要か？そんなものは必要ないんだ」

「……はい……」

「意識すればいい。それだけで人は家族になれる」

「……私、は」

「……」

「……わたし、は……アーチャーさんの、娘……ですか？」

「私は、エミュの父親だ」

ほら。

まるでそう言うかのようにエヴァンジェリンへと視線を向ける。

視線の意味に気付いたのか、エヴァンジェリンは顔についた砂埃を払い落としてエミュの傍に立つ。

「ふ。こんな父親だけでは心許無いだろうから、私も頼れ」

「……はいっ！」

こうして新しくできた、人間、吸血鬼、英霊という奇妙な構成の家族が出来上がった。

ちなみにエヴァのポジションが姉なのか妹なのか母なのか祖母なのかは、最後まで議論されたというのは言わずもがな。

エヴァは姉を推し、エミュは母を推し、エミヤは祖母を推したがエヴァに殴られ母へと変えたとかなんとか。女性に年齢の話は振らぬ方が身のためということだ。

「いい加減貴様は私を名前で呼べ。それとも家族を名字で呼ぶのか

「？」

「む」

・御宅の娘のスタイルは？

最近、うちの娘が日に日に立派になっていきます。どれくらい立派になったかというと

「お父さん、夕食捕ってきたよ」

夕食の食材を一人で捕って、否、狩ってこれるようになりました。

ちなみに今日の獲物はカピバラだ。極めて温厚な正確ではあるがその体格は100cmは優に越えているだろう。エミユよりも少し小さいところを見ると130近いだろう。基本的に群れを成して行動しているカピバラを相手に勝ち、数十キロはあるその躯体を引きずってこれるとは……どこで育て方を間違えたのだろうか。

エミユがエヴァに頼み込んで修行のような稽古のような講義のようなものを受けていると知ってはいたが、それがこんなことになるとは。

水に浸かったため泥水のついた服でカピバラの巨体を引きずって

いる姿は、なんというか、余りにも女の子から離れている。

エヴァ曰く、「元吸血鬼だった為かは分からぬが魔力はそれなりにあり体捌きもよく、一を教えたら五を身につける優秀な生徒だよ。」「だそうだ。」

……………何を教えた…エヴァ……………。

しかもその修行（？）とやらの所為でか知らぬが、エミユの性格が変わってきた。以前のようなおどおどした小動物らしさが消え、いや、消えてはいないが……………物怖じしない性格になってきている。

むしろいい傾向だ、とエミヤは思う。

これまでのエミユは流されがちであったが、しっかりと自分と言う筋が通ったように言いたい事を口にできるようになった。

いいことなのだ。いいことなんだ。

ただ……………

「えいつ!」

素手で皮を剥ぐのは、止めてくれ……………。

・不機嫌なお姫様

なんなんだ！なんなんだ！なんなんだ！なんなんだ！なんなんだ！
！なんなんだ、あいつは！！

何処からともなく武器を取り出し、大陸の秘宝である干将莫耶を
所有し、私の一撃を防ぐだけの盾を持ち、こちらの魔法を掻き消す
紅い槍を保有し、治らない傷を負わせる黄の槍を操り、深手の傷を
即座に治せ、異常ともいえる大きさの剣を召喚し、視界を一変させ
ることのできるあいつは！

目が覚めてみれば魔力不足の所為か体が全く動かせないし、同じ
ように頭に霞みがあった様に意識が固定できないし。そのくせ目覚
めた私に向かって、「気分はどうかね？」だと？最悪に決まっている
だろうがあ！

あの力の計り合い、と称したガチバトルから一月は経とうかとい
うところ。しかしいまだエヴァンジェリンの受けたダメージの後遺
症は続いていた。

歩こうとすれば膝が笑い、足の裏がやけに敏感というか刺激に弱
くなっていてまともに歩けたものじゃない。

物を掴もうとすれば肘が伸びきらず、指先が震えて力を入れるこ
とができないので食事なんてできたものじゃない。

そのおかげで…その所為で…

「ええい、放せ！」

「こ、こら。暴れるなマクダウエル！飯がこぼれるだろう！？」

奴に抱えられ、いわゆるアーンというやつをさせられている。

「いいから…放さんか！この似非日本人！！」

「なっ！？………確かに私は外見上日本人には見えないが………それでも私は正真正銘の日本人だ！似非とか言うな！！」

「あ…あのー………ご飯…こぼれてますよお？」

「む？どうしたマクダウエル。今夜は冷えるから毛布に埋もれてい
る」

「…い、いや………その…」

「

……………「ああ」

長い沈黙を経て奴が導き出した答え。おもむろに私を抱えそばの茂みに連れて行く。

「私はすぐそこにいる。終わったら呼んでくれ」

「すぐそこにいるなバカノノノノノ！離れた場所にいる！それと、絶対に聞き耳を立てるなよ！！」

数多くの醜態を晒してきた。そしてそのたび私は顔を真っ赤にして叫んでいた。

しかし。しかしだ。アーチャーは全くそういった素振りをしなかった。移動で私を背負うときも、食事で私に食器を向けるときも、わた…わたしが…お花を摘むときも…って何を言わせる！

と、とにかくだ。奴は私に対して一度も恥ずかしくることが無いのだ。おかしいだろう！？自慢じゃないが…いや、自慢だが…私は美しい。かなり自信を持って言い切れる。きめ細かい肌に膝まで届く滑らかな金髪。整った目鼻立ち、くりっとした大きな目、それも深い青。町を歩けば百人の男が百人振り返るほどだと自負している。

それが何故！私だけが奴を意識しなければならないのだ！！

うあ~~~~、と呻きながら転がる。今エミヤは料理中であるため見られることは無い。……それにしてもこの吸血鬼、どんどん行動が幼くなっていく。

だからだろうか。周囲への注意が散漫していたのだ。

ドン、とぶつかる。

もの見事に後頭部を打ちつけ、両手で押さえて体が海老反りになる。

「く……一体なにが……木でも……あ……たの……か……あ」

「……………」

まず目に入るのは……靴。爪先に金属を纏ったそれ。

次いで目に入るのは……ズボン。色は黒で、生地がはためかないようにベルトで縛り付けてあるそれ。

そして、紅。

「……………」

「……………」

・お尋ね者は？

「はっはあ！見るアーチャー！二人並んで1000万だぞ！！」

「あわわわわ」

「なになに……『闇の福音とアーチャーが手を組んだらしい。協会本部はこれを危機とし、アーチャーを賞金首として本格的に捜査するとともに賞金を200万ドルに引き上げ、生死を問わず（デッドオア アライブ）と認定した。また、闇の福音とアーチャー両名を同時に捉えた場合追加賞金200万を贈呈するとも表明。なぜ協会が今このときにアーチャーを本格的に賞金首として捕らえようとしたのか不明だが、闇の福音とはまた別の要因があると思われる』……私も有名になったものだ」

エミュが町へ買い出しに行った際に持ち帰ったチラシだ。

なんでもこの世界には旧世界と新世界、通称魔法界というものがありクエストなどを依頼している魔法協会の本部もそちらにあるようだ。そしてこちらの世界とあちらの世界は、交通手段が無いに等しい。滅多なことがない限りお互いはお互いに干渉を決め込んでいるのかなんとか。

なら賞金の上下はどうなっているのだと私は問いたい。逐一被害を連絡することができないのだろうか？

「しかし……これは洒落にならないぞ。今まではそれなりだったが……」

「問題ないだろう？来たら早々に退場願えば良いだけだろうが。武力行使で、だが」

「……はあ……こうなった原因は恐らくエヴァ、君だ。もう全快だと言つのに悉く付いてきては先々で目撃され騒ぎを起こし……」

「しかし総額賞金1000万か……。もしかしたら歴代1位じゃないのか？」

別にエヴァンジェリンのことを嫌っているわけではない。エミユも喜んでいるし、私としても反対する理由は存在しない。全快するまで世話をする、という契約だったがその後のことは何も指定していなかったからな。

だが、先々で起こる問題や事件を大事にしているのもエヴァンジェリンだ。

名乗りを上げる必要もないのに名乗り、多くの裏関係者、魔法使いを混乱させてはオーバークションで魔法を振りかざし人的被害は変わらないが、物的被害が増えたり。絶対愉快犯だ。私の得た知識では、手を出してくる者だけを相手にしているはずなのだが……？

特に私たちは手を組むと言った関係ではないのだが、客観的に見ればそう見えるのだろう、やはり。私を標的とした賞金稼ぎの襲撃ではエヴァが出張り、エヴァを標的とした賞金稼ぎの襲撃では私が出張り、エミユに危害を加えようとした輩には共に叩きのめしていたわけだし。

……客観的に見なかつたとしても、十分そうだな……。

「大丈夫なんですかエヴァさん、お父さん」

「ふ、誰に言っているエミユ。わらわらと寄ってくる有象無象など私とアーチャーに指一本触れることなど出来やしないさ」

「その通りだ。エミユには近づけさせんさ、守護者の名にかけてな」

まあ、守護者と言っても「抑止の」ではなく「家族の」だがな。

しかし、そう考えてみると守護者と言うフレーズ…なかなかカツコイイではないか。あれほど忌み嫌っていた称号が、頭に何かつけるだけでこうも印象と言うかイメージと言うかが好ましくなるものなのか。

言葉って不思議だよね。BY作者

「あの……私はお父さんの心配を……」

「言うだけ無駄だ。コイツは何故だか知らぬが自分に向けられる好意的なものに関しては、絶望的に気付かない。こちらが説明をしないかぎりな」

む？そこな二人、失礼なことを考えやしなかつたか？

！！

足音が複数……いや、複数というには多すぎる。

エヴァも気付いたらしくこちらに目を向けてくる。もっとも、その視線に警戒や危機感といったものは一切含まれておらず、「随分と行動が早いな」とでも言うようにどこか感心の色が窺える。

聞こえる音はバラバラで、統率を取れていない。どうやら別々の集団が別々の位置から接近してくるようだ。エミユを背中に回し無言で黒鍵を投影する。

数量把握

凡そ20！

「いたぞ！アーチャーに闇の福音だ！」

「情報通り二人で行動してんのかよ、なんかちっさいのがいるけど……問題はねえか」

「人数はこっちの方が圧倒的に多い。怯むことはねえ………捕まえ……いや、殺せば1000万は俺たちのものだ！」

「ペルー魔法協会リマ支部へ、アーチャーと闇の福音両名をクスコ、チコン山近辺郊外にて確認」

「魔法の射手部隊、照準！」

「世界最強と名高い闇の福音、更にその最強に肩を並べる男アーチャー……」

恐らくエヴァも私と同じ考えのはずだ。

だからこそ……

「いくぞエヴァ、エミュ」

「あ……はい！」

「総額1000万ドルの一味……いや、家族の……デビュー戦と洒落込もうじゃないか」

「派手ニブツ殺シテヤルゼ」

指名手配書

『緋色の騎士』アーチャー（本名不明）

懸賞金 200万ドル

『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

懸賞金 600万ドル

『銀の愛娘』エミュ（本名不明）

懸賞金 20万ドル

・緋色の騎士と闇の福音の両名を捕まえる又は首を持ってきたものには追加賞金200万ドルを贈呈

・上記に加え最強の子を捕まえる又は首を持ってきたものには追加賞金50万ドルを贈呈

・ツキアカリ

奴と出会ってどれほど経ったのだろうか。

一月も経っていない気もするし、何年も共に居た気もする。それだけ私が馴染んでいる、気を許しているということの裏返しになるのだろうか。

……………悪い気は、しない。

いつだろうか。私たちは家族だとあいつが言った。その言葉はあくまで私に向けてではなく、あの子に向けた言葉だったが私もその言葉に乗ったんだ。

何百年ぶりだろうか。家族というモノは。

あの頃の私は、父がいて母がいて兄がいて妹がいた。それから城

に住めば使用人がいて領主がいて……それが当然だと当たり前だと
して生きていた。

だが……私に教鞭を振るっていたものによって、私は化け物とな
った。

真祖となった私には何も信じられなかった。身内でさえも、家族で
さえも。信じることができたのは己と、己の人形だけだった。

そんな状態で私は数百年の時を生きてきた。

戦う運命にある人間を、ぬくぬくと暖かい場所で生きてきた人間
を、守るために力を求める人間を、力だけを望む人間を、平穏だけ
を望む人間を、嘲り、罵ってきた。

「貴様らは、ぬるま湯に浸かっているだけだ」と。

だがそれは羨望だったのだ。今思えば分かる。

「何故貴様らだけが温かい。何故私だけが冷たい」と。

私はずっと、心の奥底で、自分でいくら否定しようとも、望んで
いたのだ。自分を見てくれる人間を。自分を温めてくれる人間を。

ああ、なんて愚か。なんて醜い。

奴は言った。あの子の父親だと。

あの子は言った。奴の娘だと。

奴は言った。私はあの子の祖母だと。

あの子は言った。私はあの子の母だと。

私は言った。絶対に姉だと。聞き入られることは無かったが。

ああ、なんて歓喜。なんて僥倖。

初めて全力を出せる相手と思いきりやりあって、打ち負かされた。

私自身思いつきり抵抗していたが、苦にすることなく世話をされた。

とても悔しくてとても恥ずかしくて、それでもとても嬉しくて、思わず咳いてしまったあの夜。温かい、と。

いつか奴に聞かれたな。何故付いてくる、と。

その時私は確か理屈で固めて有耶無耶にしたはずだ。完治はしたがその後のことを決めていたか？別れると言ったか？という感じで。

言えるわけが無いじゃないか。

貴様らと一緒に行動して、一緒に飯を食べて、一緒に馬鹿やって一緒に暴れるのが心地よくて楽しくて嬉しいなど。

私が率先して騒ぎを立てると奴はすぐに顔にしわを寄せて難しい顔をする。あの子は逆に満面の笑みを浮かべる。私と同じで楽しんでいるのだろうか。

ああ、しかし、こんなことを考えるなんて、私も大概、平和ボケしているのかもしれない。

ああ、しかし、気分は、不思議と、悪くない。

空には爛々と光る満ちた月。

500年以上前は散々恨めしかった満ちた月。

500年以上経った今では私の象徴である満ちた月。

そうか。今夜の私は月の魔力に酔っている。だから普段考えようともしないことを考える。

ああ、きつと、おそろく、わたしは、おくめんなく、ほほをそめず、いま、このとき、このきぶんなら、いえる。

あのとき、こたえたくなかった、やつの、といに、こたえられる、きがする。

何故付いてくる

「仕方ないだろう……このぬるま湯を、気に入ってしまったんだから……」

ああ、私はきつと笑ってる。

唇を申し訳ないくらい小さく吊り上げて、薄く開いたとても優しい目で、髪を宙に漂わせ、誰よりも、誰よりも、誰よりも、美しく。

エミヤシロウの旅記録 〱其の四 南亜米利加編〱 (後書き)

あとがき? なかがき? その5

以上、第二話の其の五でした。いわゆる7話。

以前書いたように、短編集のような形で書かせていただきました。でも分量的に超短編ですよね、明らかに。短編の定義が分かりません。

読んでいて分かったと思いますが、時系列がバラバラです。特に意味はありません。なんとなくです。読みにくかったことでしょう。けど後悔どころか反省もしません。ここでは俺が法律だ。

それともう1つ。ぶっちゃけ低クオリティ。手は抜いてませんよ?

いや、抜いているといえば抜いています。エミュのこととかエヴァとの修行とかスルーしてるし。あと、エミュ視線の話がひとつもなかったなー。ぶっちゃけ最近空気。最近って言えるほど長い訳じゃないけど。オリキャラは作るもんじゃないね。

これで旅記録は終了です。

次は日本に渡って色々します。ぶっちゃけナギと会って、ぐらいしか現段階では話として浮かび上がっていませんが。

あ、ちなみに作者はプロットなしで書き綴ってます。すぐ壁にぶつかります。なので質、量共に不安定になるでしょう。そこんこよろしく。代わりといっちゃ何ですが、物凄く心に余裕があって時

間に余裕があつて気分が乗っていればリクエストにも答えたいと思います。

無理にとは言いません。というか余りリクエストされても困るの
で。あと、できるならそのリクエスト、番外用だけでなく本編のストーリーの中にこんなに入れても面白くない？って言うのもくれる
と助かります。

ただ作者は本当に感想を読むのが怖いです。批判に耐え切れるだけの心を持っていません。心はガラスを通り越して薄氷です。なので、感想に書いてもらつても勇気が持てず読まずにスルーするかも
しれません。本末転倒です。リクエストとか要求するなつて感じ
すね。

というわけで、やっぱりリクエストは受け付けないことにします。
ごめんなさい。書きたいように書かせてもらいます。

順番は

不機嫌なお姫様

姉妹？兄妹？親子？

とある集団の食事

風景

御宅の娘のスタイルは？

ツキアカリ

お尋ね

者は？

となつています。

あと、エミヤシロウに関しては自己解釈あり、というか自分の思
うままに書いたので悪しからず。

エヴァンジェリンに関しても同じです。自分で書いてて違和感を覚
えたけど別に構わずそのまま押し切つてみた。

ちなみにツキアカリの場面では挿入歌「ツキアカリ」が流れます。
きつと。ええ、きつと。

第三話（前書き）

3 / 26 ~ 3 / 29 に雪山に行ってきた。寒かった。死ぬかと思っ
た。むしろ死んでしまえばいい。でも凍死って寒そうで嫌だな…

第三話

お父さんはあまり、自分のことを話しません。だからときどき遠くを見るような目をしたりしても、その理由が全く分かりません。

でもお父さんはとても優しく、とても格好良く、とても強く、とっても優しいお父さんです。

私のことを家族にしてくれて、いっつも気にかけてくれて、この間同じ戦いの場所に居させてくれて。

エヴァさんも加わってから益々楽しい日々が続いています。エヴァさんが笑うと私も釣られちゃって、それでお父さんがちよつと呆れたような顔でやれやれってして。

でも……こんなに楽しくっていいのかなって、最近思います。

嫌なわけじゃありません。嫌なわけがありません。でも、楽しければ楽しいほどすぐになくなってしまいそうで。

お父さんに言ったら、そんなこと考えるんじゃないって頭を撫でてくれた。

エヴァさんに言ったら、私とアーチャーが居れば無敵だぞ？何を心配するっつておでこを突かれた。

………そんなはずないって、思ってる

.....

.....
そんなはずないって、願ってる

.....

.....
そんなはずないって、祈ってる

.....

.....
贅沢なんて私、何も望みません

.....

.....
だから神様、私の幸せをもう奪わないで

トキコ.....

正義を求める正義の味方

i .
World's
Noble
Justice's
Magister
Mag

第三話

この世界に召喚されてから初めて母国を訪れた。ぱっと見た感じでは大した違いはないが、やはり時代が時代だけに建物が少なく感じる。

現在1978年。エミヤの生きた時代よりも10年以上昔なのだ。そう感じてしまっても仕方がないといえるだろう。

電化製品で例えるなら、ビデオカメラや全自動洗濯機、ワープロなどが出来上がったばかりの時代なのだ。

さて、それでは日本に居るナギと合流したいのだが……問題が1つ。

「それで日本に来たわけだが……アーチャー。その再開する予定のガキは何処だ？」

「それなのだが……日本というだけで詳しい時間や場所を指定しなかったんだ。それとアーチャーと呼ぶな。幻術のおかげで姿は違うが名前を聞かれたらアウトだぞ」

「馬鹿か貴様は！いくら日本は広大ではないとはいえ、探して回れるほど小さくはないんだぞ！！」

「おおお落ち着いてくださいエヴァさん！」

「ルー（エルミューダの別称）……本名で呼ぶな」

微妙にカオス。

エヴァンジェリンが騒がしい。まあ、そうなる理由も理解できないことはないのだが、あくまでエヴァンジェリンが勝手についてきただけなのでお門違いもいいところだ。

だが待ち合わせ場所、合流時間などが決まっていないというのはかなり重大な問題だ。いや、それ以前に私はナギと合流しようなど約束しただろうか？

……記憶にない。もしか私の勘違いなのか？

ナギは日本に行くといっていた。だが目的地が日本だとは一言も言っていないではないか！

ルートもナギのほうはアメリカを経由するだけ。対して私は多くの地域を回ってきた。目的地が日本でないとするれば既に日本を出ていてもおかしくはない。

まずい。これは酷くまずい。

ばれたらエヴァンジェリンにやられる……！！

永遠の時間があるくせに彼女は無駄な時間というものを嫌う傾向にある。

ならば彼女の興味を引くことと平行してナギを探し出さなければいけないか……………ふむ。

「……………観光ついでに探すとするか」

「なに！そういつことなら早速京都にいけ」

「奴は派手なところや騒がしい場所を好みそうだからな……………京都奈良は却下だ」

「なっ！？馬鹿者！日本の観光名所から京都をぬ「あの！これなんてどうでしょうっ！」こら、まだ私が話しな」

「なになに……………『麻帆良学園祭遂に開催』……………埼玉か。日付はギリギリ最終日に間に合うかどうかと言ったところか。有りだな」

「だから貴様らわたさ「よし、ルー、準備だ」だか」「分かりました！」……………ああ、くそ！諦めるよ、諦めてやるよお！」

とりあえず爆発は回避できたようだ。

見渡すかぎりの人、人、人。金成の人ばかりだ。日本全国にその名が知れ渡っている有名アーティストのコンサートがあると言われても違和感は全く感じないだろう。少なくとも学園祭という名目で集まる人の量ではない。

高度経済成長を遂げたことを考えればこれぐらいの盛り上がりは必須なのかもしれないが。

入場の際にもらったパンフレットを見る。かなり広い。初等部、中等部、高等部、大学、まで全て揃っていて他に付属学校もあり、研究所、その他学園関連以外の施設や設備が充実している、まさに都市そのものなのだ。

敷地全てを回るのは無理だろう。とりあえず今日行なわれる大きな催し物を回ってみれば、運が良ければ見つけられるだろう。

「最終日最大のイベントは麻帆良祭最終イベント、『君は何処まで逃げ切れる？麻帆良トマト祭』……なんだこれは」

え〜〜……他には何があるのだろうか。

……やはり最終日は最終イベントのために盛り上げを抑えているのか？

「これなどどうだアー……ゴホン……シロウ」

『早速インタビューと行こうか野郎共！さあナギ・スプリングフィールド、手前の心境は一体どんなだ！言ってみろ！』』

『500万円は……俺の物だあああああああああああああああああああああああああああああ！』』

会場に着いて直ぐ、そんな叫び声が起こった。

「……いたな」

「いましたね」

「……いるものだな……」

いや、入場にチケットが必要で、そのチケットが既に売り切れているなど予想していなかったのでどうしようか困っていたところに、これだ。

とりあえずここにナギが居ることは判明した。待っていればそのうち出てくるだろう。

いや、それにしてもまさか本当にここに居るとは……偶然とはつくづく恐ろしいな。おかげで助かったが。

しかしナギのやつ、武道大会に出るなど……格闘技でも修めているのか？戦闘のセンスはすば抜けていそうだが、そんなはずないか。

精々が喧嘩殺法ではないだろうか。

どうせ魔力強化して、速く動いて速く殴るという作戦と呼べない作戦でも実行したのだろうか。

『これにて麻帆良武道会を終了だ！また来年会おう、クソ野郎共！』

閉じていた門が開かれると続々と観客（と思われる）が出てきた。

その少し後方、凄まじい量のフラッシュと共に歓声が湧き上がる。大方大会が終了した選手にインタビューでもしているのだろうか……人だかりの中から、ローブを着込みでかど『¥5,000,000』と書かれたパネルを大事そうに抱えて飛び出してくる。

紛う事無き、ナギ・スプリングフィールドだ。

当然マスコミ（この場合は報道部か？）も優勝者という美味しい存在を見逃すはずもなく、集団となって追いかける。こうして目の前には1人を追いかける団体という漫画でしか見ることのない光景に出会えたエミヤ一行。

だが、当然眺めてばかりはいられない。一応捜し求めていた人物を見失うわけにはいかないのだから。

「まったく……余計な手間をかけてくれる」

「あははは……」

「追わなくて良いのか？見失ってしまつぞ」

ああ、まったく……

「走るぞ、ルー、キティ！」

「はい！」

「堂々と名前を呼べないのは分かるが……やはりその名で呼ぶんじゃない！！」

今が楽しくてしょうがない。

Side ナギ

しつけえ！

詠春に紹介されて麻帆良祭に参加して、格闘大会で金儲けしたところまでいい。ちよいと飯に金掛けすぎて行動資金が心許無かつたからな！

だがしつけえ！

こんだけの人数に追われるのは何時以来だ？図書館の魔法書を初めてかつぱらった時か？それとも浮遊術の練習だといって何人か滝に突き落とした時か？どさくさにまぎれて雷の暴風を職員室に撃ち込んだ時か？どれにしたって数年ぶりだな、懐かしいぜ！

だからしつこくして！

魔法をぶつ放つのは不可能だ。一応、魔法は秘匿するものだった……あれ？さっきの大会で俺、強化使って跳んだり跳ねたりしてたよな。つまり普通ならありえなくても、大会を見ていた奴らは俺が何メートルと高く跳んでも納得するはずだ。

だったら！脚部強化で屋根に跳びの「待てナギ！」……だが俺は止まん！フハハハハ、俺は止ま「だから待てとっているだろう！」

む、並ばれた……こいつ速いな。強化していないとはいえこの俺様に並ぶとは。

どんな奴かと思ひ観てみれば、一人は金髪のなんともグラマラスな美女。一人は緑色のショートヘアの子供。手には同じ髪型のマリOTTを抱えている。そしてさっきから俺に呼びかける男。身長はあまり高くない、オレンジ色の髪をした青年。全員が全員並外れた魔力を持っている。特にオレンジ髪……なんか前に同じ魔力を感じたことがあるような、ないような。

それに金髪のねーちゃんもどっかで見ただけだな……ま、思い出せないってことはどうでもいいってことだろ！スーパージャンプ……！

「あ、こらー！」

「貴様も大概苦勞するな……」

「ええい、余計な手間をかけてくれる！」

げっ……まだ追いかけてくるのか。……へっ！伊達にメルディアナの職員に逃げ足のナギって呼ばれてねえこと証明してやるぜ！出力、全開……はやりすぎだから、ちよっとだけ。

さあ…… ついてくれるか？

「更に速く！？ちっ。ルー、一瞬注意を逸らしてくれ！」

「えーは、はは、はい！」

………ふ、流石にこのスピードには着いてこれない」「ごめんなさい！」「うおわー！」

緑髪の子供がさっきまで俺がいた場所を殴り、陥没させていた。とっさに回避していなきゃ今更俺はお陀仏かよ。って、緑髪は突っ込んできて、金髪は腕を組んだまま立ってて、オレンジ髪はどこいった。

「上か!？」

「ご名答、ノリ・メ・タンゲレ我に、触れぬ」

いつの間にか手にしていた赤い布が俺の体を縛り上げる。

くそ、ちつとばかりし意表を突かれたがこんな布直ぐに破け……
ふんっ……………ぐぬぬ……………ない。

なんだこりゃ?いつの間にか強化も解けてるし、強化できねえ。
……………如何なっていやがる?って、おお……………なんか、この布……………だんだん締め付け、って、きや……………がつ、た。

や……………べえ……………息……………くる、し……………

「おいシロウ……………こいつ泡吹いてるが」

「うん?……………そういえば拘束を緩めていなかったな」

げほっ!げっほ!あ……………死ぬかと思った。死なねえけどな!

つってもよう……………

「つーか手前えら何しやがる!」

なんで出会い頭にいきなり殺されかけてんだよ俺は！

しかも主犯つばいオレンジ髪は「はて？なんのことかな」みたいな顔でいるのがむかつく！

「なあシロウ」

「あの、お父さん」

「「幻術で見た目が違うから気付いていないんじゃないか？（ないですか？）」「」

「……………なるほど。ナギ、私だ、エミヤシロウだ」

はて……………エミヤシロウ？エミヤ……………シロウ。……………ああ、エミヤ……………って！

「俺の知ってるエミヤはお前みたいに髪はオレンジじゃないし、背も小さくないぞ……………」

そつだ。俺の知っているあいつは白髪で、肌が黒くて、俺よりもかなり背が高い。こいつとあいつの接点なんて喋り方ぐらいしか……………ん？幻術？なら姿が違うのは当然か。むしろ姿違って口調が同じということは、本人？

顔を上げたらなにやら膝を着いてぶつぶつと言葉を発しているエ

ミヤ（仮）と、そんなエミヤ（仮）を笑いをこらえながら見る金髪に、慰めようとしているのかどうしようか戸惑っている緑髪。

……………面白いな、こいつら。

というかなんでエミヤは幻術なんか使って姿を変えてんだ？という些細な疑問が口からこぼれてしまったようだ。

「なんだ、知らないのか？シロウは今賞金首だぞ、それも超大物の」

「は？」

「……………本当に知らないらしいな……………」

なにやら金髪が呆れている。情報収集が得意じゃねーことぐらい自覚してらあ。

それにしてもエミヤが賞金首ねえ……………たいしたもんだ！皮肉ったらしいだけじゃなかったんだな。

「いや、でもそのオレンジ髪がエミヤって決まったわけじゃないしよ、試しに解くぐらいしてもいいんじゃないか？確認って意味でもさ」

「それもそうだな。おいシロウ、何時まで落ち込んでるつもりだ。さっさとこっちに来い」

少しふらふらとした足取りで近づいてくるエミヤ（仮）。……そんなにシヨックだったのか？

「大丈夫ですよお父さん！お父さんは私から見れば大きいですから！」

「くっ……ありがとうルー……ただ、今はその気遣いが非常に苦しい……」

訂正、余程シヨックだったらしい。子供にまで慰められてやがる。つーかお父さんて何だ？

「とりあえずシロウの幻術を解けばいいのだろう？」

そう言って金髪が腕を軽く振るう。するとそこには確かにエミヤがいた。エミヤ（仮）＝エミヤは今ここに成り立った。

てかなんでエミヤの幻術を金髪が解くんだよ。

ああそれはシロウが魔法を使えないからだ、って……情けねーよ
お前。

「緋色の騎士200万ドル……闇の福音600万ドル……銀の愛娘20万ドル、ね」

緑髪：じゃなかった。エミューダの持っている手配書を見せてもらった。

正直、すげえ……としか感想が出てこない。この数ヶ月、いや一年経ったのか？まあどっちでもいいが、それだけでこれだけの額を張られる危険人物って認識されたんだもんな。

俺も自分の実力に自身は持っているが、一年以内に100万ドル越えの賞金首になれといわれたらそりゃあ無理だ。

にしてもよ……

「まさかエミヤがそんな派手なことするとはな……てつきり目立たないようひっそりとするもんだと思ってたがよ」

「……まあ、私にも色々あったのだよ」

「俺もお前の旅事情など興味ないから聞かねえけどな。あ、そうだ……」

丁度いいタイミングでこいつに会えた。神なんてもんを信じてるわけじゃねえけど巡り逢わせていうものは本当にあるのかもしれない

ない。

俺も詠春も腕は確かだが二人だけというのは心許無い。しかし中途半端な奴を引き込んで足手まといになる。だがエミヤなら実力は申し分ない。というか過剰だ。

となればすることは一つ。

「なあエミヤ。一緒に魔法世界に行かないか？」

Side エミヤ

ナギからの突然ともいえる誘い。

「魔法世界へ旅をしに…か」

ナギは私がこの世界へ召喚されるより以前にも旅をしたことがあり、主要と思われる場所、興味のある国は粗方訪れたのだという。

故に聞いたことしかない魔法世界へ行きたいそうだ。

そして実力的に申し分ない私を誘うというのだが、問題も当然ある。

「……確かに興味はある。が、そちらには魔法協会の本部があるの
だろう？それでは私はむぎむぎ捕まりに行くようなものではないか」

そう。エミヤ本人を賞金首と定めた魔法協会がむこう、魔法世界
にはあるのだ。

捕まるつもりは毛頭無いが、私が魔法世界にいると情報が回れば
ナギの目的である旅を十分に行なえない可能性が出てくる。

私はそれを懸念しているのだ。

「ああ、それなら問題ない。爺さんが何とかしてくれるさ」

だが、彼は問題ないと言い切った。

「あのご老人がか？」

……いや、少し考えてみれば分かることか。

魔法が一般的ではないこちらの世界にある魔法を教えるための学
校だ。こちらで起きたことを逐一報告しなければいけないし、その
学校の職員をまとめ先頭に立つだけの実力やリーダーシップも必要
となり、学校を任せられるほどの信頼を得ていなければとても校長

などという役職を任せてもらえないだろう。

果たしてその全て、勤勉さに実力にリーダー性、更には信頼を持っている人間が組織内で低い地位に就いているだろうか。いや、無い。

ああ、それは無いだろうと私は断言する。少なくとも発言を許されるほどにはいるほどだ。

要するにナギの考えというのはこういうことだろう。

「つまりナギはご老人に、協会へ見逃すよう言ってもらおう心算なのか」

「Exactly!」

その通り、か。

「ナギ、といったか。はたしてそんなに上手くいくものなのか？^魔向こうへ行くには専用のゲートをくぐるのだろうか？いくら協会が見逃すといっても賞金稼ぎには見つかりやすいだろう」

「あー……まあ、定期的に魔法使いが大量に送られてくるよりは楽じゃねーか」

確かにいきなり何十という魔法使いと鬼ごっこをする羽目にはなりたくないな。

それにどうせナギのことだ。協会で飼われている魔法使いなんかより、野性味溢れる賞金稼ぎのほうがいい力試しになるし、とか考えているのだろう。

しかし魔法世界と世界を渡るためのゲートか。いまいち想像がで
きん。

「なあルー。専用のゲートとは何だろうな」

「ええ！私に聞くんですか……えーっとう……知りません……」

「確かキティは影のゲートを使えるが、あんな様なものなのだろうか？」

「あの黒いのですか？それをくぐると魔法世界っていう所に着くん
ですか！？」

「おいコラそこの無知二人」

エヴァンジェリンがエミヤとエルミューダをそう呼ぶ。エミヤと
しても肯定はしたくないが事実こちらの世界について知らないこと
のほうが圧倒的に多い。

エルミューダも同じように、裏を知った日こそ早いが逃げ続けて
いたのでそんなものを知る由もない。事実エミヤと初めて会ったと
きに魔法使いを知ったのだから。

事実とはいえ認めたくはない。無知は酷い。

「ま、そこら辺は後でいいだろ？とりあえず行くか行かないかだけ決めてくれよ」

「個人的には、かなり興味がある。可能であるなら行きたいというのが本音だ」

「おっじゃ！んじゃイギリスへ行くか。ゲートあるから」

青年少年幼女×2移動中……

「ところで私以外の連れは何処にいるんだ？」

「げ！……詠春のこと忘れてた……」

「……あ……ハクシヨン！まったくいつまで待たせる心算だナギ……」

第三話（後書き）

あとがきという名のなにか

エヴァンジェリンはいつもの大人スタイル。エルミューダはチャヤゼロをモデル。エミヤシロウは衛宮士郎です、外見。

これもまたちよつとばかり短め。一杯一杯です。つまるところぐだぐだ。中途半端感が溢れている。違和感で包まれている一話でした。

後二つぐらいで魔法世界編に突入する予定です。ええ、あくまで予定です。一つかもしれないし五つかもしれません。というか後二つって何書く気だろ？

これ書いてて感じたことを1つ。地の文から会話へつなげるのがなんか難しい。自分で違和感を感じることがしばしばあります。

それにしてもアクセス数がすごいです。こんな駄文がねえ……ネギまとfateのネームバリューのおかげでしょうけどね。ここまで読まれているといざ書きづまった時とか怖いね。更新おせーよとか書かれそう。感想読みませんけど。いきなり削除とかできないよね。読んでくれる人がいっぱいいると。

あと作者は感想をくれるより、ポイント評価のほうが喜ぶという奇妙な方です。無理には言いません。本当に、無理には言いません。ポイントが増えたからって執筆速度が上がるわけでもないです。

これを読んだ人が、「じゃあポイントなんか入れね」とか「だったら感想を書いてやるぜ」みたいな人だと作者が悶えます。感想が増えてる的な意味で。

てか、感想を欲しがらない作者ってなんなんだろうね。

評価点が総合得点につながると知った今日この頃。……ホント、無理に評価しなくていいですからね？

あとは特筆することもないのでこれにて終了いたします。ありがとうございました。

書き忘れてた。この駄文は作者の自己満足で完結しており、この場に投稿しているのも「投稿した」という事実を欲しているためです。

何が言いたいのかというと、投稿しているのは「読んでもらいたい、意見を聞きたい」という理由からではなく全て自己を満足させるための行為であるということです。

意識をすると「こんなクソみたいな作者の書いているクソみたいな文章なんて読まなくていいですよ。時間の無駄ですから」ってこと。本当にすみませんね。こんな作者で。

第四話（前書き）

投稿ペースの目標：この作品は二ヶ月以上更新されていません、と表示させないこと。

きっとパソコンのＣドライブの容量が常時５ＭＢ以下なのは自分だけのはず。あと、ヘッドフォン新しくしました。DENONはやっぱ最高ですね。思わずインドア用としてＡＨ－Ｄ７０００を、アウトドア用としてＡＨ－Ｄ１０００ふたつ買ってしまった。しかもamazonではＤ７０００が８万円を切っているという異常事態。別に後悔しているわけではないがそっちで買えば１０万もの出費にならなかつたなあ…とね。後悔はしていない、後悔はしていないんだよ。１２万の出費でもねえ……はあ…。

第四話

アーチャー……いや、エミヤシロウと呼ぶべきか。私は奴の傍に
いるとどんだん奴のことがわからなくなる。

自他共に認める愚か者だと奴は言った。ああ、それは私も肯定す
る。正義を求めるなど愚者あるいは馬鹿でなければ思いつかん行動
だからだ。

だというのに奴は所謂正義の味方である協会側の人間でもためら
うことなくやる。所謂悪に対しても同じ対応だったりする。

その様子を見ていれば、まるで奴には既に貫く何かがあるように
も感じられるのだ。

『幸せは、みな同じ顔をしているが人の不幸は、それぞれに様々
な顔をしている』というように『正義の味方は、みな同じ顔をして
いるが悪の信念は、それぞれに様々な顔をしている』

つまりはこういうことなのだろう。

奴には一つの信念があることは確か。だがそれは奴の求める正義
とはまた別の貫くものであって、求める行為とは特に関係もない。
追加で言えば、正義の味方の正義はもう聞いたから相手にする必要
はないといったところか。

奴はいろいろな面を持っている。

エミュに向ける温かく柔らかい笑みの奴。私に向ける皮肉ったら

しい笑みの奴。自分自身に向けるどこか嘲笑めいた笑みの奴。敵に向ける感情の削り取られたような顔の奴。

だからこそ私は奴がわからなくなる。どれが奴の根本なのかが。

……おかしいのだろうか。不死である私が、絶対強者であるこの私が、自分以外に興味を持たなかった私が、エミヤシロウという男をもっと知りたいと思うことは。

……分からない……

……故に、知りたい……

……この、エミヤシロウという存在を……

……この、ぬるいお湯に浸かりながら……

正義を求める正義の味方

World's noblest justice
Magister Mag
i .

第四話

S i d e エヴァンジェリン

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ」

パチッと、本当に申し訳なさそうに火花が散る。 失敗。

「プラクテ ビギ・ナル 風よ」

風が吹いた、と思えばそれは自然に吹いたそよ風。つまり魔法は失敗。

「プラクテ ビギ・ナル 光よ」

魔法練習用の可愛い杖がキラッと光った。太陽光を反射して。よ
うするに、失敗。

「プラクテ ビギ・ナル ……」 失敗

「プラクテ ビギ・ナル ……」 失敗

「プラクテ ……」 失敗

「プラク ……」 失敗

「プラ ……」 失敗

「プ ……」 失敗

「p(ry ……」 失敗

・

・

・

・

「やはりルーには魔法を使うことができないようだな」

「うう……申し訳ないです……」

さて、ここはウエルズ。ナギ・スプリングフィールドとシロウは校長へ話をつけに学校へ行っている。

対して私たち吸血鬼組みは、いやエミュは元だが、幻術で姿を変えているからといってわざわざ魔法使いの巣窟に行くつもりはない。

そういうわけで私とエミュは離れの丘で魔法の練習に勤しんでいるのだが、やはりというか、エミュは魔法が使えないようだ。旅をしていた頃はとりあえず基本的な魔力による強化しか教えていなかったから確信があつたわけではないが、境遇を考えれば直ぐに分かることだ。特に私は。

「エヴァさんが褒めてくれた魔力だって魔法が使えなかつたら意味ないじゃないですか……私の馬鹿」

「……まあ、精霊に嫌われていれば仕方ないことさ」

「でも……」

「いいか？世の中にはどんなに努力しても魔法を使えない人間は五万といる。だがお前は精霊魔法以外は使えるんだ。それだけでも御の字と思え」

エミュは精霊魔法が使えない。だがそれは闇の眷属に対して総じて言えることだ。

吸血鬼や悪魔といった存在は精霊に嫌われてしまったため、人間と同じように協力してもらって魔法を使うことはできない。

だが闇の眷属となった暁には膨大な魔力を得ることが出来るため、それに物を言わせて無理やり従わせ、収束させ、魔法を行使することができるとだ。

エルミューダは吸血鬼となり魔力を手に入れたものの、精霊を従える術を知らぬまま、精霊を従えるだけの力を身につける前に人間に戻ってしまった。

人に戻ったのだから魔法が使えてもおかしくはないと思うのだが、どうやら精霊は鼻が利くらしくエルミューダに手を貸そうとはしない。

本来ならば私がエミュに、従える術を教えるべきなのだろうが、効果は望めそうにない。確かにエミュは人間としては十分な魔力量だと言えるだろう。しかし、私や他の眷属に比べるとあまりにも少ないのだ。

要するに、エミュには精霊魔法を諦めてもらうのが一番賢いのだ。

「とりあえず当面は体作りだ。ルーはその歳からは考えられないほどバネがいい。基礎体力も十分だ。体捌きもいい。何より呑み込み

が速い……………ふむ。合気柔術でも教えてみるか」

「わかりました！……………ところでエヴァさん」

「ん？なんだ」

「成長しきつてない体を鍛えると背が伸びなくなるって本当ですか」

「……………はあ？」

「わたし、大きくなりたいです。具体的には160cmは欲しいです！更には言えばお父さんと二人で肩を並べて、親子に見られないくらいになりたいです！！」

一気に捲くし立てるエミユ。

普段が大人しいだけにこう積極的になったときのギャップが激しく、エヴァンジェリンも思わず身を半歩引いてしまう。

まあとりあえずだ……………

「落ち着かんか馬鹿者」

中指を折り曲げ親指で固定。エミユの額に向けて、放つ。つまりところのデコピンである。

だが、ただのデコピンと思うことなかれ。魔力によって強化を施したためその威力はただのデコピンとは一線を画している。

周囲が見えていない興奮状態……いや、錯乱状態であることと、デコピンという意外な攻撃の予想外な威力のためか、受身を取ることもなく無様に地面に叩きつけられる。

「くへ！」

エミユ沈黙。

「このように魔力で身体能力を強化すれば無理に体を鍛えることもない。とどのつまり身長が伸びなくなることもない。わかったか？」

いまだ沈黙。

「……………と言っても、聞こえていないか」

仕方ない。とりあえず鞭打ちになっっていないことを祈ろうか。

Side エミヤシロウ

エヴァンジェリンとエルミューダから離れ、アーチャーことエミヤシロウはナギ・スプリングフィールドと共に再びメルディア魔法学校の校長室に訪れていた。

目的は当然、緋色の騎士の魔法世界での活動許可を求めてだ。もつとも、活動許可と言うよりも単に見逃してくれというものだが。

「フオッフオッフオ……久しぶりじゃのうナギ、シロウ君」

「かれこれ半年くらいになるのかな？」

「古い先の短いジジイにはなかなか堪えるの。ホッホッホ」

「そんなことあどうでもいいんだよ爺さん。単刀直入に言うぜ？シロウの賞金を取り消してくれねーか？」

……おい。おいこらナギ。確かにまわりくどい言い回しでない分好ましくは感じるが、あまりに直球過ぎて寧ろ不快になるぞ。そのような無遠慮な言い方では通るものすら通らなくなるぞ！

「賞金を消すことはできるが、協会へ追わないよう進言し、追われない立場にすることは可能じゃぞ」

そして可能なのかご老体！？というよりも、よくあの一文でナギ

の要求を見抜けたな。

「もちろん、いくつかの条件はあるかの」

一つ。メルディアナ魔法学校現校長であるユーバレ・スプリングフィールドのサイン入り許可証をゲートポートにて提出すること。

一つ。立派な魔法使い、もしくはそれに準ずるだけの實力を持つ推薦された魔法使いを同行させること。

さしあたっては以上の二つのようだ。その中に「問題視されるような行動は起こさない」といったものがないのは条件にするまでもない常識だからか。はたまた問題を起こせば問答無用で捕まえることができるため、あえて条件として提示していないのか。

「随分と条件が甘いのではないか？ 仮にも私は200万の大物だぞ？」

「異例じゃ。お主の賞金のかけられ方が危険とされたのが原因ではない。協会の定義する悪を捕らえ、実力と善意を兼ね備えた人物だと思われた。協会としては喉から手が出るほど欲しい理想的な人物として、その情報を得るために掛けられたのがお主の賞金じゃ」

「……………なるほど。エヴァンジェリンと一緒になければ悪事を働く心配もない、と」

「流石に真祖、それも闇の福音に同行許可は出せんからの」

「あゝ……要するにエミヤは連れて行けるんだろ？」

「そうじゃ」

今までの話をきちんと聞いていたのかと問いたくなるほど、要点だけをまとめた質問をするナギ。そして私を連れて行けると分かったら、もう話すことはないという風に、笑みを浮かべ、部屋を出て行った。

まあ、ナギにしてみればもう用はないのだから当然と言えば当然か。学生をやっていた頃に何か苦い思い出でもあるのだろうか。この部屋に。

「それにしてもナギのやつは相変わらずじゃのう……。いきなり旅に出ていきなり帰ってきたら魔法世界へ行くなどと」

「だが、それが彼らしい……。だろう？」

「フオツフオツフォ……エミヤシロウ。お主の魔法世界への渡来を、魔法使いナギ・スプリングフィールドを同行者とすることでこのユニバース・スプリングフィールドが許可しよう」

そういつて、英語ではないどこか神秘的にすら感じる不思議な文字で書かれた紙にサインをした。

「ゲートが開くのは三日後の零時。それまでに一度ここにくるよう
にナギに伝えておいてくれんか？」

ああ。別にそれぐらい構わないさ。だが、私がそれをナギに届け
に行ってもいいんだぞ。最終的には提出するのだし、私が持つてい
てもいいと思うが……。

「フオ！あんな型破りな性格で底の抜けたほどの馬鹿でもわしの可
愛い孫じゃしの。久しぶりに話もしたくなるものさね」

私の考えを見抜いたのか、そう口にした。

そこには僅かではあるが寂しさが感じてとられる。

なるほど。いつの世の何処の時代のどの国でも、かわいい子に旅
をさせることは悲しいのかな……。

「ああ、了解した」

エミヤシロウの過ごしたウェールズでの三日間

初日(というよりも今日のこと)

ナギ&エミヤは校長と会談と言つかを済ませた後魔法を練習しているはずだが何故か気絶しているエミュ&エヴァと合流。とりあえずナギの家に向かうことになった。

なつたのだが……

「ようやく見つけたぞ、ナギ！」

「げっ、スタンのジジイ……いい加減しつこいつの！」

「ここで会ったが……数年と数ヶ月ぶり！今度こそ貴様を教育してやるぞ！」

「ちい！すまんシロウ。俺は早々に離脱するぜ。ちなみに家はここを真っ直ぐ行けば見えるはずだ、じゃあな！」

と言った感じにナギは逃走。それを追うようにしてスタンと呼ばれた、パツと見た感じ50過ぎの男性が杖を掴み空を駆けていった。

今更ながらその光景を見るとこの世界は私のいた世界とは違っていたと思ひ知らされる。ここ数ヶ月で見慣れた筈なのだがそれでも違和感が拭えずにいる。

いや、そんなことはどうでもいいか。

とりあえずナギの家を見つけることが先だろう。

「やはりと言つべきか……」

足を進めた私の後ろで、エヴァがなにやら小声で呟く。

「あいつ、相当な悪ガキのようだな」

「……く」

聞こえてしまった私は、苦笑いをする事しかできなかつた。なんせ、私の召喚に使われたという本は図書館から無許可で持ち出したものだというのだから。

ついでにエミュが目を覚ました。私が負ぶっていると分かれると顔を真っ赤にして（私からは見えなかつたが）慌てた後大人しくなつた。

結論から言えば、ナギの家はそれほど遠くなく、歩いてものの数分でその姿を確認できた。

もつとも、それが家だと、私たちが気付かずに通り過ぎてしまったからその倍以上の時間がかかったわけだが。

家を見逃すなんてそんな馬鹿な、と思わないで欲しい。

「もはや植物に絡まれて、壁の色すら確認できない家があるとは普通思わないだろう……」

「ケホツケホツ……ほ、埃がすご……ケホ」

「御主人ノ別荘ノ倉庫トイイ勝負ジャーナールカ？」

「なっ！別荘の倉庫はここまで酷くないぞ！それに時々掃除もしているだろうが！」

「ナルホド。御主人ノ時々ハ20年ニ一回トイウコトカ」

一年も放置し続ければツタは伸び放題、埃は積もり放題。つまりはそう言うことである。

それにしてもエヴァは掃除を20年もしないのか？不死者だとそういう感覚も変わってくるのだろうか。

「……なあ、シロウ。最近チャチャゼロが貴様に似てきていると思

うんだが……気のせいか」

「ソナナコトアルワケネーヨ」

「……少なくとも私はこんな言葉遣いはしていないと思うのだが？」

「勘違い八止シテ貰イタイナ御主人。従者デアル私モ恥ズカシクテ仕方ナイ。……ケケ」

「真似してるじゃないか！思いつきり！！」

なにやら騒いでいるエヴァは放っておくとして、もう一度屋内を見回す。

本やらなにやらは錯乱しているし、埃も積もるに積もっている。掃除でもしなければとてもとても生活のできる空間とはいえない。

私と同じ結論に到ったのか、エミュは上着の袖を捲り上げて握りこぶしを作っていた。

それにしても、私は召喚者の家の片づけをする運命でもあるのだろうか？

..... 終わった。

..... 長かった。

時間を計っていないが、この異常なまでも達成感と疲労感から随分時間がかかったと思う。手伝ったくれたエミユも座り込んでしまっている。

そしてエヴァは木陰でうとうととしていたのか、欠伸をかみ殺しながらこちらへやってきてソファーに寝転がった。とてつもなく苛立ちを感じるが、我慢する。

外を見るともう日が傾いていた。

夕食。

セイバー..... 君の気持ちを、俺は少しだけど、理解できたかもしれない。

そう。イギリス料理とは、料理人が味をつけて料理を提供するものではないのだ。今回私はそれを思いっきり失念していた。しかもここはナギの家。気の利いた調味料があるわけでもない。

良く言って「素材の味を生かす調理」。悪く言って「味付けをしない料理」。

出されたのは、なんかよくわからない焼いた肉と、煮込みすぎて最早形を想像できなくなった野菜だ。

私と行動を共にしていたエミュとエヴァは勿論のこと、当の本人であるナギもまずそんな顔をしながらただただ口に運んでいた。

二日目

とにかく、朝早くに起きた。最早、朝と呼んでいいのか分からない時間に起きた。

何故こんな時間に起きたのかと問われれば、朝食のためだと明言しよう。

できることなら食材から何からまとめて私が用意したいのだが、生憎店が開かない。なら私の解析魔術を最大限に発揮し薬味として使えるものを探し出す。これが目的だ。

できることなら塩、胡椒、醤油、味醂といった調味料が好ましいのだが、この際そんなことは言っていられない。

さあ、ミッション・スタート
行動開始！

戦果リスト

- ・カボスのようなもの（酸味の強い柑橘類ではある）
- ・山椒&山椒の葉のようなもの（葉の形は違うが含まれている成分、磨り潰した時の香りが酷似している）
- ・食べそうな野草（少なくとも毒素や強い苦味の要因は含んでいない）
- ・池で釣った淡水魚（カジカ、英名ではミラーズサムと言ったか。そしてブラウントラウト、これは鮭科の一種。よくカジカは食べられずに生き残っていたと思っただよ）

上々上々。

野草に関してはおひたしにすれば問題はない。醤油がないのは寂しいが、そのままでもいけるだろうし柑橘の果汁をたらしでもいいだろう。

カジカにブラウントラウトはそのまま焼き魚にしよう。山椒、もしくはカボスを薬味として使えば飽きずに食べることもできるだろう。

しかし、焼き魚におひたしか。白米と味噌汁も作ればよかったんだが……無い物ねだりは止めよう。昨夜よりは食を明るく進めるためと考えればこれだけでも十分じゃないか。

そう考えると、帰る足取りが少し軽くなった気がした。

一言で言えば朝食は成功した。特にナギは地元で上手いものが食べられると思っていなかったのか、うめーうめーと言って食べてい

た。

調子に乗ってエミュの魚に手を伸ばしたので、私が強化したスプーンを投げたら、避けたと同時に椅子から転がり落ちた。どうやらエヴァが糸で思い切り椅子を引いたらしい。

そんなことがあって今は午後の2時を回ったところだ。昼はエヴァが別荘まで行き、必要な調味料と共に簡単ではあるが口に運べるものを持ってきてくれたのでそれで済ませた。

エミュはチャチャゼロと一緒に食材の買出しへ行って、エヴァはどこかで寝ているのだろう。そして私はと言うと、郊外の丘、エヴァとエミュが魔法の練習に使用した場所でナギの魔法の特訓を見ている。

「ッシ！」

無詠唱で魔法の射手を飛ばす。そして同時に逆の手を振り上げ

「雷の斧！」

斧を振り下ろす。

「エト・アルマ・ウエルバ・ウルネラント！契約により我に従え高殿の王 来れ 巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆 百重千重と重なりて

急いで駆けつけたスタンさん。それを見てすぐさま逃げ出すナギ。さながらイタチごっこだ。

しかし本当にこちらの魔法はすごいな。キーリプル・アストラペー……千の雷か。あれをもっと狭い範囲に絞ることができれば想像を絶するものになるのだろっな。むしろ広範囲に設定し、より多くを倒すための呪文か。

どちらにしても恐ろしいな。広範囲逃げ場なしの強力な雷。対象を少なく見た集中的な、文字通り必殺の雷か。

あとでナギに聞いてみることにしようか。こちらの魔法は形状や範囲を変えることができるのかと。

結果、ナギは方法を知らなかったが試してみる価値はあると言い余計に魔法の特訓に精を出し、スタンさんに追いかけられるようになったとき。

ちなみに本日の夕飯は、エヴァの持ってきた調味料とエミユの買ってきた食材を使って得意の和食を振舞った。ナギの猛烈なリクエストにより、カジカを釣ってきて刺身を追加した。

エミユは少し抵抗を見せていたが私、エヴァ、ナギがおいしそうに食べているのに感化され、一口口にしたらすっかり気に入ってしまった。

三日月

朝食後、ナギはメルディアナ魔法学校に向かった。ナギは許可書を取りに行くだけのつもりだろうが、恐らくご老体ユーバレは長く引き止めるだろう。

昼食は用意しておかないほうがいいのだろうか…。

そして人間の直感と言うものは中々馬鹿にできず、ナギは昼を回っても帰ってこなかった。

食器も洗い終わり、魔法世界に持っていく必要な荷物をまとめ終わった後エミユがやってきた。

「あの、お父さん……いま、いいですか？」

「いいもなにも、私の用が終わるまで待っていてくれたらろう？当然、構わないさ」

「えっと、あの……それじゃあ……い、いっしょにあの丘まで来てください」

時間にして14時。一日のうちにも最も気温が高くなることもある時間だが、ここでは太陽は上手く雲に隠れ、心地よい風もあり暑さを感じさせない。

そこに立つのは身長が180cmを越える大柄な青年と130cm程度の小柄な少女。いつもの二人であれば言葉こそなくても、その間に流れる空気は心地よい雰囲気なのだが、今このときは少しばかり違っていた。

発生源は主に少女のほう。言いたいことがあるのにどう口にしていいのかが分からないと言うような、そんなもどかしさを感じる。

ふう…仕方が無い。少し背中を押すとしよう。

「それで、何のようだエミユ？」

「……………」

「私に何か、言いたいことがあるのだろうか？」

この子は本当に優しい子だが、あまり自分を表に出さないからな。エヴァのおかげで改善はされつつあるがそれでも弱い。

「流石の私でも言葉にしてくれなければ分かるものも分からなくなってしまう」

「……………お父さんは……………魔法世界って言うところに、行くんですよね」

蚊の鳴くように細い声でエミユが口にする。そこには明確な寂しさを感じてとられた。

それはそうだろう。自分の父親になってくれた大好きな人が、会うことのできないほど遠い場所に行ってしまうというのだから。

「会いに行くことも、来てもらうことも……………難しいんですね……………」

「……………ああ、そうだな」

実際それがエミヤの唯一とっていいほどの心残りと言うべきもの。

エミユの傍にはエヴァがいてくれる。事情を話せばきっとユーバシ老人も匿ってくれるだろう。しかしそれでも、かつての衛宮士郎のように、家族と離れているうちに何かが起こってしまうかもしれない。

それが、怖い。

私は、エルミューダと言う一人の少女を救った。そしてこれから、守っていききたい。そう思っている。

だから、怖い。

「……大丈夫です」

「え？」

「……大丈夫です。私は。今は、大丈夫じゃないけど……大丈夫です」

「エミユ……？」

「お父さんがいないと……寂しくて、大丈夫じゃ……なく、なっ……グズ……ちやうけど……」

「……」

「わ、た、……し、も……強くなる。おとうさんに……心配……ズツ……されないぐらいに、づよくね……なるからあ……」

思わず、絶句した。

大丈夫だから。大丈夫じゃないけど、強くなるから。心配されないぐらいに、強くなるから。だから……

「……ツズ……グズ……がんばっ、て」

頑張っつて。

「……エミユ…」

ほとんど衝動的に、エミユを抱きしめる。

抱きしめてから気付く、この子の小ささに。抱きしめてから感じる、この子の弱さを。

抱きしめてから気付く、この子の大きさに。抱きしめてから感じる、この子の強さを。

「…本当に…私は、父親失格だな…」

「そんなこと…スン…あり、ません」

「いや、失格もいいところさ。娘に勇気付けられ、娘に決心を固めさせられるとは」

大声を上げてエミユが私にしがみつく。

初めてあった日の夜も、こんなことがあったなと、どうでもいいことを考えながら

「ああ…大丈夫だよ、エミユ。私も…これから頑張ってくるから」

いつか赤い少女と交わした誓いと同じ言葉を、目の前の銀の少女に誓う。

ナギを交えての夕食を終えて直ぐ、来客があった。名を近衛詠春という。どうやらナギの同行者のようだ。

お互いに自己紹介がてら夕食のあまり（肉じゃがと金平ごぼう）を差し出したら、なぜかそのまま和食談義へと進路を変更してしまった。そんなこんなでゲート前、現在23時50分。

そこには魔法世界へ行くエミヤシロウ、ナギ・スプリングフィールド、近衛詠春の姿。

旧世界へ残るユーバレ・スプリングフィールド、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、エルミューダ・K・ホンドの姿。

「それでは、シロウ君にナギ、詠春君もしつかりとするんじゃないぞ」

「わかっているさ」

「へ！当然だつてのー！！」

「もちろんです」

まずはユーバレがその姿を消す。

すると詠春はナギの腕を引っ張ってゲートへ向かう。後ろから「
ちよ、何すんだ詠春?」「空気を読め、ナギ」と言っていたのは聞
かなかったことにしよう。

そして残るのはエミヤ、エヴァ、エミユの三人。

「…………お父さん」

「エミユ……………いって、きます」

「あ……………はい!いってらっしゃい!」

たったそれだけ。

いってらっしゃい、いってきます。

それは、帰ってくるという、物凄く簡単で、物凄く当たり前な約
束。家族であれば誰でもする、他愛のない挨拶。

だからこそ、この二人にはそれが当然なのだ。

「私からも言いたいことは多々あるが……………帰ってこい」

「エヴァ…………」

「私が、私たちが、貴様の帰ってくる場所を守ってやる。だから帰ってこい、アーチャー。いや……シロウ」

「当然だ。エミュにも誓ったが、エヴァ…君にも誓おう。……いつてきます」

最早交わすべき言葉はない。踵を返し、静に、踏みしめるように、一歩ずつ、ゲートを目指す。

背中にはもう、心配事はない。強い二人の家族が、取り払ってくれたから。

後ろでエヴァがそっと小さな声で何かをささやいた。それは風に乘って、私の耳に届く。本当に小さく、か細く、それでいて、願いの籠った言葉が。

ぬるま湯は、維持するのが大変なんだ。私とエミュだけでは、直ぐに冷めてしまうからな？シロウ

さて……再び、旅を始めよう。家族の絆を確かめ、私の道を探す旅を……。

第四話（後書き）

あとがきつつーかなんつつーか

はい、再び勝手な設定を作った。闇の眷属は精霊魔法が使えない。公式とかでこの設定ってないよね？最早調べることを放棄した男。だってヘルマンのおっさんとか魔法使わなかったしさ、いいよね？別に。

ナギのお爺さんのなまえユーバレ！！夕晴れ。

薬味とか魚とかについてはつつこまないでね。

あとなんか前のあとがきで二つでつていたけど、1個になったね？

後は特に本文について言いたいことはないし、言い訳を少々。

まずは投稿スピード。こんなもんです。確かに4、5月は地味に用事が多かったけどね？

具体的に上げてみよう。

4月中：特に予定なし。終盤には5000文字ほど打っていた。

5月中：1と2日は山に登ってた。辛かった

4日はヘッドフォンを探してた。出費12万ね

14、16日は山に登ってた。大変だった

21日は歯医者行った。特に何もなかった

22日は「K S L Live World 2010 - Way

to the kud Wafutar」に行ってきた。超楽しかった。

こんな感じ。ちなみに24日にここまで書き終わった。

26〜28日は中間テスト。勉強しろよ、俺。

そだ。ギャグパートってどう書けばいいんだろうか。

魔法世界にいてもエヴァやエミュの視点で話を書いたほうがいいんだろうか。

あと前のあとがきのせいで見限られると思っていたら全然お気に入り登録数が減ってなくて驚いた。皆さんも物好きですね。ゲテモノ料理は食さないどころか目に入れないほうがいいですよ？気分を害しますから。

自分がよく読む作品を投稿している人のお気に入り小説の中にこれがあった。

正直、嬉しいのだけれど、どうしていいのかが分からない。読んで頂いていることに感謝すべきなのか、このようなものを読ませたままて申し訳なく謝罪すべきなのか。

どうすべきだろうねえ…

最近、自分が何を書きたいのかが分からなくなってきた。重症だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524j/>

正義を求める正義の味方

2010年10月9日18時21分発行